平成 13 年度

富士市内遺跡・伝法 国久保古墳

埋蔵文化財発掘調査報告書

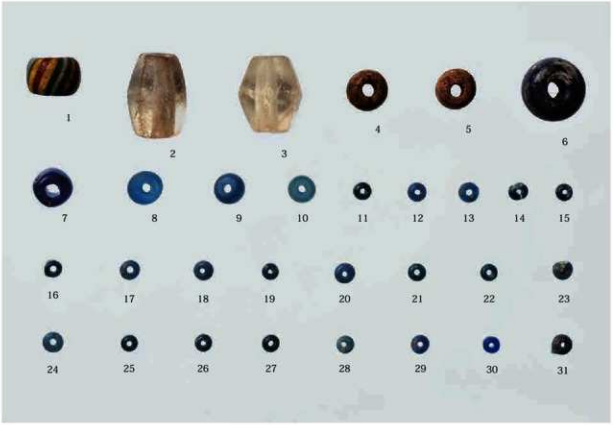
2011 年 3 月

富士市教育委員会

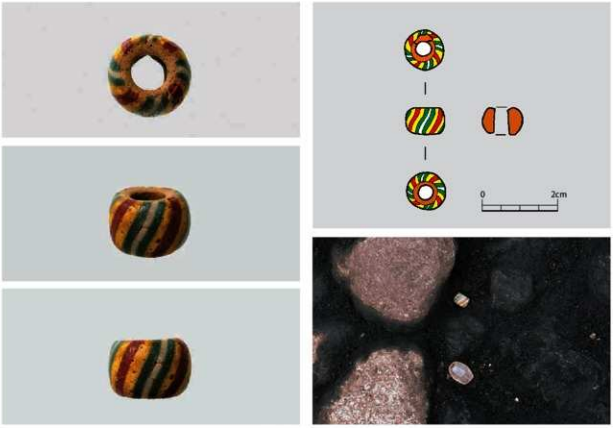
国久保古墳横穴式石室（南東から）

国久保古墳主要出土遺物

巻頭図版 2



国久保古墳出土玉類

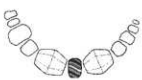


国久保古墳出土雁木玉

平成 13 年度

富士市内遺跡・伝法 国久保古墳

埋蔵文化財発掘調査報告書



富士市教育委員会

例　言

1．本書は、静岡県富士市内において富士市教育委員会が平成 13 年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。平成 20 年度に旧富士市と旧富士川町が合併しているため、ここでいう富士市内とは、 旧富士市域を指す。

2．調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地およびその近接地における開発行為等に伴い、事業者からの依頼を受けて富士市教育委員会が実施した。

3．本書の執筆・編集分担は以下のとおりである。

第１章・第２章　　若林美希（文化振興課臨時職員）

第３章　第１節～第３節・第４節２～４項・第５節　　藤村　翔（文化振興課職員）

第３章　第４節１項　　杉原重夫（明治大学地理学研究室）

金成太郎（明治大学文化財研究施設）

4．本書に掲載した出土遺物実測図は佐野五十三・稲葉万智子・小田貴子・金剌才己（文化振興課臨時職員）が実測・トレースした。

5．遺物写真は巻頭図版１～２、図版 18 ～ 27 を寿福　滋氏・酒井純子氏（寿福写房）が撮影し、それ以外を小田貴子が撮影した。

6．本書で報告した調査にかかわる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。

7．本書中で示す埋蔵文化財包蔵地範囲は、平成 13 年度時点のものである。

凡　例

1．本書における標記は次のとおりである。

Tr：試掘坑・トレンチ　　SB：竪穴建物跡　　SH：掘立柱建物跡　　SX：性格不明遺構

SD：溝状遺構　　SK：土坑　　P：土器・土製品　　S：石

2．本書で示す高度は海抜を、方位は座標北をそれぞれ用いた。

3．各調査報告の冒頭に示す調査地位置図の縮尺は全て 5000 分の１である。

4．その他の挿図の縮尺は、各図に添付のスケールで示す。

5．土器および土層などの色調は『新版　標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修）による。

6．土器実測図は、断面を次のとおりに塗り分けることで種類の違いを示した。

土師器　　須恵器　　陶器

また、石器の使用面についてもトーンで表現した。

7．出土遺物観察表について、（　）を付して記した法量は推定値であり、－ は計測不能であることを示す。

残存率は、図示した部分での残存する割合である。

本 文 目 次

第１章　富士市内遺跡の概要
第１節　地理的環境…… 1
第２節　歴史的環境…… 2

第２章　市内遺跡の調査
第１節　調査体制と調査件数…… 5
１．調査体制…… 5
２．調査件数…… 5
第２節　発掘調査報告…… 6
１．国久保遺跡　第２地区…… 6
２．沖田遺跡　第 119 次調査地点 …… 7
３．船津７古墳群　第７地区…… 9
４．花守遺跡　第２地区…… 10
５．比奈１古墳群　第５地区－２次調査…… 11
６．児森遺跡　第２地区…… 12
７．舟久保遺跡　第 43 地区 …… 13
８．沖田遺跡　第 120 次調査地点 …… 14
９．沖田遺跡　第 121 次調査地点 …… 15
10．桑崎遺跡　第１地区 …… 21
11．花守遺跡　第３地区 …… 22
12．国久保遺跡　第３地区 …… 23
13．沖田遺跡　第 122 次調査地点 …… 27
14．比奈１古墳群　第３地区 …… 28
15．石坂２古墳群　第３地区 …… 29
16．舟久保遺跡　第 45 地区 …… 30
17．高山古墳群　第２地区 …… 31
18．上の段遺跡　第２地区 …… 32

第３章　伝法 国久保古墳の調査 …… 34
第１節　調査経過 …… 34
第２節　伝法周辺の古墳群の概要 …… 36
第３節　国久保古墳の調査成果 …… 42
第４節　後論 …… 62
１．国久保古墳出土埴木玉の化学組成…… 62
２．国久保古墳出土遺物の検討…… 66
３．国久保古墳の評価と被葬者像…… 74
４．伝法古墳群の構造と展開…… 77
第５節　結語 …… 80

挿　図　目　次

第１章　富士市内遺跡の概要
第１図　地形区分図……1
第２図　富士市内主要遺跡分布図……4
第２章　市内遺跡の調査
1，国久保遺跡　第２地区
第３図　調査地位置図……6
2，沖田遺跡　第119次調査地点
第４図　調査地位置図……7
第５図　トレンチ配置図・土層断面図……7
第６図　出土遺物実測図……8
3，船津７古墳群　第７地区
第７図　調査地位置図……9
第８図　トレンチ配置図・土層断面図……9
4，花守遺跡　第２地区
第９図　調査地位置図……10
第10図　トレンチ配置図・土層断面図……10
5，比奈１古墳群　第５地区－２次調査
第11図　調査地位置図……11
第12図　トレンチ配置図・土層断面図……11
6，児森遺跡　第２地区
第13図　調査地位置図……12
第14図　トレンチ配置図・土層断面図……12
7，舟久保遺跡　第43地区
第15図　調査地位置図……13
第16図　トレンチ配置図・土層断面図……13
8，沖田遺跡　第120次調査地点
第17図　調査地位置図……14
第18図　トレンチ配置図・土層断面図……14
9，沖田遺跡　第121次調査地点
第19図　調査地位置図……15
第20図　トレンチ配置図・土層断面図……15
第21図　７トレンチ　遺構・遺物出土状況図……16
第22図　８トレンチ　遺物出土状況図……16
第23図　出土遺物実測図（１）……17
第24図　出土遺物実測図（２）……18
10，桑崎遺跡　第１地区
第25図　調査地位置図……21
第26図　トレンチ配置図……21
第27図　１トレンチ・９トレンチ　土層断面図……21
11，花守遺跡　第３地区
第28図　調査地位置図……22
第29図　トレンチ配置図・土層断面図……22
12，国久保遺跡　第３地区
第30図　調査地位置図……23
第31図　トレンチ配置図・遺構出土状況図……23
第32図　SB01実測図……24
第33図　SK01・SK02・SK03実測図……24
第34図　SD01・SD02実測図……25
第35図　Pit01・Pit02実測図……25
第36図　出土遺物実測図……26
13，沖田遺跡　第122次調査地点
第37図　調査地位置図……27
第38図　トレンチ配置図・土層断面図……27
14，比奈１古墳群　第３地区
第39図　調査地位置図……28
第40図　トレンチ配置図・土層断面図……28
15，石坂２古墳群　第３地区
第41図　調査地位置図……29
第42図　トレンチ配置図・土層断面図……29
16，舟久保遺跡　第45地区
第43図　調査地位置図……30
第44図　トレンチ配置図……30
17，高山古墳群　第２地区
第45図　調査地位置図……31
第46図　トレンチ配置図・土層断面図……31
18，上の段遺跡　第２地区
第47図　調査地位置図……32
第48図　トレンチ配置図・土層断面図……32
第49図　出土遺物実測図……33
第３章　伝法 国久保古墳の調査
第50図　伝法古墳群分布図……37
第51図　国久保古墳検出状況図……42
第52図　確認調査トレンチ配置図・土層断面図……43
第53図　横穴式石室展開図……44
第54図　床面遺物出土状況図……46
第55図　床面遺物群分類図……47
第56図　床面出土土器実測図……48
第57図　鳴目金具断面模式図……49
第58図　床面出土刀装具実測図……49
第59図　床面出土鉄鏃実測図（1）……51
第60図　床面出土鉄鏃実測図（2）……53
第61図　床面出土鉄鏃実測図（3）……54
第62図　床面出土鉄鏃実測図（4）……55
第63図　床面出土馬具実測図……56
第64図　床面出土装身具実測図……57
第65図　床面出土玉類実測図……57
第66図　雁木玉製作工程の復元……67
第67図　国久保型雁木玉の諸例……69
第68図　雁木玉出土地分布図……71
第69図　国久保古墳出土遺物の編年的位置……74
第70図　国久保古墳出土鉄鏃の分布……75
第71図　伝法古墳群の構造……79

挿 表 目 次

第１章　富士市内遺跡の概要
　第１表　富士市内主要遺跡名表……4
第２章　市内遺跡の調査
　第２表　平成 13 年度発掘調査一覧……5
２．沖田遺跡　第 119 次調査地点
　第３表　出土遺物観察表……8
９．沖田遺跡　第 121 次調査地点
　第４表　出土遺物観察表（１）……18
　第５表　出土遺物観察表（２）……19
　第６表　出土遺物観察表（３）……20
12．国久保遺跡　第３地区
　第７表　出土遺物観察表……26
18．上の段遺跡　第２地区
　第８表　出土遺物観察表……33
第３章　伝法 国久保古墳の調査
　第９表　伝法古墳群一覧表……39-40
　第 10 表　土器観察表……59
　第 11 表　鉄鏃観察表……59-61
　第 12 表　玉類観察表……61
　第 13 表　国久保古墳出土硬木玉の化学組成……63
　第 14 表　古墳出土硬木玉集成……70

図 版 目 次

（図版１～５：現地調査写真　６～12：出土遺物写真）

図版１　1．02　沖田遺跡 119 次　２Tr　土層
　　2．02　沖田遺跡 119 次　４Tr
　　3．03　船津７古墳群７地区　２Tr
　　4．03　船津７古墳群７地区　トレンチ掘削
　　5．04　花守遺跡２地区　１Tr
　　6．04　花守遺跡２地区　２Tr
図版２　1．05　比奈１古墳群５地区　調査前
　　2．05　比奈１古墳群５地区　１Tr 西壁
　　3．05　比奈１古墳群５地区　２Tr
　　4．05　比奈１古墳群５地区　集石
　　5．07　舟久保遺跡 43 地区　１Tr
　　6．07　舟久保遺跡 43 地区　３Tr
　　7．08　沖田遺跡 120 次　トレンチ掘削
図版３　1．08　沖田遺跡 120 次　１Tr 土層
　　2．09　沖田遺跡 121 次　８Tr 木質遺物出土状況
　　3．09　沖田遺跡 121 次　８Tr 木質遺物現地保存状況
　　4．10　桑崎遺跡１地区　調査前
　　5．10　桑崎遺跡１地区　９Tr
　　6．11　花守遺跡３地区　１Tr
図版４　1．11　花守遺跡３地区　１Tr 土層
　　2．12　国久保遺跡３地区　SB01 全景
　　3．12　国久保遺跡３地区　SB01 カマド
　　4．12　国久保遺跡３地区　SD01・02
　　5．13　沖田遺跡 122 次　トレンチ掘削
　　6．13　沖田遺跡 122 次　４Tr
　　7．14　比奈１古墳群３地区　調査の様子
　　8．14　比奈１古墳群３地区　９Tr
図版５　1．15　石坂２古墳群３地区　３Tr
　　2．15　石坂２古墳群３地区　３Tr 土層
　　3．16　舟久保遺跡 45 地区　掘削状況
　　4．17　高山古墳群２地区　調査前
　　5．16　舟久保遺跡 45 地区　５Tr
　　6．17　高山古墳群２地区　６・５・４Tr
　　7．18　上の段遺跡２地区　１Tr
図版６　1．横穴式石室全景
　　2．奥壁側鉄鏃集中部
　　3．須恵器出土状況
　　4．鐙出土状況
　　5．轡出土状況
図版７　1．床面石敷検出状況
　　2．石室中央部石敷
　　3．石室中央部石敷
　　4．石室開口部側石敷
　　5．石室開口部側石敷と段構造
図版８　1．奥壁
　　2．左側壁
図版９　1．開口部段構造
　　2．右側壁
図版 10　1．横穴式石室床面検出状況
図版 11　第６図 － １～８（沖田遺跡 119 次出土遺物）
　　第 23 図 － １～３（沖田遺跡 121 次出土遺物）
図版 12　第 23 図 － ４～ 16（沖田遺跡 121 次出土遺物）
図版 13　第 23 図 － 17～ 29（沖田遺跡 121 次出土遺物）
図版 14　第 23 図 － 30～ 39（沖田遺跡 121 次出土遺物）
図版 15　第 23 図 － 40（沖田遺跡 121 次出土遺物）
　　第 24 図 － 41～ 49（沖田遺跡 121 次出土遺物）
図版 16　第 24 図 － 50～ 53（沖田遺跡 121 次出土遺物）
　　第 36 図 － １～４（国久保遺跡３地区出土遺物）
　　第 49 図 － １（上の段遺跡２地区出土遺物）
図版 17　第 49 図 － ２～ 13（上の段遺跡２地区出土遺物）
図版 18　石室内出土遺物（刀装具 1-3・耳環）
図版 19　石室内出土遺物（轡）
図版 20-26　石室内出土鉄鏃
図版 27　石室内出土遺物（土器・刀装具 4-5・鉄鄂）

第１章　富士市内遺跡の概要

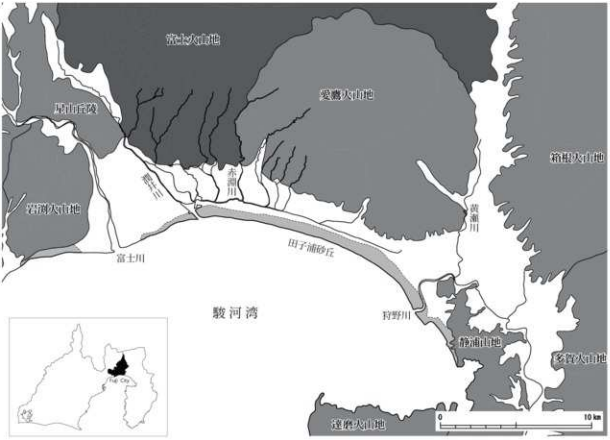
第１節　地理的環境

富士市は、静岡県の東部に位置する。平成 20 年 11 月、富士川を挟んで東西に立地する旧富士市と旧富士川町が合併し、新たな富士市となった。

地理的環境を概観すると、駿河湾を南に臨み、北にそびえる富士山は次第に傾斜を緩めながら裾を南西に広げている。西には岩本山を有する星山丘陵が、東には死火山である愛鷹山が存在する。また、西方には山梨県方面より流下した富士川が駿河湾に注ぎ、富士山西麓から流れる潤井川、愛鷹山に源流をもつ須津川や赤淵川など、多数の河川がみられる。

こうした環境で形成されてきた富士市域の地形は、富士山や愛鷹山などの新旧火山活動により形成された丘陵地、富士川や潤井川が運搬した土砂の堆積により形成された沖積平野、河川の放出砂礫が駿河湾の沿岸流や波浪によって運搬され形成された田子浦砂丘、砂丘の内側につくられた湖沼に沖積層が堆積して発達した浮島ヶ原低湿地など、変化に富んだ様相をみせている。

地形の基盤のひとつである富士山の噴火活動は、小御岳火山の噴火（数十万年前）に始まり、古富士火山（８万年～１万６千年前）、新富士火山（１万４千年前～現在）と大きく３期に分けられ、現在の富士山が形成されている。透水性の新富士火山溶岩流と不透水性の古富士泥流との境を富士山に降った雨水などが流れるため、新富士火山溶岩流の末端には数多くの湧水地がみられ、遺跡立地の要因となっている。また、富士山南麓の高鉢山から６世紀前後に噴出したとされる大淵スコリアは、市内のほぼ



第１図　地形区分図（1/250,000）

全域に認められ、発掘調査における重要な指針となっている。

愛鷹山の火山活動は大きく２期に分けられる。旧期の活動は凝灰角礫岩を主体とした多量の噴出物が、山体の基盤を形成した大規模なもので、小御岳火山や箱根火山と同時期（数十万年前）に始まったと推定されている。休止期を経て始まった新期の活動は旧期に比して小規模なもので、噴出物は主に安山岩質である。この新期活動以後、溶岩流を噴出する火山活動は休止し、愛鷹山の山体は浸食作用にさらされて、現在では壮年期侵食地形となっている。

古富士火山が最後に噴出した古富士泥流は愛鷹山麓まで到達し、その両者が接したところに赤淵川が流れ、富士山麓と愛鷹山麓の境となっている。

また、富士山南麓から愛鷹山南麓と浮島ヶ原の低湿地に接する境を通り、沼津市を経て三島市に至る根方街道は、集落遺跡の広がりと密接に関わる古道である。

第２節　歴史的環境

富士市域の遺跡分布について、地理的特徴をもとに、西から「富士川西岸（旧富士川町域）」「潤井川以西」「富士山南麓（赤淵川以西）」「浮島ヶ原低湿地縁辺と愛鷹山南西麓」「田子浦砂丘上」に区分し、旧石器時代から律令時代まで、時代ごとに概観してみる。

旧石器時代

富士川西岸・潤井川以西・田子浦砂丘上では旧石器時代の遺跡は確認されていない。

富士山南麓は、１万４千年前から開始した新富士火山の活動にともなって噴出した溶岩流が広がるため、旧石器時代の空白域となっている。わずかに、西端の天間沢遺跡でナイフ形石器が採集されているのみである。

愛鷹山南西麓では、第二東名建設事業に伴って財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した調査で、矢川上Ｃ遺跡において、極多数のナイフ形石器を主体とする石器群が検出されている。これは、当地域において初めて確認された当該期の集落遺跡であるとされる（財団 2009）。また、古木戸Ａ遺跡、古木戸Ｂ遺跡でもナイフ形石器や細石刃、尖頭器等の出土が見られ、石器製作跡と考えられる石器ブロックが確認されている（財団 2010）。

縄文時代

富士川西岸では、木島式土器の標識遺跡である木島遺跡（早期末～前期初頭）、山王遺跡（早期･前期･晩期）、破魔射場遺跡（前期～晩期）、浅間林遺跡（晩期）ほか、早期から晩期の各期にわたって多数の遺跡が確認されている。

潤井川以西の岩本山丘陵上には、いずれも散布地であるが、高徳坊遺跡（早期）、万野遺跡（早期～中期）、羽渕平遺跡（中期）、奥の原Ａ遺跡（中期）、上井奈遺跡（中期）、念信園遺跡（中期～後期）などが認められる。

富士山南麓では、ジンゲン沢遺跡（早期～中期）、天間沢遺跡（中期）中島遺跡（中期～後期）、宇東川遺跡（中期～後期）などで集落跡が確認されている。

愛鷹山南西麓には多数の遺跡が確認されているが、大半が小規模な遺物散布地である。向山遺跡で早期の建物跡が検出されている。

田子浦砂丘上では、柏原遺跡（中期～後期）、三新田遺跡（晩期）で遺物の出土が見られるが、遺構は確認されていない。

弥生時代

富士川西岸では、建物跡を検出した山王遺跡（中期・後期）、松永遺跡（後期）をはじめ、清水岩ノ

上遺跡（後期）、四十九遺跡（後期）などが確認されているが、縄文時代に比して遺跡の数は少なく、その時期も限られるようである。

潤井川以西は、高徳坊遺跡、上井奈遺跡、念信園遺跡で弥生時代末～古墳時代前期の遺物が採集されるが、弥生時代の遺構は確認されていない。

富士山南麓では、標高 480m の高地であり遺跡の詳細は明らかでないが、大坂遺跡、岩倉Ｂ遺跡で中期後半の土器片が採集されている。さらに、岩倉Ａ遺跡で出土したほぼ完形の壺型土器１点が近年確認され、後期前半（雌廻塚式前半）の時期が与えられている（富士市教委 2011）。

浮島ヶ原縁辺と愛鷹山南西麓では、浮島ヶ原縁辺の微高地上に沖田遺跡や花守遺跡、行俗遺跡が立地し、土器や木製品が出土している。

田子浦砂丘上では、田子浦港遺跡（後期）、柏原遺跡（後期）などで土器片が出土しているが、遺構は確認されていない。

古墳時代

富士川西岸では、谷津原古墳群をはじめとして、山王古墳群、妙見古墳群など、後期～終末期の古墳群が河岸段丘上、または山稜裾部に築かれている。

潤井川以西では、高徳坊遺跡で古墳時代初頭の建物跡が検出されている。また、岩本山の丘陵上には上井奈古墳群、鎌研古墳群、滝戸原古墳群を構成する９基の古墳が立地しており、昭和 56 年に発掘調査がおこなわれた念信園古墳は古墳時代後期～終末期の円墳である。

富士山南麓は、天間沢遺跡（前期）、祢宜ノ前遺跡（前期）、東平遺跡（中期）、中桁・中ノ坪遺跡（中期・後期）、沢東Ａ遺跡（中期～平安初頭）、宇東川遺跡（弥生後期～平安）などで集落跡が検出されている。また、本地域には首長墓級の古墳として伝法の伊勢塚古墳（後期）があり、以降、６世紀後葉から８世紀中葉にかけて、単独で、あるいは小規模な群を成して後期～終末期の古墳が築かれている。

愛鷹山南西麓の宮添遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が確認されており、方形周溝墓や大規模な竪穴建物跡が検出されている。また、浮島ヶ原をのぞむ丘陵先端部には富士市域で最古の首長墓とされる浅間古墳（前期）が、その後、比奈の東坂古墳（前期末～中期初頭）が築かれ、以降、中期の円墳が浮島ヶ原縁辺の丘陵上に、大規模な後期群集墳が愛鷹山麓に密集して築かれる。

田子浦砂丘上は、三新田遺跡（初頭～前期・後期）で集落跡が検出されている。土錘が多く出土しており、漁労を中心とした集落の姿が想定されている。また、庚申塚古墳（中期）、山の神古墳（後期）は沼津市域の神明塚古墳（前期）と同様に、こうした海人集落の首長墓と考えられる。

律令時代

富士川西岸には、平安時代を主体とする浅間林遺跡をはじめ、破魔射場遺跡、若宮遺跡、中野沖田遺跡などが確認されている。浅間林遺跡（９世紀後半～ 11 世紀）では、建物跡 34 軒、掘立柱建物跡５棟、井戸跡１基が検出され、土師器、須恵器、灰釉陶器のほか、墨書土器、刻書土器などが出土している。また、破魔射場遺跡（10 ～ 11 世紀）では竪穴建物跡 30 軒、掘立柱建物跡１棟が、若宮遺跡では掘立柱建物跡２棟が、中野沖田遺跡では製鉄関係遺構が検出されている。

潤井川以西では、奥の原Ｂ遺跡で平安時代の灰釉陶器片が採集されたのみである。

富士山南麓の扇状地末端部は、奈良～平安時代の遺跡が集中し、古代富士郡域における中心地であった。天間代山遺跡、沢東Ａ遺跡、沢東Ｂ遺跡、川窪遺跡、中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡、滝下遺跡、国久保遺跡、舟久保遺跡、宇東川遺跡、祢宜ノ前遺跡と、集落跡が帯状に広がる。東平遺跡は大規模な計画村落ともいえる集落跡に加えて、大型掘立柱建物跡や郡名の富士が書かれた「布自」墨書、さらに「厨」などの施設名の書かれた墨書も出土している。また、東平遺跡の南東にある三日市浅間神社周辺は、863 年に定額寺となる「法照寺」の比定地であり、「寺」墨書や大量の布目瓦などが出土している。

これらのことから、東平遺跡は富士郡衙に関わる遺跡と考えられている。

浮島ヶ原縁辺の沖田遺跡では条里制にともなうとみられる大畦畔が確認されている。東平遺跡や舟久保遺跡など周辺に営まれた集落の、生産拠点としての位置づけが推定される。

田子浦砂丘上では、三新田遺跡・柏原遺跡で集落跡が検出されている。三新田遺跡では墨書土器、緑釉陶器の出土もみられる。

参考文献

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009『矢川上C遺跡』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『天ヶ沢東遺跡・古木戸A遺跡・古木戸B遺跡』

富士市教育委員会　2010『平成21年度富士市内遺跡発掘調査報告書』

第２図　富士市内主要遺跡分布図（1/120,000）

第１表　富士市内主要遺跡名表

1	若宮遺跡	15	念信園遺跡	29	国久保遺跡	43	古木戸B遺跡	E	滝戸原古墳群
2	清水岩ノ上遺跡	16	高徳坊遺跡	30	舟久保遺跡	44	宮添遺跡	F	石坂２古墳群
3	浅間林遺跡	17	ジンゲン沢遺跡	31	宇東川遺跡	45	コーカン畑遺跡	G	高山古墳群
4	松永遺跡	18	天間沢遺跡	32	中島遺跡	46	上の段遺跡	H	滝川２古墳群
5	中野神田遺跡	19	天間代山遺跡	33	木の宮遺跡	47	師ヶ沢A遺跡	I	滝川４古墳群
6	木島遺跡	20	厚原遺跡	34	祢宜ノ前遺跡	48	矢川上C遺跡	J	比奈１古墳群
7	破魔射場遺跡	21	沢東A遺跡	35	神田遺跡	49	田子浦港遺跡	K	富士岡１古墳群
8	駿河山王遺跡群	22	沢東B遺跡	36	花守遺跡	50	富士塚遺跡	L	神谷古墳群
9	四十九遺跡	23	川窪遺跡	37	行僧遺跡	51	三新田遺跡	M	船津７古墳群
10	万野遺跡	24	中桁・中ノ坪遺跡	38	桑崎遺跡	52	柏原遺跡	ア	伊勢塚古墳
11	羽渕平遺跡	25	中原遺跡	39	峰山遺跡	A	谷津原古墳群	イ	東坂古墳
12	奥の原A遺跡	26	東平遺跡	40	向山遺跡	B	妙見古墳群	ウ	浅間古墳
13	奥の原B遺跡	27	三日市廃寺跡	41	児森遺跡	C	上井奈古墳群	エ	庚申塚古墳
14	上井奈遺跡	28	滝下遺跡	42	古木戸A遺跡	D	鎌研古墳群	オ	山の神古墳

第２章　市内遺跡の調査

第１節　調査体制と調査件数

１．調査体制

平成 13 年度の埋蔵文化財発掘調査体制は次のとおりである。

事務局	富士市教育委員会	教育長	太田　均
	文化スポーツ課	課　長	村嶋政彦
調査担当	文化スポーツ課	主　幹	渡井義彦
		主　査	志村　博
		主　査	岩辺　均
		主　査	木ノ内義昭
		上席主事	前田勝己
		指導主事	田中淳一
		臨時職員	吉田博子

２．調査件数

平成 13 年度には、26 件の発掘調査を実施した。概要は下表のとおりである。

なお、網掛けをした調査については本報告書刊行済みであるため、本章での報告は省略する。

また、所収番号１「国久保遺跡第２地区」については本書第３章にて本報告し、所収番号６「児森遺跡第２地区」については別途報告書を刊行するため、本章においては概略のみ掲載する。

第２表　平成 13 年度発掘調査一覧

所収番号	遺跡名		調査区分	調査期間	所在地	調査の原因	対象(㎡)	調査(㎡)	時代	調査概要 遺構	遺物	調査担当	備考・報告書
1	国久保遺跡	第2地区	試掘	H13.5.16～5.31	国久保2丁目2013-16 外	宅地造成	1,893	100	古墳	横穴式石室1基	須恵器・金属製品・玉製品・ガラス製品	新谷 古田	国久保公園 新規登録 本書第3章にて本報告
2	伊佐遺跡 第11地点調査地点		試掘	H13.5.22～5.25	宇賀川瀬町38-1 外	宅地造成	2,795	164	古墳 奈良	なし	土師器・須恵器	新谷 古田	
3	松岡古墳群 第7地区		試掘	H13.7.3～7.4	松岡600-2 外	集団墓上げ	6,200	220		なし	なし	新谷	
4	花平遺跡 第2地区		試掘	H13.8.7～8.9	富士南3363-2 外	共同墓地	1,188	140		なし	なし	新谷 古田	
5	比沢1古墳群 第6地区	2次調査	試掘	H13.8.20～8.24	原田1005-1 外	農業整備	932	227		なし	なし	新谷 古田	
6	児森遺跡 第2地区	1次調査 本調査	試掘 本調査	H13.9.3 H13.9.5～9.6	中里1180-1 他5人	消防水利整備	60	40	古墳	横穴埋葬施設	土師器・須恵器	新谷 古田	別途本報告
		2次調査	本調査	H13.9.12～9.14	今泉2126-1	宅地造成	4,650	192		なし	なし	新谷 古田	
8	伊佐遺跡 第12地点調査地点		試掘	H13.9.26～9.27	伝法36390-1 外	店舗・病院増設	2,174	101		なし	なし	新谷 古田	
9	伊佐遺跡 第12地点調査地点		試掘	H13.10.9～10.15	宇賀川瀬町50-1 外	郵便局建設	5,926	153	古墳 平安	古墳不明遺構	土師器・須恵器 灰釉陶器・木製品	新谷 古田	
10	魚崎遺跡 第1地区		試掘	H13.10.17～11.7	魚崎320-1 外	道路改良	2,000	113		なし	なし	新谷 古田	
11	花平遺跡 第3地区		試掘	H13.11.12～11.13	富士南123-4 外	共同住宅建設	900	81		なし	なし	新谷 古田	
12	国久保遺跡 第3地区		試掘	H13.11.19～11.23	国久保3丁目2236-2	共同住宅建設	813	139	平安	竪穴建物跡 建状遺構・土坑	土師器・須恵器 灰釉陶器	新谷 古田	
	富士南1古墳群 第6地区	1次調査	試掘	H13.11.26～11.29	北谷2035-2	農道整備	20	20	古墳	石河戸墓2号墳		新谷 古田	『花河戸2・3号墳 発掘調査報告書』(2003)
		2次調査	試掘	H13.12.12～12.21						花河戸墓3号墳	須恵器	新谷 古田	
		3次調査	試掘	H14.2.12～2.15	北谷2033-4 外		320	84		花河戸墓3号墳		新谷 古田	
	東平遺跡 第12地区		試掘	H13.12.3～12.10	伝法2539-2	店舗増設	3,304	1,102	弥生 平安	竪穴建物跡 掘立柱建物跡		新谷 古田	『東平遺跡 発掘調査報告書』(2003)
	宮前遺跡 G地区	1次調査	試掘	H14.1.15～1.16	増1716 外	農地改良	823	106				新谷 古田	
		2次調査	試掘	H14.2.18～2.23	増1716	農地改良	877	356		竪穴建物跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器 石製	新谷 古田	『宮前遺跡 II』(2000)
		3次調査	試掘	H14.2.22～2.25	増1717	農地改良	747	83		竪穴建物跡	土師器・須恵器	新谷 古田	
13	伊佐遺跡 第12地点調査地点		試掘	H14.1.22～1.24	今泉583-5 外	倉庫・作業所建設	2,035	151		なし	なし	澤井 渡辺	
14	比沢1古墳群 第5地区		試掘	H14.1.23～1.24	比沢36-22	店舗改良	1,860	16		なし	なし	新谷 古田	
15	本宿2古墳群 第3地区		試掘	H14.2.4	大淵200-1 外	共同住宅建設	953	179		なし	なし	新谷 古田	
16	布久保遺跡 第45地区		試掘	H14.2.5	今泉32-1	宅地造成	990	21		なし	なし	澤井 渡辺	
17	泉谷古墳群 第2地区		試掘	H14.3.4～3.8	今泉36-12 外	宅地造成	2,673	318		なし	なし	新谷 古田	
18	上の段遺跡 第2地区		試掘	H14.3.18～3.20	瑞600-2	住宅建設	548	8		なし	縄文土器・土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器	新谷	

第２節　発掘調査報告

１．国久保遺跡　第２地区

所　在　地

富士市国久保２丁目 2015-16　外

調 査 面 積

100㎡（調査対象面積　1,691㎡）

調 査 期 間

平成 13 年５月 16 日～５月 31 日

調 査 原 因

宅地造成

第３図　調査地位置図

遺跡の概要

国久保遺跡は富士山南麓に延びる低丘陵上の標高 20 mほどに立地する遺物散布地である。

過去の発掘調査では成果は得られていないが、表面採集遺物には奈良～平安時代の土師器片・須恵器片がみられ、かつて工場建設時に同時期の竪穴建物跡を確認していると伝わる。

近接する東平遺跡、滝下遺跡や舟久保遺跡との関連が注目される遺跡である。

調査の概要

調査区全体は西から東に向かって傾斜している旧地形上に盛土をして駐車場として使用されている。

対象地に３本のトレンチを設定し、重機および一部人力による掘削後、トレンチ内を精査して遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果

出土遺構　横穴式石室１基

出土遺物　須恵器片・金属製品・石製品・ガラス製品

今回の調査では石室の規模および最終追葬面までを確認し、実測後、砂による埋め戻しを行った。

開発事業者が計画を一部変更し、石室直上を緑地として整備し、遺構保護の措置をとることとなった。また、周溝等については保護層１m程度を確保できることが確認された。

この調査については、本書第３章にて本報告を行う。

２．沖田遺跡　第 119 次調査地点

所　在　地

富士市宇東川東町 58-1　外

調 査 面 積

164㎡（調査対象面積　2,795㎡）

調 査 期 間

平成 13 年５月 22 日～５月 25 日

調 査 原 因

宅地造成

第４図　調査地位置図

遺跡の概要

沖田遺跡は、愛鷹山南麓にひろがる浮島ヶ原の西北部に位置する。浮島ヶ原は海抜高度平均５ｍ以下の低湿地であり、地表下３～７ｍから弥生中期～奈良時代の土器片や、奈良・平安時代の条里制に伴うとみられる大畦畔が検出されている。

調査の概要

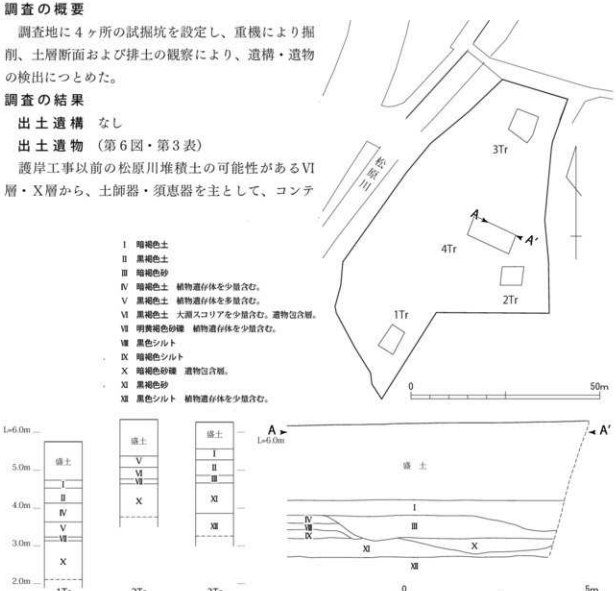
調査地に４ヶ所の試掘坑を設定し、重機により掘削、土層断面および排土の観察により、遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　（第６図・第３表）

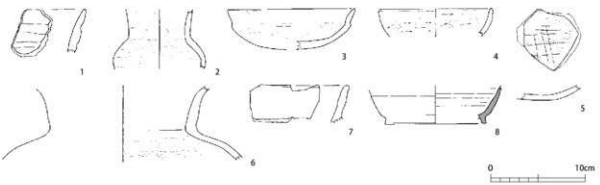
護岸工事以前の松原川堆積土の可能性があるⅥ層・Ⅹ層から、土師器・須恵器を主として、コンテ



第５図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

ナ約1/3箱の遺物が出土し、8点を図示した。

1は縄文土器の口縁部片、2は土師器小型丸底壺、3～5は土師器坏、6・7は土師器甕、8は陶器碗である。2・4・7は1トレンチから、1・3・5・6は2トレンチから、8は4トレンチから出土した。



第6図　出土遺物実測図（1/4）

第3表　出土遺物観察表

遺構 棒図番号 図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調 内面 外面	備考
2トレンチ 第6図-1 写真図版11	縄文土器	－ － …	外面に横方向の沈線。	やや粗 白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	硬質	7.5YR4/1(褐灰) 7.5YR4/2(灰褐)	口縁部片
1トレンチ 第6図-2 写真図版11	土師器 小型丸底壺	－ － …	内面外面とも横ヘラナデ調整。頸部外面横ヘラミガキか。	赤色粒子・雲母微量	硬質	内外 10YR5/4(にぶい黄褐)	30%残
2トレンチ 第6図-3 写真図版11	土師器 坏	13.4 (4.2) …	体部内面ヘラナデ調整。体部外面ヘラケズリ後ヘラナデ調整。口縁部内面回転ナデ調整。口縁部外面横ヘラナデ調整。	精選 赤色粒子	硬質	内外 5YR6/6(橙)	25%残
1トレンチ 第6図-4 写真図版11	土師器 坏	11.6 － …	体部内外面横ヘラケズリ調整。口縁部横ナデ調整。	赤色粒子	やや軟質	7.5YR5/6(明褐) 5YR6/6(橙)	20%残
2トレンチ 第6図-5 写真図版11	土師器 坏	－ － …	底部内面ヘラミガキ後、格子状の刻書。	精選 白色粒子 黒色粒子	硬質	7.5YR5/3(にぶい褐) 7.5YR6/4(にぶい橙)	20%残
2トレンチ 第6図-6 写真図版11	土師器 甕	－ － …	頸部内面回転横ナデ。体部内面横方向の板ナデ後、一部ヘラナデ。	細織多量	軟質	10YR6/4(にぶい黄橙)	30%残
1トレンチ 第6図-7 写真図版11	土師器 甕	－ － …	口縁部外面強い回転ナデ押さえ。	細織少量	やや軟質	7.5YR8/2(灰白) 7.5YR7/2(明褐灰)	駿東型甕
4トレンチ 第6図-8 写真図版11	陶器 碗	－ － (10.6)	ロクロ成形。削り出し高台。内面は回転ヘラナデ調整。外面は回転ナデ調整後、薄く施釉。	精選	硬質	7.5YR5/4(にぶい褐色) 7.5YR4/2(灰褐)	20%残

３．船津７古墳群　第７地区

所　在　地

富士市船津 680-7　外

調 査 面 積

220㎡（調査対象面積　6,700㎡）

調 査 期 間

平成 13 年７月３日～７月４日

調 査 原 因

茶畑嵩上げ

第７図　調査地位置図

遺跡の概要

船津古墳群は、春山川沿いの段丘面上に占地する 200 基余りの後期古墳で構成される、市内最大規模の古墳群である。現状は、大半が耕作農地化されているため上部が削平されており、旧状をとどめている古墳は数少ないと見られる。

調査の概要

調査地で、第二東名高速道路建設工事から排出される土砂を用いた、茶畑の嵩上げ工事が計画された。

船津 L-35 号墳･36 号墳(いずれも消滅古墳)が所在したとされる地点を含むため、その周辺を調査対象として、東西方向に３本のトレンチを設定し、重機により表土を除去した後、人力精査を行った。

調査の結果

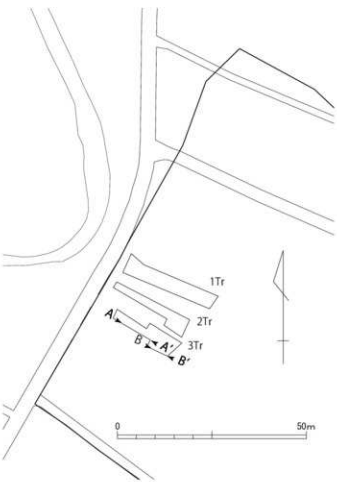
出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

各トレンチからは大小の礫がまとまって検出されたが、いずれも地山の礫であり古墳の痕跡はまったく検出できなかった。

船津 L-35 号墳・36 号墳は完全に消滅したか、あるいは元々存在せず、地山の石を石室の石と見誤った、と考えられる。

調査地北半については、今回は調査対象外としたため、開発の際には改めて調査が必要である。



Ⅰ　黒色土（7.5YR2/1）白色粒子・橙色スコリア粒を微量含む。
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）白色粒子を少量、橙色粒子を微量含む。しまり強い。
Ⅲ　褐色ローム質土（10YR5/6）粉末状の橙色スコリアを少量含む。礫・川原石を含む。しまり強い。

第８図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

4．花守遺跡　第２地区

所　在　地

富士市富士岡 1363-2　外

調 査 面 積

148㎡（調査対象面積　1,189㎡）

調 査 期 間

平成 13 年８月７日～８月９日

調 査 原 因

社屋建設

第９図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

花守遺跡は、浮島ヶ原低湿地の北岸と赤淵川の扇状地末端部が接する、標高 10 mほどの緩斜面上に立地する遺物散布地である。遺物採集量は少なく遺跡の性格は不明であるが、皿状木製品や須恵器坏片が確認されており、弥生時代末以降の水稲農耕に関わる集落跡の可能性が推測されている。

調 査 の 概 要

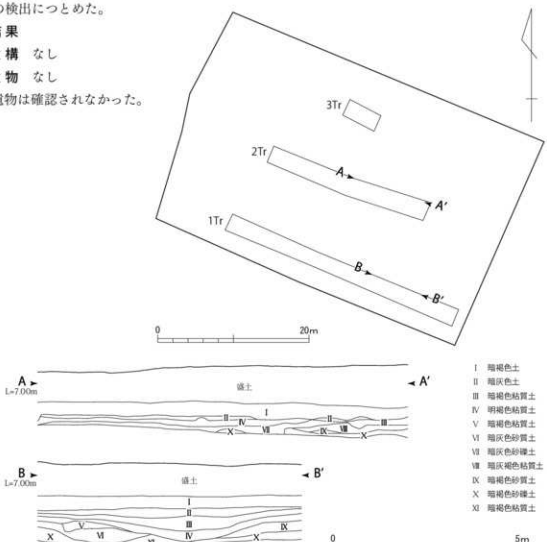
調査地に東西方向３本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調 査 の 結 果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 10 図　トレンチ配置図（1/500）・土層断面図（1/100）

５．比奈１古墳群　第５地区－２次調査

所　在　地

富士市原田 1985-1　外

調 査 面 積

227㎡（調査対象面積　932㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 8 月 20 日～8 月 24 日

調 査 原 因

農道整備

第 11 図　調査地位置図

遺跡の概要

比奈１古墳群は、赤淵川の西岸、富士山南麓に広がる丘陵上に占地する 29 基の古墳で構成される。

その大半が後期古墳であるが、丘陵先端部には古墳時代前期末～中期初頭に築かれたとみられる東坂古墳（全長約 60 m の前方後円墳）が存在していた。

調査の概要

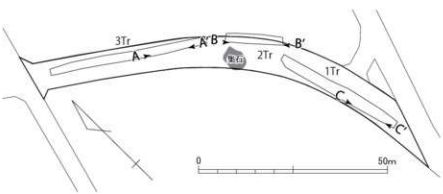
調査地に３本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力により精査、土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。また、古墳の可能性がある集石地点については人力により掘削・精査を行った。

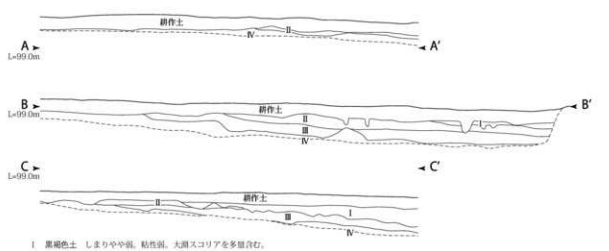
調査の結果

出土遺構　なし

出土遺物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。





第 12 図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

6．児森遺跡　第２地区

所　在　地

富士市中里 1380-1　地先

調 査 面 積

60㎡（調査対象面積　60㎡）

調 査 期 間

１次調査：平成 13 年９月４日

２次調査：平成 13 年９月５日～９月６日

調 査 原 因

消防水利整備

第 13 図　調査地位置図

遺跡の概要

児森遺跡は、昭和 62 年に確認された遺物散布地で、古墳時代から平安時代にかけての集落跡としての可能性が推測されている。

調査の概要

試掘調査（１次調査）では、調査地に１本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

トレンチ西半より、竪穴建物跡が確認されたため、試掘調査から本調査（２次調査）へと切り替え、引き続き調査を行った。

調査の結果

出 土 遺 構　竪穴建物跡　１軒

出 土 遺 物　土師器・須恵器

北壁にカマドを有する竪穴建物跡の北東部分を完掘して本調査を終了した。

２次調査については、2011 年度に本報告書を刊行する予定である。

第 14 図　トレンチ平面図（1/200）・土層断面図（1/100）

７．舟久保遺跡　第 43 地区

所　在　地

富士市今泉 2126-1

調 査 面 積

192㎡（調査対象面積　4,850㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 9 月 12 日～ 9 月 14 日

調 査 原 因

宅地造成

第 15 図　調査地位置図

遺跡の概要

舟久保遺跡では、奈良～平安時代を中心に、竪穴建物跡や掘立柱建物跡など多数の遺構・遺物が検出されている。

また、「倉」と墨書された土師器も発見されており、古代富士郡衙に関係する遺跡として注目される。

調査の概要

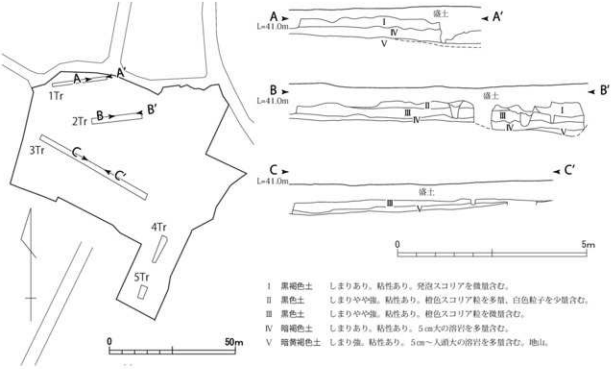
調査地に５本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査、土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果

出土遺構　なし

出土遺物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 16 図　トレンチ配置図（1/1,500）・土層断面図（1/100）

8．沖田遺跡　第120次調査地点

所　在　地

富士市伝法3659-1　外

調 査 面 積

101㎡（調査対象面積　2,174㎡）

調 査 期 間

平成13年9月26日～9月27日

調 査 原 因

店舗・病院建設

第17図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

沖田遺跡は、愛鷹山南麓にひろがる浮島ヶ原の西北部に位置する。浮島ヶ原は海抜高度平均5ｍ以下の低湿地であり、地表下3～7ｍから弥生中期～奈良時代の土器片や、奈良・平安時代の条里制に伴うとみられる大畦畔が検出されている。

調 査 の 概 要

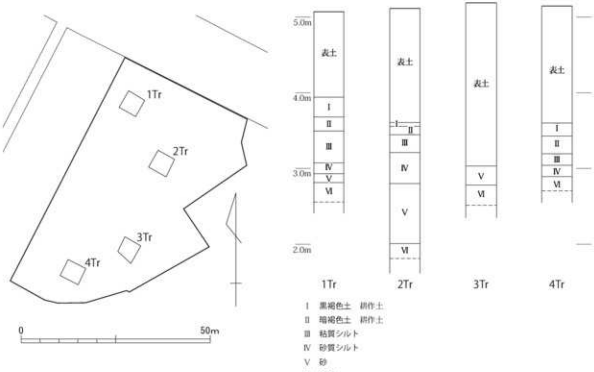
調査地に4ヶ所の試掘坑を設け、重機による掘削後、土層断面および排土の観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調 査 の 結 果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第18図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/50）

９．沖田遺跡　第 121 次調査地点

所　在　地

富士市宇東川東町 50-1　外

調 査 面 積

155㎡（調査対象面積　5,926㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 10 月 9 日～ 10 月 15 日

調 査 原 因

葬祭場建設

第 19 図　調査地位置図

遺跡の概要

沖田遺跡は、愛鷹山南麓にひろがる浮島ヶ原の西北部に位置する。浮島ヶ原は海抜高度平均５m以下の低湿地であり、地表下３～７mから弥生中期～奈良時代の土器片や、奈良・平安時代の条里制に伴うとみられる大畦畔が検出されている。

調査の概要

調査地は、同年度に試掘調査を行った沖田遺跡第 119 次調査地点（本章所収）の東に隣接する。

試掘坑を８ヶ所設定し、重機による掘削後、土層断面および排土の観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

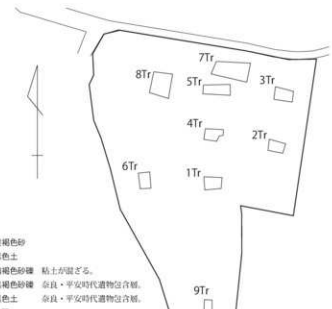
調査の結果

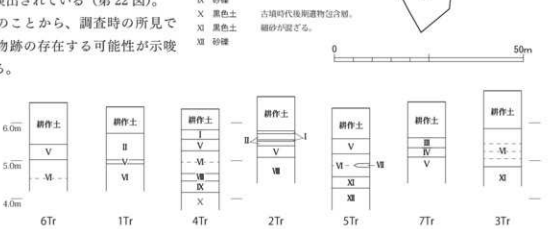
出 土 遺 構　性格不明遺構

７トレンチで、平安時代の遺物包含層（Ⅳ層）直下に床面状に硬くしまった範囲（SX01）が確認され、灰白色粘土と炭化物が層状に薄く広がる範囲（SX02・Ⅴ層）も認められている（第 21 図）。

また、８トレンチでも土器類のほかに、多量の焼土・灰の広がりや炭化した木材が検出されている（第 22 図）。

これらのことから、調査時の所見では竪穴建物跡の存在する可能性が示唆されている。





第 20 図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

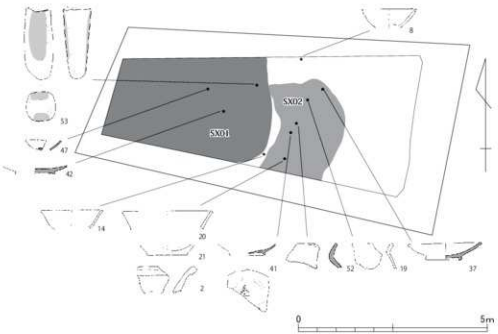
出土遺物（第23・24図・第4～6表）

土師器・須恵器・灰釉陶器など、コンテナ1箱分の遺物が出土し、53点を図示した。

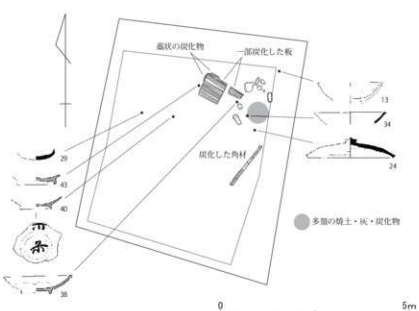
7トレンチのSX01・02とその周辺で検出されたものは、土師器壺（2）、土師器坏（8）・碗（14）・甕（19～21）、灰釉陶器碗（37・41・42・47）、陶器甕（52）、磨石（53）である。

また、8トレンチの炭化材周辺では、土師器碗（13）、須恵器蓋（24）・坏（29）・碗（34）、灰釉陶器碗（38・40・43）が出土している。

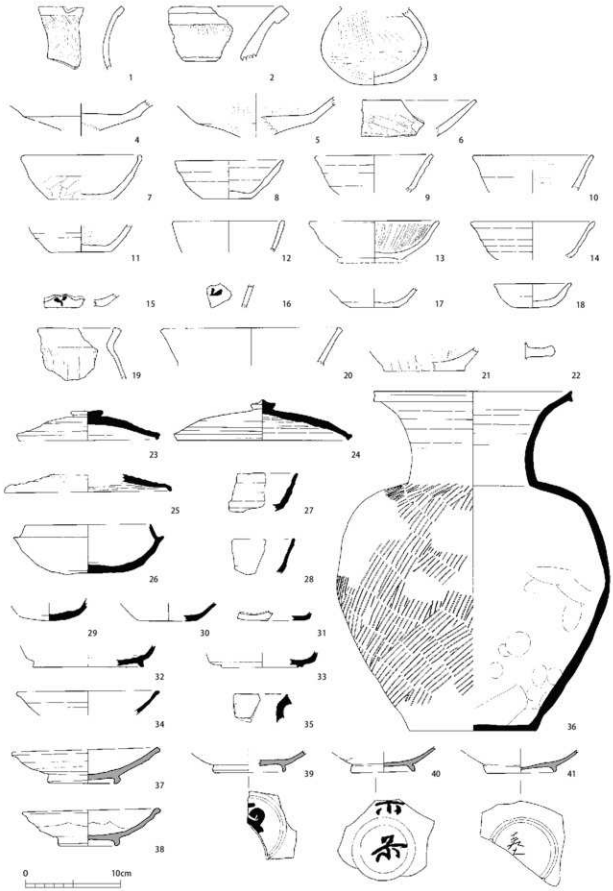
8トレンチ出土の炭化材は現地保存の処置をとった。



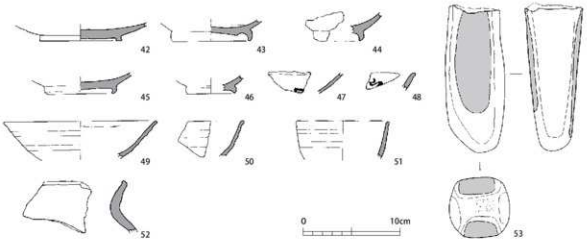
第21図　7トレンチ　遺構・遺物出土状況図（1/100）



第22図　8トレンチ　遺物出土状況図（1/100）



第23図　出土遺物実測図（1）（1/4）



第 24 図　出土遺物実測図（2）(1/4)

第 4 表　出土遺物観察表（1）

遺構 挿図番号 図版番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調 内面 外面	備　考
2ラレンチ 第23図-1 写真図版11	土師器 壺	－ － －	口縁部内面ヘラミガキ。口縁部外面ハケ目調整後ヘラミガキ。折り返し口縁。口縁端部面取り。	精選	硬質	5YR6/4(にぶい橙) 5YR6/6(橙)	
7ラレンチ 第23図-2 写真図版11	土師器 壺	－ － －	口縁部外面は縦ハケ目後ヘラミガキ。折り返し口縁。口縁端部は面取りし，凹む。	白色礫多量	硬質	内外 7.5YR6/6(橙)	
2ラレンチ 第23図-3 写真図版11	土師器 小型丸底壺	－ － －	体部外面粗いハケ目。体部内面は斜めナデ調整。	白色粒子 黒色粒子	硬質	7.5YR6/4(にぶい橙) 5YR4/6(赤褐)	
8ラレンチ 第23図-4 写真図版12	土師器 高坏	－ － －		細礫多量	硬質	7.5YR6/4(にぶい橙) 10YR6/3(にぶい黄橙)	
8ラレンチ 第23図-5 写真図版12	土師器 高坏	－ － －	体部内面丁寧な放射状ヘラミガキ。体部外面粗いハケ目後，縦ヘラミガキ。	細礫少量	硬質	5YR6/6(橙) 7.5YR6/4(にぶい橙)	
8ラレンチ 第23図-6 写真図版12	土師器 高坏	－ － －	口縁部内外面回転横ナデ。体部外面縦かいハケ目調整。	細礫	硬質	内外 5YR4/6(赤褐)	
8ラレンチ 第23図-7 写真図版12	土師器 坏	11.4 4.0 4.8	体部下半および底部外面手持ちヘラケズり。二次焼成受ける。	精選	やや 軟質	内外 2.5Y5/1(黄灰)	75%残
7ラレンチ 第23図-8 写真図版12	土師器 坏	12.6 4.7 6.8	底部および体部下半外面手持ちヘラケズり。口縁端部は丸みを帯びて内側に張り出す。	細礫少量	硬質	7.5YR4/3(褐) 7.5YR3/3(暗褐)	駿東型
8ラレンチ 第23図-9 写真図版12	土師器 坏	12.4 － －		精選	硬質	7.5YR5/4(にぶい褐) 7.5YR5/3(にぶい褐)	15%残 駿東型
8ラレンチ 第23図-10 写真図版12	土師器 坏	12.8 － －	体部外面丁寧なナデ。体部内面粗い横ヘラミガキ。	精選	硬質	7.5YR4/3(褐) 5YR4/4(にぶい黄褐)	15%残 駿東型
7ラレンチ 第23図-11 写真図版12	土師器 坏	－ － 6.4	底部外面の中心に木口痕，外周は手持ちヘラケズり。体部内面横方向のヘラナデ。	細礫少量	硬質	内外 5YR5/4(にぶい赤褐)	
6ラレンチ 第23図-12 写真図版12	土師器 坏	11.8 － －	体部内外面とも丁寧な横ヘラミガキ，外面に黒色の斑点あり。	精選	硬質	5YR5/4(にぶい赤褐) 5YR4/4(にぶい赤褐)	
8ラレンチ 第23図-13 写真図版12	土師器 塊	13.6 － －	体部内面黒色処理と放射状ヘラミガキ。	細礫微量	やや 軟質	2.5Y3/1(黒褐) 10YR5/3(にぶい黄褐)	高台部 欠損

第５表　出土遺物観察表（２）

遺構 挿図番号 図版番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調 内面 外面	備　考
7トレンチ 第23図-14 写真図版12	土師器 模倣碗	13.0 － －	駿東型類に似る。	白色礫少量	硬質	内外 10YR3/3(暗褐)	
8トレンチ 第23図-15 写真図版12	土師器 坏	－ － －	体部外面に墨書あり、文字不明。	細礫少量	硬質	内外 7.5YR4/3(褐)	墨書土器
4トレンチ 第23図-16 写真図版12	土師器 坏	－ － －	底部外面に墨書あり、文字不明。	精選	硬質	7.5YR4/4(褐) 7.5YR4/3(褐)	墨書土器
8トレンチ 第23図-17 写真図版13	土師器 小皿	－ － 5.0	底部外面に回転糸切り痕。	精選	硬質	10YR6/4(にぶい黄橙) 7.5YR6/4(にぶい橙)	20%残
4トレンチ 第23図-18 写真図版13	土師器 小皿	8.0 2.4 3.6	体部内面へラミガキ、体部～底部外面ナデ。	精選	やや 軟質	内外 7.5YR6/4(にぶい橙)	15%残
7トレンチ 第23図-19 写真図版13	土師器 小型甕	－ － －	体部外面縦方向の細かいハケ目、口縁部は回転横ナデ。口唇部面取りし、内側にわずかに肥厚させる。	細礫・金雲母	軟質	10YR3/1(黒褐) 7.5YR3/2(黒褐色)	駿東型
5・7トレンチ 第23図-20 写真図版13	土師器 甕	9.4 － －	口縁部回転横ナデ。口縁端部面取り。	細礫・雲母 白色礫少量	軟質	内外 7.5YR6/4(にぶい橙)	駿東型
7トレンチ 第23図-21 写真図版13	土師器 甕	－ － 8.4	底部外面に木葉痕。体部外面ハケ目後ナデ調整。体部内面粗いハケ目調整。	細礫多量	やや 軟質	内外 10YR5/3(にぶい黄褐)	
7トレンチ 第23図-22 写真図版13	土師器 羽釜	－ － －		粗 白色粒子 黒色粒子・雲母	硬質	内外 7.5YR4/2(灰褐色)	5%残
8トレンチ 第23図-23 写真図版13	須恵器 坏蓋	(15.0) 3.1 －	天井部外面上半回転ヘラケズり。	精選	やや 軟質	内外 2.5Y6/1(黄灰)	40%残
8トレンチ 第23図-24 写真図版13	須恵器 蓋	18.8 4.2 －	天井部外面回転ヘラケズり。 全体に丁寧なつくり。坏蓋とは手法が異なる。	精選	硬質	内外 2.5Y6/2(灰黄)	25%残
8トレンチ 第23図-25 写真図版13	須恵器 蓋	17.4 － －	天井部内面工具によるナデ。	精選	硬質	内外 2.5Y6/1(黄灰)	
包含層 第23図-26 写真図版13	須恵器 坏	13.0 5.1 －	底部外面回転ヘラケズり調整。	白色礫微量	硬質	10YR4/1(褐灰) 2.5Y5/1(黄灰)	ほぼ完形
1トレンチ 第23図-27 写真図版13	須恵器 坏	－ － －	体部外面下半回転ヘラケズり。体部内面工具による回転ナデ。	精選	硬質	2.5Y6/1(黄灰) 2.5Y7/1(灰白)	
4トレンチ 第23図-28 写真図版13	須恵器 坏	－ － －	体部内外面工具による回転ナデ。	精選	硬質	5Y6/1(灰) 2.5Y6/1(黄灰)	
8トレンチ 第23図-29 写真図版13	須恵器 丸底坏	－ － －	底部内面に強い回転ナデ押さえ。	精選	硬質	内外 10YR6/1(褐灰)	50%残
4トレンチ 第23図-30 写真図版14	須恵器 坏	－ － 6.0	底部外面回転糸切り痕。	精選	硬質	内外 2.5Y6/1(黄灰)	
8トレンチ 第23図-31 写真図版14	須恵器 坏	－ － －	底部外面回転ヘラ削り。	精選	硬質	内外 7.5YR5/1(黄灰)	
4トレンチ 第23図-32 写真図版14	須恵器 高台坏	－ － 11.8	接地あるいは突出する底部に貼付高台。	白色松微量	硬質	内外 2.5Y5/1(黄灰)	
8トレンチ 第23図-33 写真図版14	須恵器 高台坏	－ － 8.6	低い方形高台。	精選	硬質	内外 2.5Y5/1(黄灰)	

第6表　出土遺物観察表（3）

遺構 掛図番号 図版番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調 内面 外面	備　考
8トレンチ 第23図-34 写真図版14	須恵器 碗？	15.0 — —		精選	やや 軟質	内外 2.5Y5/1（黄灰）	25%残
4トレンチ 第23図-35 写真図版14	須恵器 瓶？	— — —	口縁端部面取り。	精選	硬質	5Y6/1（灰） N3/0（暗灰）	
7トレンチ 第23図-36 写真図版14	須恵器 甕	(21.0) 36.0 (13.2)	胴部外面は叩き目、内面は丁寧なナデ調整と指頭押圧。	精選 白色礫微量	硬質	10YR6/1（褐灰） 10YR5/1（褐灰）	40%残
7トレンチ 第23図-37 写真図版14	灰釉陶器 碗	15.0 3.4 6.0	体部外面ロクロ成形後，工具によるナデ。底部外面ヘラ切り。貼付高台。無釉。	精選	硬質	内外 2.5Y6/1（黄灰）	K-90 50%残
8トレンチ 第23図-38 写真図版14	灰釉陶器 碗	14.4 3.7 7.0	底部外面に回転糸切り痕。貼付高台。体部内外面つけ掛けによる施釉。	精選	やや 軟質	内外 10YR5/1（褐灰）	O-53 80%残
7トレンチ 第23図-39 写真図版14	灰釉陶器 碗	— — (7.2)	貼付高台。体部内面に施釉。底部外面に不明墨書あり。	細礫少量	硬質	内外 2.5YR6/1（黄灰）	墨書土器 K-90
8トレンチ 第23図-40 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 6.6	体部内外面に施釉。底部外面に回転糸切痕。貼付高台。底部内面に重ね焼き痕。体部および底部外面に墨書あり。「泉」か。	細礫多量	硬質	内外 10YR6/1（褐灰）	墨書土器 O-53
7トレンチ 第23図-41 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 7.0	底部外面に回転糸切り痕。貼付高台。底部外面に不明墨書あり。	細微量	硬質	内外 2.5Y6/1（黄灰）	墨書土器 O-53
7トレンチ 第24図-42 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 8.4	体部内面に施釉。底部外面回転ヘラケズリ後、低い方形高台を貼付。	白色礫微量	硬質	5Y7/1（灰白） 2.5Y6/1（黄灰）	K-14
8トレンチ 第24図-43 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 8.0	貼付高台。体部内面に濃緑色の施釉。重ね焼き痕。	精選	硬質	内外 10YR6/1（褐灰）	K-90
8トレンチ 第24図-44 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — —		精選	硬質	10YR6/1（褐灰） 10YR7/1（灰白）	K-90
8トレンチ 第24図-45 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 6.8	底部外面回転ヘラ切り。貼付高台。体部内面に重ね焼き痕。	細礫微量	硬質	10YR6/1（褐灰） 10YR6/2（灰黄褐）	K-90
8トレンチ 第24図-46 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — 5.0	三角高台。内面外面とも無釉。	精選	硬質	内外 2.5Y5/1（黄灰）	O-53 東遠江産
7トレンチ 第24図-47 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — —	体部外面に不明墨書あり。	精選	硬質	5Y6/1（灰） 2.5Y6/1（黄灰）	墨書土器
7トレンチ 第24図-48 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — —	体部外面に不明墨書あり。	精選	硬質	10YR7/2（にぶい黄橙） 10YR6/3（にぶい黄橙）	墨書土器
7トレンチ 第24図-49 写真図版15	灰釉陶器 碗	— — —	体部内面に施釉。体部外面下半回転ヘラケズリ。	細礫 白色礫少量	硬質	10YR6/3（にぶい黄橙） 10YR6/4（にぶい黄橙）	10%残
4トレンチ 第24図-50 写真図版16	灰釉陶器 碗	— — —	口縁端部丸みを帯びる。体部内面斑点状に発色する濃緑の施釉。	精選	硬質	2.5Y7/1（灰白） 2.5Y6/1（黄灰）	
7トレンチ 第24図-51 写真図版16	灰釉陶器 碗？	9.4 — —	体部外面下半回転ヘラケズリ。	白色礫少量	硬質	内外 2.5Y5/1（黄灰）	30%残
7トレンチ 第24図-52 写真図版16	陶器 甕	— — —		細礫多量	硬質	10YR5/1（褐灰） 7.5YR4/2（灰褐）	
7トレンチ 第24図-53 写真図版16	石製品 磨石	— — —	研磨面は2面。先細りする先端に叩き痕。				

10. 桑崎遺跡　第１地区

所　在　地

富士市桑崎 330-1　外

調 査 面 積

113㎡（調査対象面積　2,000㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 10 月 17 日～ 11 月 7 日

調 査 原 因

道路改良

第 25 図　調査地位置図

遺跡の概要

桑崎遺跡は、愛鷹山南西麓に延びる丘陵上の標高 310 mほどの緩斜面に立地する遺物散布地である。過去の調査歴は無いが、曽利式期等の縄文土器片や、石鏃等の石製品が採集されている。

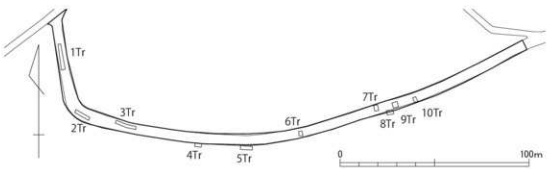
調査の概要

調査地に 10 ヶ所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

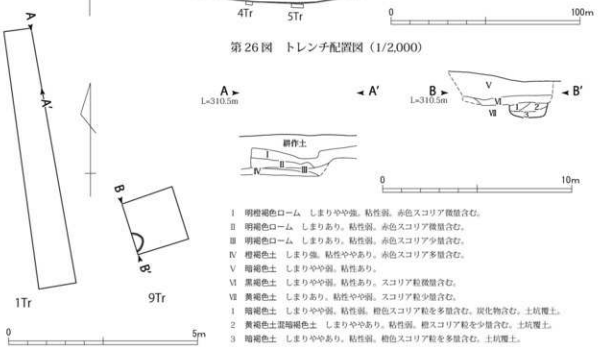
調査の結果

出土遺構・出土遺物　なし

9 トレンチで検出された土坑は近世のものとみられるため、遺構としての扱いはしない。



第 26 図　トレンチ配置図（1/2,000）



Ⅰ　明橙褐色ローム　しまりやや強。粘性弱。赤色スコリア微量含む。
Ⅱ　明褐色ローム　しまりあり。粘性弱。赤色スコリア微量含む。
Ⅲ　明褐色ローム　しまりあり。粘性弱。赤色スコリア少量含む。
Ⅳ　橙褐色土　しまり強。粘性ややあり。赤色スコリア多量含む。
Ⅴ　暗褐色土　しまりやや弱。粘性あり。
Ⅵ　黒褐色土　しまりやや弱。粘性あり。スコリア粒微量含む。
Ⅶ　黄褐色土　しまりあり。粘性やや弱。スコリア粒少量含む。
1　暗褐色土　しまりやや弱。粘性弱。橙色スコリア粒を多量含む。炭化物含む。土坑覆土。
2　黄褐色土混暗褐色土　しまりややあり。粘性弱。橙スコリア粒を少量含む。土坑覆土。
3　暗褐色土　しまりややあり。粘性弱。橙色スコリア粒を多量含む。土坑覆土。

第 27 図　1 トレンチ・9 トレンチ平面図（1/100）・土層断面図（1/200）

11. 花守遺跡　第３地区

所　在　地

富士市富士岡 123-4　外

調 査 面 積

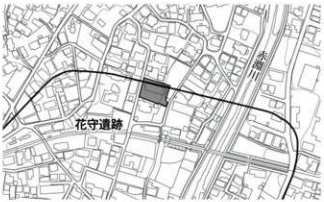
81㎡（調査対象面積　900㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 11 月 12 日～ 11 月 13 日

調 査 原 因

共同住宅建設



第 28 図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

花守遺跡は、浮島ヶ原低湿地の北岸と赤淵川の扇状地末端部が接する、標高 10 m ほどの緩斜面上に立地する遺物散布地である。

遺物採集量は少なく遺跡の性格は不明であるが、皿状木製品や須恵器坏片が確認されており、弥生時代末以降の水稲農耕に関わる集落跡の可能性が推測されている。

調 査 の 概 要

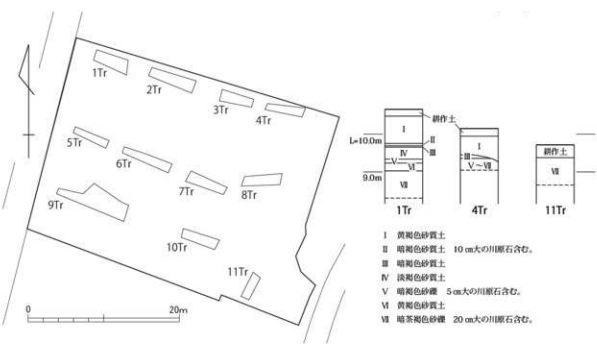
調査地に 11 ヶ所のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察により遺構・遺物の検出につとめた。

調 査 の 結 果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 29 図　トレンチ配置図（1/500）・土層断面図（1/100）

12. 国久保遺跡　第３地区

所　在　地

富士市国久保３丁目 2238-2

調 査 面 積

178㎡（調査対象面積　613㎡）

調 査 期 間

平成 13 年 11 月 19 日～ 11 月 23 日

調 査 原 因

共同住宅建設

第 30 図　調査地位置図

遺跡の概要

国久保遺跡は富士山南麓に延びる低丘陵上の標高 20 m ほどに立地する遺物散布地である。

過去の発掘調査では成果は得られていないが、表面採集遺物には奈良～平安時代の土師器片・須恵器片がみられ、かつて工場建設時に同時期の竪穴建物跡を確認していると伝わる。

近接する東平遺跡、滝下遺跡や舟久保遺跡との関連が注目される遺跡である。

調査の概要

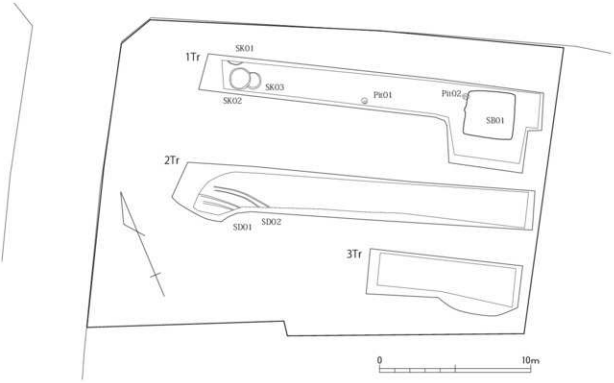
調査地に３本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

第１トレンチで竪穴建物跡の一部が確認されたため、トレンチを拡張し完掘調査を行った。

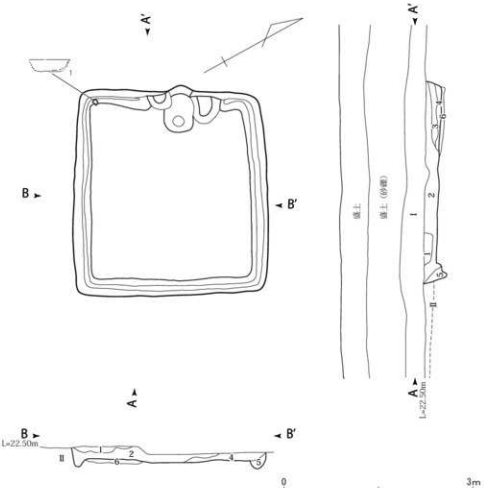
調査の結果

出 土 遺 構

竪穴建物跡１軒（SB01）、土坑３基（SK01 ～ 03）、溝状遺構２条（SD01・02）、ピット２基（Pit01・02）が検出された。

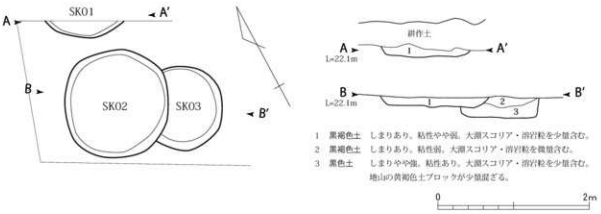


第 31 図　トレンチ配置図・遺構出土状況図（1/250）



Ⅰ　暗褐色土　しまりややあり。粘性弱。大淵スコリア・溶岩粒を少量含む。（旧耕作土）
Ⅱ　黄褐色土　しまり強。粘性あり。10㎝大の溶岩礫を含む。（地山）
1　黒褐色土　しまりやや弱。粘性やや弱。大淵スコリア・溶岩粒を少量含む。地山の土をブロック状に微量含む。（SB01 覆土）
2　暗褐色土　しまりあり。粘性やや弱。大淵スコリアを少量。溶岩粒を微量含む。地山の土をブロック状に含む。（SB01 覆土）
3　黒褐色土　しまりやや強。粘性ややあり。大淵スコリア・溶岩粒・灰白色粘土を少量。焼土・炭化物を微量含む。（SB01 覆土）
4　灰黄白色粘土　しまり強。粘性強。黒褐色土が混ざる。大淵スコリアを微量含む。（カマド粘土の流れ）
5　暗褐色土　しまり弱。粘性あり。大淵スコリア・溶岩粒を微量含む。（SB01 覆土）
6　暗褐色土　しまりごく強。粘性ややあり。地山の土に、少量の黒褐色土が混ざる。溶岩粒を微量含む。（SB01 掘方埋土）

第 32 図　SB01 実測図（1/60）



1　黒褐色土　しまりあり。粘性やや弱。大淵スコリア・溶岩粒を少量含む。
2　黒褐色土　しまりあり。粘性弱。大淵スコリア・溶岩粒を微量含む。
3　黒色土　しまりやや強。粘性あり。大淵スコリア・溶岩粒を少量含む。地山の黄褐色土ブロックが少量混ざる。

第 33 図　SK01・SK02・SK03 実測図（1/50）

SB01

１トレンチ西で検出された。覆土は大淵スコリアを含む暗褐色土である。

西壁にカマドを有し、主軸方位はN－61°－Wを示す。

平面プランは方形を呈し、主軸幅3.30ｍ、直交幅3.10ｍを測る。

カマドを除くすべての壁に、幅26～30㎝、深さ12㎝の壁溝が検出された。

部分的に５㎝ほどの貼床が確認された。柱穴は確認できなかった。

西壁やや北寄りに設置されたカマドは、上半が削平され、両袖の基部と燃焼室のみ確認できた。

残存部で、煙道部端から焚口までが74㎝、両袖幅116㎝、燃焼室幅44㎝、右袖長42㎝、左袖長24㎝を測る。灰黄白色粘土と黒褐色土を用いて構築されていたとみられる。袖の芯や支脚等の石材は検出されなかった。

図示できた遺物は、手づくねの坏（第36図－１）と、須恵器蓋の破片（第36図－２）のみであり、時期の特定はしがたいが、おそらく平安時代の建物跡であると推定する。

SK01～03

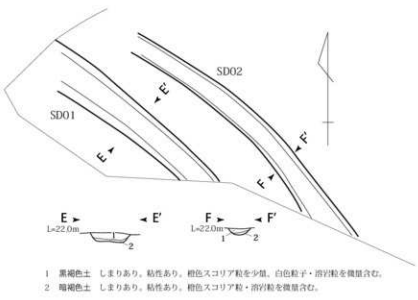
１トレンチ西に近接して検出された。

SK01は平面規模が不明であるが、残存する深さは約10㎝を測る。

SK02は平面形がほぼ正円を呈し、直径135㎝、残存する深さは12.5㎝を測る。

SK02に切られるSK03は、平面形は正円で、直径100㎝、残存する深さは25㎝を測る。

いずれも覆土には大淵スコリアが含まれる。



1　黒褐色土　しまりあり。粘性あり。橙色スコリア粒を少量、白色粒子・溶岩粒を微量含む。
2　暗褐色土　しまりあり。粘性あり。橙色スコリア粒・溶岩粒を微量含む。

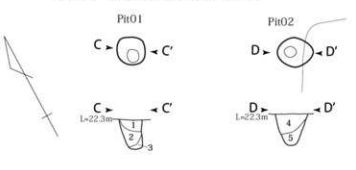
第34図　SD01・SD02実測図（1/50）

SD01・SD02

２トレンチ東で並行する２条が検出された。

SD01は幅40～55㎝、深さ12.5㎝、長さ2.5ｍを測り、SD02は幅30㎝、深さ10㎝、長さ3.5ｍを測る。

覆土はいずれも、大淵スコリアを含まない暗褐色土・黒褐色土の２層である。



1　黒褐色土　しまりあり。粘性やや弱。大淵スコリア・溶岩粒を少量含む。
2　暗褐色土　しまりあり。粘性やや強。大淵スコリアを少量含む。地山の黄褐色土が少量混ざる。
3　暗褐色土　しまり強。粘性やや強。大淵スコリアをごく微量含む。地山の黄褐色土が少量混ざる。
4　黒褐色土　しまりあり。粘性やや弱。大淵スコリア・溶岩粒をごく微量含む。
5　暗褐色土　しまり弱。粘性弱。大淵スコリア・溶岩粒を微量含む。

第35図　Pit01・Pit02実測図（1/50）

出土遺物（第36図・第7表）

土師器・須恵器・灰釉陶器の破片が少量出土し、4点を図化した。

1はSB01の床面南西角から出土した手づくねの坏である。

2は須恵器の蓋、口縁部片である。SB01覆土より検出された。

3・4はいずれも2トレンチからの出土である。3は須恵器短頸壺の口縁部片、4は灰釉陶器の口縁部片である。器種は甕、あるいは壺とみられるが特定しがたい。

第36図　出土遺物実測図（1/4）

第7表　出土遺物観察表

遺構 挿図番号 図版番号	器種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調 内面 外面	備考
SB01 第36図-1 写真図版16	手づくね 坏	8.5～9.0 2.5 —	内面外面指押圧ナデ。	細粒 赤色粒微量	やや 軟質	内外 10YR7/4(にぶい黄橙)	
SB01 第36図-2 写真図版16	須恵器 蓋	— — —	天井部外面に自然釉。	精選	硬質	2.5Y6/1(黄灰) 2.5Y4/3(オリーブ褐)	
2トレンチ 第36図-3 写真図版16	須恵器 短頸壺	— — —		精選	硬質	2.5Y4/2(暗灰黄) 2.5Y6/2(灰黄)	
2トレンチ 第36図-4 写真図版16	灰釉陶器 甕or壺	— — —		精選	硬質	2.5Y6/2(灰黄) 2.5Y6/1(黄灰)	

13. 沖田遺跡　第 122 次調査地点

所　在　地

富士市今泉 383-5　外

調 査 面 積

151㎡（調査対象面積　2,031㎡）

調 査 期 間

平成 14 年 1 月 22 日～1 月 24 日

調 査 原 因

倉庫・作業所建設

遺跡の概要

沖田遺跡は、愛鷹山南麓にひろがる浮島ヶ原の西北部に位置する。浮島ヶ原は海抜高度平均５ｍ以下の低湿地であり、地表下３～７ｍから弥生中期～奈良時代の土器片や、奈良・平安時代の条里制に伴うとみられる大畦畔が検出されている。

調査の概要

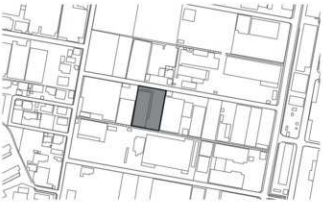
調査地に６ヶ所の試掘坑を設け、重機により掘削、土層断面および排土の観察を行い、遺構･遺物の検出につとめた。

調査の結果

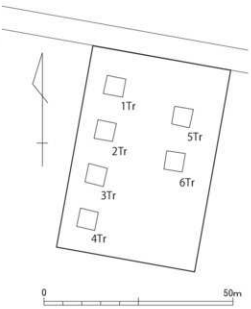
出 土 遺 構　なし

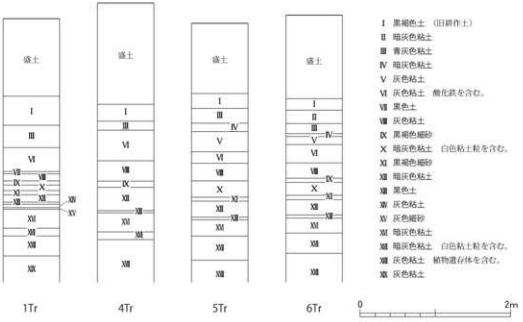
出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 37 図　調査地位置図





第 38 図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/50）

14. 比奈１古墳群　第３地区

所　在　地

富士市比奈 2622

調 査 面 積

10㎡（調査対象面積　1,060㎡）

調 査 期 間

平成 14 年 1 月 23 日～ 1 月 24 日

調 査 原 因

市道改良

第 39 図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

比奈１古墳群は、赤淵川の西岸、富士山南麓に広がる丘陵上に占地する 29 基の古墳で構成される。

その大半が後期古墳であるが、丘陵先端部には、古墳時代前期末～中期初頭に築かれたとみられる東坂古墳（全長約 60 mの前方後円墳）が存在していた。

調 査 の 概 要

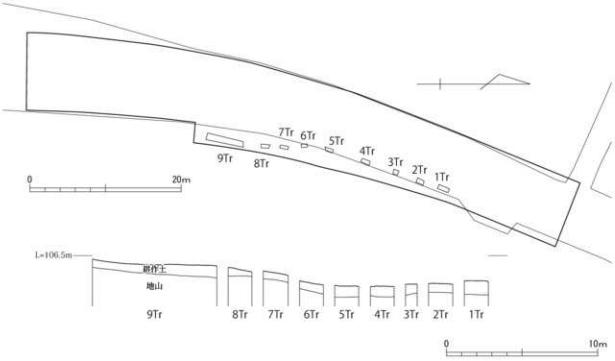
調査地に 9 ヶ所のトレンチを設定し、人力により掘削後、土層断面観察を行い遺構・遺物の検出につとめた。

調 査 の 結 果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 40 図　トレンチ配置図（1/500）・土層断面図（1/250）

15. 石坂２古墳群　第３地区

所　在　地

富士市大渕 200-1　外

調 査 面 積

179㎡（調査対象面積　953㎡）

調 査 期 間

平成 14 年２月４日

調 査 原 因

共同住宅建設

第 41 図　調査地位置図

遺跡の概要

石坂２古墳群は、広見本町の北西に南北に延びる丘陵上、標高 110 m ほどに立地する３基の後期古墳（１基は消滅）によって構成される古墳群である。残存する２基は横穴式石室を有する円墳で７世紀のものと推定されている。

調査の概要

調査地は、残存する石坂Ｃ－第 25 号墳（二タ子塚第１号墳）の隣接地である。

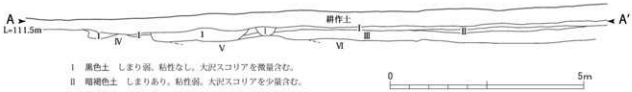
調査地に３本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察により遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果

出 土 遺 物　なし

出 土 遺 構　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



Ⅰ　黒色土　しまり弱。粘性なし。大沢スコリアを微量含む。
Ⅱ　暗褐色土　しまりあり。粘性弱。大沢スコリアを少量含む。
Ⅲ　黒褐色土　しまりあり。粘性あり。大沢スコリアを少量含む。
Ⅳ　黄褐色土　（地山）
Ⅴ　茶褐色土　溶岩礫を多量含む。（地山）
Ⅵ　茶褐色ローム　（地山）
Ⅰ　黒色土

第 42 図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

16. 舟久保遺跡　第 45 地区

所　在　地

富士市今泉 2637-1

調 査 面 積

21㎡（調査対象面積　990㎡）

調 査 期 間

平成 14 年 2 月 5 日

調 査 原 因

宅地造成

第 43 図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

舟久保遺跡では、奈良～平安時代を中心に、竪穴建物跡や掘立柱建物跡など多数の遺構・遺物が検出されている。

「倉」と墨書された土師器も発見されており、古代富士郡衙に関係する遺跡として注目される。

調 査 の 概 要

調査地は舟久保遺跡の隣接地である。

調査地に 6 ヶ所の試掘坑を設け、重機による掘削後、人力により精査、土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

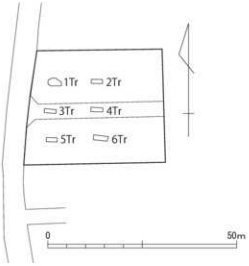
調 査 の 結 果

出 土 遺 物　なし

出 土 遺 構　なし

遺構・遺物は確認されなかった。

調査地は、過去に行われた畑のかさ上げ工事の際、地山まで削平された後、2.0 ～ 2.2 mほどの盛り土がされていることが確認された。



第 44 図　トレンチ配置図（1/1,000）

17. 高山古墳群　第２地区

所　在　地

富士市今泉 2657-1　外

調 査 面 積

318㎡（調査対象面積　2,675㎡）

調 査 期 間

平成 14 年３月４日～３月８日

調 査 原 因

宅地造成

第 45 図　調査地位置図

遺跡の概要

高山古墳群は富士山南麓に延びる低丘陵上、標高 60 m ほどに立地する２基の後期古墳（平成元年度調査により発見。当時は「舟久保遺跡高山地区」と呼称）で構成される。

調査の概要

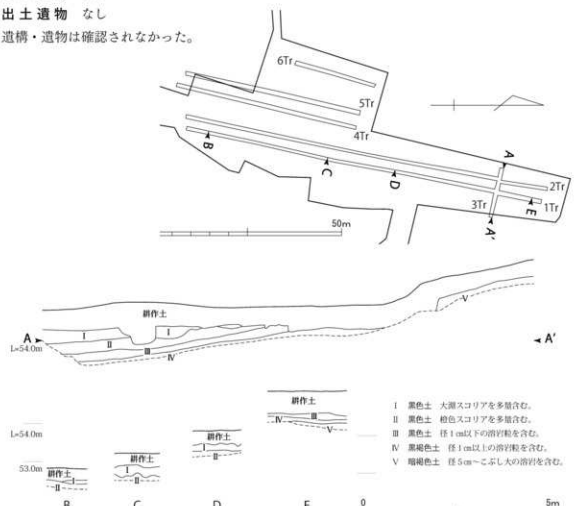
調査地に６本のトレンチを設定し、重機による掘削後、人力精査・土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果

出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　なし

遺構・遺物は確認されなかった。



第 46 図　トレンチ配置図（1/1,000）・土層断面図（1/100）

18. 上の段遺跡　第２地区

所　在　地

富士市境 669-2

調 査 面 積

8㎡（調査対象面積　548㎡）

調 査 期 間

平成 14 年 3 月 18 日～ 3 月 20 日

調 査 原 因

住宅建設

第 47 図　調査地位置図

遺 跡 の 概 要

上の段遺跡は、愛鷹山南麓の丘陵部末端、標高 20 mほどに位置する縄文時代の遺物散布地である。かつて、縄文時代中期後半の配石遺構、埋甕等が発見・調査されている。

遺跡範囲の北半は東名高速道路によってほぼ消滅し、南半は宅地化が激しい。

調 査 の 概 要

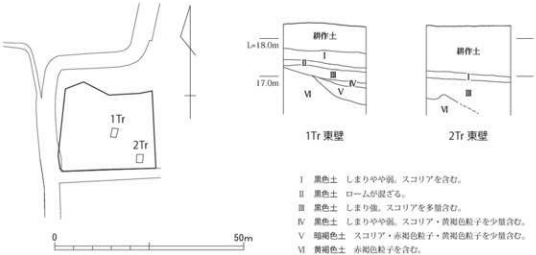
調査地に２ヶ所の試掘坑を設定し、人力により掘削・精査、土層断面観察を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

調 査 の 結 果

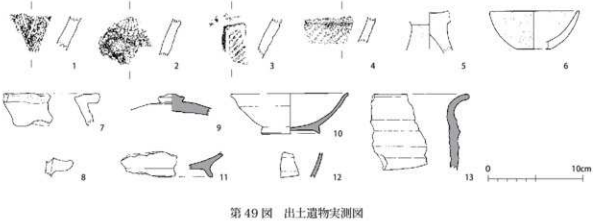
出 土 遺 構　なし

出 土 遺 物　縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器

遺構は確認されなかったが、コンテナ 1/2 箱の遺物を検出し、 縄文土器片（１～４）、土師器高坏脚部（５)･坏（６)･甕（７)･羽釜（８）、灰釉陶器蓋（９)･碗（10･11)、緑釉陶器碗（12)、陶器甕（13）の 12 点を図示した。



第 48 図　トレンチ配置図・土層断面図（1/1,000）



第 49 図　出土遺物実測図

第８表　出土遺物観察表

遺構 掘図番号 図版番号	器　種	法量(cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調 内面 外面	備　考
1トレンチ 第49図-1 写真図版16	縄文土器	－ － －		長石・石英・輝石 白色粒子	硬質	10YR6/6(明黄褐) 2.5Y4/4(オリーブ褐)	
1トレンチ 第49図-2 写真図版17	縄文土器	－ － －		長石・石英 白色粒子	硬質	2.5Y4/4(オリーブ褐) 10YR4/6(褐)	
1トレンチ 第49図-3 写真図版17	縄文土器	－ － －		長石・石英・輝石	硬質	7.5YR5/4(にぶい褐) 10YR5/4(にぶい黄褐)	
1トレンチ 第49図-4 写真図版17	縄文土器	－ － －		長石・石英・輝石	硬質	10YR5/4(にぶい黄褐) 10YR6/4(にぶい黄橙)	
1トレンチ 第49図-5 写真図版17	土師器 高坏	－ － －	脚部外面縦方向のヘラミガキ。		硬質	内外 7.5YR6/6(橙)	
1トレンチ 第49図-6 写真図版17	土師器 坏	(9.4) 4.0 (3.4)	口縁部ナデ調整。体部内面外面ヘラミガキ。体部外面下半ヘラケズリ。	精選	硬質	内外 7.5YR7/6(橙)	
2トレンチ 第49図-7 写真図版17	土師器 甕	－ － －		白色粒子	硬質	7.5YR6/6(橙) 7.5YR6/4(にぶい橙)	
1トレンチ 第49図-8 写真図版17	土師器 羽釜	－ － －		白色粒子	硬質	内外 7.5YR5/4(にぶい褐)	
1トレンチ 第49図-9 写真図版17	灰釉陶器 蓋	－ － －	天井部外面回転ヘラケズリ。	精選	硬質	内外 2.5Y6/3(にぶい黄)	
1トレンチ 第49図-10 写真図版17	灰釉陶器 椀	(12.2) (4.2) (6.2)	底部外面回転ヘラケズリ。貼付高台。体部内面のみ施釉。	精選	やや 軟質	2.5Y6/2(灰黄) 2.5Y7/3(浅黄)	O-53 25%残
1トレンチ 第49図-11 写真図版17	灰釉陶器 椀	－ － －		精選	硬質	2.5Y5/3(黄褐) 2.5Y6/3(にぶい黄)	
1トレンチ 第49図-12 写真図版17	緑釉陶器 椀	－ － －	内面外面とも施釉。	精選	硬質	内外 10Y4/2(オリーブ灰)	
1トレンチ 第49図-13 写真図版17	陶器 甕？	－ － －	胎土・色調とも他の土器とは異なる。全体に雑な調整。	細礫多量	硬質	2.5YR/2(灰白) 2.5Y6/2(灰黄)	

第３章　伝法 国久保古墳の発掘調査

第１節　調査経過

1.　調査に至る経緯

本章で報告する国久保古墳の発掘調査（国久保遺跡　第２地区）は、株式会社井出組が富士市国久保二丁目 2015-29 外 12 筆（1781.04㎡）[1] において平成 13 年６月から 10 月にかけて行った宅地造成・分譲工事を契機とした試掘・確認調査である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である国久保遺跡（S-45）の範囲内に含まれているため、平成 13 年３月８日、事業者より富士市教育委員会へ「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」ならびに「発掘調査承諾書」が提出された。これを受けて、市教育委員会により遺跡の状態を確認するための試掘・確認調査を実施する運びとなった。

2.　調査の体制

国久保古墳の発掘調査は、「平成 13 年度　市内遺跡発掘調査事業」として富士市教育委員会教育長太田　均のもと、第２章　第１節に示した調査体制を組んで実施したが、現地調査の体制は以下の通りである。

調査担当：文化スポーツ課	上席主事	前田　勝己
	臨時職員	吉田　博子
調査補佐：文化スポーツ課	短期臨時職員	井倉　洋子
		小瀧　純子

なお、発掘調査作業員は、社団法人富士市シルバー人材センターに委託し、調査担当者の指揮のもと作業を行った。

3.　調査の経過

（１）　発掘調査

発掘調査は平成 13 年５月 16 日（水）から同年５月 31 日（木）まで行った。

５月 16 日に調査準備を行った後、17 日（木）に資材の搬入や第１トレンチの重機掘削を行った。第１トレンチでは遺構や遺物が検出されなかったため、土層断面図の実測、埋め戻しを行った。翌 18 日(金)に第２トレンチの掘削を行ったところ、トレンチ北側において埋没した古墳の横穴式石室が検出された。その際に右側壁[2]の一部の石材を重機で動かしている。第２トレンチは古墳の検出された部分を残して、土層断面図の作成後、同日中に埋め戻しを行った。

５月 21 日（月）には横穴式石室全体を検出するためにトレンチを拡張した。横穴式石室は床面や側壁１段目（一部で２段目）までが良好に残存していることが判明し、石室の周囲では長方形の墓坑も検出された。平板測量・実測も併せて開始した。22 日（火）に石室基準点測量を行った後は、23 日の雨天休工を挟んで、25 日（金）まで床面の精査とともに側壁や遺物の実測作業、遺物取上げを行った。

５月 27 日（月）には株式会社フジヤマに委託して床面石敷のオルソフォトの作成を行った。またその画像データをもとに、29 日（火）まで床面平面図や断面図の作成、レベリング等を行った。遺物取上げも随時行っている。事業者との協議の結果、横穴式石室は盛土によって保護が図られることとなっ

たため（H13 富教文発第 146 号）、床面の調査は最上面の検出まででで切り上げられ、30 日（水）には側壁図の作成や写真撮影を行ったのちに青砂によって埋め戻しを実施した。また併せて第３トレンチの掘削も行っている。埋め戻しは 31 日（木）まで行い、調査を終了した（H13 富教文発第 79 号）。

なお、調査終了後の造成工事の際には文化スポーツ課職員により工事立会いを実施し（H13 富教文発第 173 号）、埋蔵文化財への影響がないことを確認した。また、当該地を周地の埋蔵文化財包蔵地「国久保古墳」として新規登録した。

石室調査風景

青砂による埋め戻し状況

（２）　整理作業

発掘調査報告書作成に向けての整理作業は平成 22 年４月１日より開始し、平成 23 年３月に本書の刊行をもって終了した。

期間中に出土土器・金属製品の洗浄や接合、復原、遺物の図化作業、遺構図・遺物図等の編集、各図のトレース作業、観察表等の作成、遺物の写真撮影、報告の執筆を行った。金属製品については財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託して、X 線撮影を実施している（H22 富教文発第 341 号）。雁木玉については明治大学文化財研究施設に依頼して、蛍光 X 線分析を行った（H22 富教文発第 234 号）。また金属製品や玉類の個別写真、遺物集合写真については寿福写房の寿福　滋氏に依頼して撮影を行った。最後にこれらを編集して報告書を作成した。

なお刀装具１～３や轡、耳環、雁木玉については平成 16 年３月に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に委託して、クリーニング、安定化処理、強化処理、修復といった一連の保存処理を行っている。

本書にて報告する遺物や図面は、すべて富士市教育委員会にて保管・管理されている。

注

1）調査対象地の地番・対象面積については、「埋蔵文化財試掘確認調査依頼書」・「発掘調査承諾書」では国久保２丁目 2015-16 外９筆（対象面積 1691.23㎡）とされているが、「埋蔵文化財発掘の届出書」では国久保２丁目 2015-29 外 12 筆（対象面積　1781.04㎡）とされており、対象地の南側を拡大した範囲で申請されている。第２表　平成 13 年度発掘調査一覧（pp.5）は依頼書の記述に基づくものである。

2）以下、横穴式石室の側壁に関わる左右の呼称は、奥壁から開口部側を臨んだ際の呼称である。

第２節　伝法古墳群の概要

１．伝法古墳群の概要

本書で扱う伝法古墳群とは、富士市域の西側を流れる潤井川の北東岸に位置し、富士山南麓に広がる大源扇状地の低丘陵上からその裾野の緩斜面にかけて築かれた古墳群の総称である。

伝法古墳群という名称については、これまで旧伝法村の中でも富士火山地と富士川・潤井川の形成した沖積平野の境に広がる古墳群を指して「伝法古墳支群」（後藤・中野ほか 1958）とされたのを基本的な考えに据えつつ、２つに細分した「伝法Ａ・Ｂ古墳群（支群）」（後藤・中野ほか 1958、渡井 1988）、さらに３つに細分した「伝法１・２・３古墳群」（富士市教育委員会編 2007）といった呼称が使用されてきている。またこれらの古墳の北側に接する、石坂や広見の低丘陵上に立地する古墳群については「石坂古墳支群」としてまとめられたのを契機として（後藤・中野ほか 1958）、これらを「片倉古墳群」・「八ヶ窪古墳群」・「広見古墳群」・「石坂古墳群」に分割する考え（渡井 1988）や、さらに細かく「片倉１～３古墳群」・「石坂１～12 古墳群」・「土手内・中原１～２古墳群」に分割する考え（富士市教育委員会編 2007）もある。近年提示されているこれらのような細分案は、あくまで行政的に埋蔵文化財包蔵地を認識するための線引きという色合いが濃厚であり、古墳と古墳文化を考える上での境界とは言い難い。

したがってここでは第 50 図に示した範囲の古墳について、伝法沢川の周辺とその東側に伸びる低丘陵部に立地した古墳として捉え、伝法古墳群と総称する。これについては丘陵上に立地する広見や石坂の古墳と、丘陵南端と沖積平野の境に立地する伝法周辺の古墳とで細分することも可能であると考えるが、そちらは今後の課題としたい。現段階で判明している伝法古墳群の展開動向やその構造については、第４節で詳述することとし、本節ではこれまでの調査履歴を紐解き、古墳群の概要を提示する。

２．伝法古墳群の調査履歴

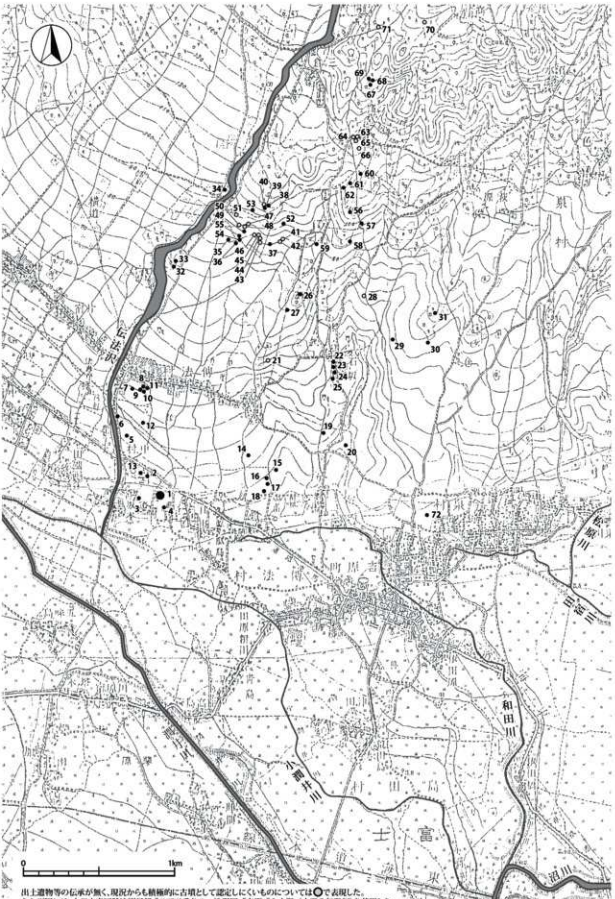
第９表は伝法古墳群の一覧表である。過去に消滅したものを含めて現在 72 基の古墳の存在が確認されているが、そのなかには明瞭なマウンドもなく巨大な溶岩自然石の露頭のみで認定されているものもあるため、実際の総数は 60 基前後になるとみられる。ただ当該地が近代以降急速に宅地化の進行した地区にあたることもあって、埋没古墳の新規発見も多く見込まれる土地柄ではある。

古墳群造営の端緒となった古墳が、古墳群の南西端、沖積平野に面した丘陵南端部に築かれた伊勢塚古墳（1）である。径 54m を測る二段築成の大型円墳であり、墳丘や周溝から川西Ⅴ期の円筒埴輪が出土した。6 世紀前葉頃の築造と推定される。

伊勢塚古墳から伝法沢川を 1.5km ほど遡ったところに位置するのが、径 11m の円墳である中原４号墳である（33）。主体部である段構造を有する無袖形横穴式石室からは、銀象嵌鉄剣や銀象嵌鉄刀、鉄製馬具といった副葬品のほか、Ｕ字形鑱先や鉋を含む各種農工具や県内では珍しい鍛冶具の鉄鉗も出土しており、鉄器生産やその流通に関わる集団の長たる被葬者の性格が想定される。

またそこから 500m ほど上流には径 16m の円墳である横沢古墳（34）が立地し、全長 8.7m を測る当地域では大型の無袖形石室からは鉄鏃や鉄製馬具のほか、金銅製花形飾鋲や金銅製鈴なども出土している。これらの古墳は遠江Ⅲ期中葉から後葉（TK43 ～ TK209 型式期）にかけて相次いで築かれたものと考えられる。

また伊勢塚古墳の周囲には、金銅装馬具の出土が伝えられる九郎林塚古墳（3）や鏡の出土が伝わる鏡塚古墳（4）、甲冑の出土が伝わる兜塚古墳（5）など、目を見張る副葬品内容の古墳が占地しているのであり、この中には伊勢塚古墳の前後や中原４号墳築造までの間に築かれたものが含まれている可能性が高い。



出土遺物等の伝承が無く、現況からも積極的に古墳として認定しにくいものについては●で表現した。
なお下図には、大日本帝國陸地測量部『二万五千分の一地形図』「吉原」「入山瀬」(大正八年発行)を使用した。

第50図　伝法古墳群分布図（1/25,000）

続く7世紀代には、伝法沢川からやや距離をおいた範囲にも古墳の分布が及ぶようになる。東平1号墳（14）は全長5.2mの段構造を有する無袖形石室から、銅製杓子形壺鐙や金銅製飾金具、鉄製方形鏡板付轡、銀象嵌大刀、鉄製円頭柄頭、丁字形利器などといった当該期では一級の副葬品が確認されており、7世紀前半頃の伝法古墳群における中心的な古墳として位置付けられる。

8世紀前葉になっても、西平1号墳（7）のように、金銅製方頭柄頭や鉄製喰出鍔、蕨手刀、銅製鈎帯金具などの豊富な副葬品が出土する古墳もみられ、この時期までは古墳群の造営が続けられていたことが推定される。

このほかにも、中村上1号墳（13）や中原3号墳（32）、土手内1号墳（37）、土手内2号墳（38）、中原6号墳（55）、片倉1号墳（67）といった古墳で、段構造を有する無袖形石室が確認されており、近年ではこのような石室形態が古墳時代後期の東駿河を特徴付ける墓制として認識されるまでにいたっている（志村1987、木ノ内1998、井鍋2003、菊池2010など）。

また本古墳群が位置する伝法地区では8世紀以降、大規模な集落遺跡である東平遺跡が本格的に成立しはじめる。東平遺跡は各地点によって遺構の密度は異なるものの、これまでにおこなわれた調査により、奈良・平安時代に営まれた多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡に伴って、遠江や西駿河、甲斐などの諸地域との交流を示す土師器や、「布自」・「厨」などの文字が記された墨書土器、また鈎帯金具や馬具、鉄鏃といった金属製品が出土しており、官衙的性格の濃厚な計画的集落であった可能性が示されている（平林編1981、佐野2008など）。また遺跡の南東部では布目瓦が広範囲に検出される地区も存在し（三日市廃寺跡）、その周辺は『日本三代実録』所載の定額寺である「法照寺」の有力な候補地として認識されている（木ノ内編2002など）。

東平遺跡が直前まで古墳の築造や追葬行為・墓前祭祀が実施されていた伝法古墳群の地に営まれた点は重要であり、当古墳群の被葬者集団に連なる人物・人格が、集落の形成にも深く関わっていたことが推察される。

第９表　伝法古墳群一覧表（1）

	古墳名	現状	標高（m）	墳形	墳長（m）	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
1	伝法A・第１号墳 伊勢塚古墳	存在	15	円墳（二段）	54		-	6c 初頃）	円筒埴輪片	橋形周溝？（幅7.8m、東側で確認） 上段下段とも斜面に葺石 昭和宅地開発(S33.9.2)	1 9 11 12
2	伝法A・第２号墳 コンニャク稲荷塚	存在	20	円墳	15	（横穴式石室 ・組合式箱形石棺）	-	6c 後半 -7c 前半）	刀子・鞍環・須恵器片（横瓶）		2 12
3	伝法A・第３号墳 九郎林塚	消滅	14	円墳	-	（竪穴式石室、 長 3m、幅 1m）	-	-	大刀身・鍍金鞘・鍍金鞘板・須恵器（坩）		2 12
4	伝法A・第４号墳 鏡塚	消滅	13	円墳	-	-	-	-	（伝）鏡１		2 12
5	伝法A・第５号墳 狸塚	消滅	26	-	-	-	-	-	（伝）大刀身・甲冑残片・須恵器片		2 12
6	伝法A・第34号墳 西ノ平古墳	消滅	29	-	-	（無袖形横穴式石室）	-	-	直刀・直刀装具・鉄鏃・金環		3 12
7	伝法A・第35号墳 西平第１号墳	存在	37	-	-	横穴式石室、段構造？ （残存長 3.2m、 幅 1.3m、床面１面）	南南東	8c 前葉	蕨手刀１・直刀１・金銅製方頭柄頭１・鉄製鞍前淵２・足金具３・責金具１・金銅製鞘口金具１・鉄製切羽１・銅製鞘帯金具（逢方４・丸鋲４・瓢尾１）・須恵器（ハソウ２・長頸壺１・坏身１）		8 11 12 18
8	西平第２号墳	存在	38	-	-	無袖形横穴式石室 （残存長 2.2m、幅 0.65m、 床面１面）	南	(8c 前半)			20
9	西平第３号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 1.5m、幅 0.6m、床面１面）	南東	(8c 前半)			20
10	西平第４号墳	消滅	37	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 4m、幅 0.7m、床面１面）	南東	(8c 前半)	須恵器片（長頸壺・坏身・甕）		20
11	西平第５号墳	消滅	38	-	-	無袖形横穴式石室（推定長 2m、幅 0.6m、床面１面）	南南東	(8c 前半)			20
12	西平第６号墳	消滅	28	-	-	無袖形横穴式石室（残存長 3.2m、幅 0.9m、床面１面）	南南東	(7c 後半 ～未)			19
13	中村上第１号墳	消滅	18	-	-	無袖形横穴式石室、段構造 （残存長 4.8m 、幅 1.3m、床面１面）	南南西	7c 前葉～ 中葉	須恵器（フラスコ形長頸瓶１・提瓶１）・鉄鏃３・鉄製刀子３・銅製耳環１		22
14	東平第１号墳	消滅	25	円墳	13	無袖形横穴式石室、段構造 （全長 5.2 m、幅 1.5m、床 面２面）	南東	(7c 前葉)	第 1(上面)床面　銅製杏子型壺鐙１対・鉄製鞍具・金銅製飾金具４・銅製方形鐙板付轡１・無形立聞式環状鐙板付轡１・鐙象嵌六窓透彫付大刀２・大刀１・丁字型刺鉤１・鉄鏃・刀子１ 第 2(下面)床面　金銅製飾金具６・鉄鏃・鉄製円頭柄頭１・刀子２ 周溝　須恵器片（坏身・大甕・長頸壺・ハソウ）	周溝（幅 2.2 ～3.2m、南側以外で確認）	13 17
15	伝法B・第７号墳	消滅	18	円墳	20	（横穴式石室）	-	(7c 末～ 8c 中葉)	須恵器片 （伝）大刀身		2 12
16	伝法B・第８号墳	消滅	22	円墳	-	（箱形石棺）	-	(7c 末～ 8c 中葉)	須恵器片 （伝）大刀身		2 12
17	伝法B・第９号墳	消滅	17	円墳	-	（箱形石棺）	-	(7c 末～ 8c 中葉)	（伝）直刀残片・須恵器片		2 12
18	伝法B・第10号墳	消滅	15	円墳	-	（箱形石棺）	-	(7c 末～ 8c 中葉)	（伝）直刀残片・須恵器片		2 12
19	国久保古墳	存在	25	円墳	(8)	無袖形横穴式石室、段構造 （全長 4.7m、幅 1.2m）	南東	7c 前葉～ 中葉	銀装大刀柄頭片・鞍具金具２・銀製八窓鐔１・大刀身多量片・鉄鏃・銀具造立聞式環状鐙板付轡１・玉類（ガラス製棗木玉１・水晶製切子玉２・琥珀木製丸玉２・ガラス製丸玉 26）・耳環１・鉄鏃１・須恵器片（坏）	周溝 （幅 1.2m）	本書
20	石坂C・第22号墳	消滅	20	円墳	-	-	-	-	（伝）直刀残片・須恵器片		2.12
21	土手内第25号墳	存在	50	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
22	石坂C・第18号墳	消滅	41	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
23	石坂C・第19号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
24	石坂C・第20号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
25	石坂C・第21号墳	消滅	39	-	-	-	-	-	須恵器片		2.12
26	石坂C・第16号墳 カネ山塚	存在	73	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	灰釉陶器片 （伝）直刀・須恵器（坩）	「古原市の古墳」では石坂C・第16号墳	2 12
27	石坂C・第17号墳	消滅	65	-	-	-	-	-	灰釉陶器片	「古原市の古墳」では石坂C・第16号墳	2 12
28	桑原古墳	存在	60	-	-	一部露出	-	-			12
29	万谷古墳	消滅	66	-	-	-	-	-	須恵器		12
30	苑久古墳	消滅	68	-	-	無袖形横穴式石室 （全長 6.2m、幅 1.8m）	南南東	6c 末～ 7c 中葉	須恵器片（坏身・坏蓋・甕・長頸坩？）・土師器破片（甕）・刀子・鉄片		12 14
31	石坂C・第23号墳	消滅	76	円墳	-	（無袖形横穴式石室）	-	-	（伝）かわらけ（須恵器か土師器？）		2.12
32	中原第３号墳	消滅	72	円墳	7.5	無袖形横穴式石室、段構造（全長 4.5m、幅 0.75m、 床面２面）	南	6c 末～ 7c 初頭）	大刀２・鉄鏃・刀子・須恵器（提瓶１）	周溝（幅 1.5 ～2m、全周）	15

第９表　伝法古墳群一覧表（2）

	古墳名	現状	標高（m）	墳形	墳長（m）	内部主体	開口方向	築造年代	主な出土遺物	備考	参考文献
33	中原第４号墳	消滅	73	円墳	11	無袖形横穴式石室、段構造（全長5.6 m、幅1.1 m）	南南西	6c 後半	銀象嵌八頭透潰付大刀１・銀象嵌潰付鹿角装柄頭鞘１・大刀身１・刀子８・鉄鏃 100 以上・矩形立聞式環状鏡板付轡２・兵庫鎖立聞系環式環状鏡板付轡１・鉸具４・飾金具５・木製三角錐形帯鉤２・U字形鏡先４・鎌２・有袋鉄斧３・鉋６・錐１・鉄剣１・鉄鉾１・砥１・砥石２・玉類（瑪瑙製勾玉 12・水晶製切子玉 22・琥珀製丸玉４・碧石製小玉７・碧玉製管玉 21・ガラス製小玉 236・土製小玉 108・土製管玉２）・須恵器（提瓶５・横瓶２・ハソウク・把手付碗１・坏身９・坏蓋３・広口壺１・長頸壺１）・土師器（坏１）	周溝（幅 1.5 ～ 1.7m、全周）	15 21
34	横沢古墳	消滅	97	円墳	16	無袖形横穴式石室、段構造（改修あり）第１期：全長 8.7 m、幅 2.3 m、床面１面（第３） 第Ⅱ期：全長 7.8 m、幅 2.3 m、床面２面（第１・第２）	南南東	6c 後半	第１期周溝：須恵器片（坏身） 第１期前庭部：須恵器（坏身・坏蓋・無蓋高坏・有蓋高坏）　第Ⅱ期周溝：須恵器（大甕）・鉄鏃 第Ⅱ期前庭部：土師器（坏）・須恵器（坏身・坏蓋・長頸壺） 第１床面：骨片　第２床面：須恵器（坏身蓋６セット）・直刀・鉄鏃・刀子 第３床面：須恵器（提瓶・ハソウク）・鉄鏃・直刀・刀子・鉸具・矩形立聞式轡・金銅製鈴５点・金銅製花飾鋲・木製金具製品	周溝２本（第１期・第Ⅱ期、間口部除く 2/3 周） 葺石	6 11 12
35	中原第１号墳	消滅	83	（円墳）	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長３ m、幅 0.95 m）	南南東	8c 前葉	玉類（瑪瑙製勾玉・石英製勾玉・碧玉製管玉・琥珀製丸玉・水晶製切子玉・蛇紋岩製石玉・翡翠製石玉・ガラス製丸玉・蛇紋岩製小玉・ガラス製小玉・蛇紋岩製小玉）・刀子・須恵器片（大甕・平瓶）		4 11 12
36	中原第２号墳	消滅	78	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長 2.8 m、幅 1.2 m）	南南東	8c 前葉	須恵器片（平瓶）		5 11 12
37	土手内第１号墳	消滅	80	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（全長 6.0 m、幅 1.3 m、床面２面）	南南東	7c 末～ 8c 初頭	造墓時床面：鉄鏃６ 築造時床面：須恵器（長頸瓶１・長頸壺１・ハソウ B）・土師器（坏 3c・ガラス製小玉 109・鉄鏃４		7 11 12
38	土手内第２号墳	存在	104	-	(6)	無袖形横穴式石室、段構造（全長 5.4 m、幅 1.0 m）	南南東	-			12
39	土手内第４号墳	存在	104	-	(9.5)	（横穴式石室）	（南南東）	-			12
40	土手内第５号墳	存在	105	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
41	土手内第６号墳	存在	82	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
42	土手内第７号墳	存在	80	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
43	土手内第 16 号墳	存在	84	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
44	土手内第 17 号墳	存在	86	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
45	土手内第 18 号墳	存在	89	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
46	土手内第 19 号墳	存在	87	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
47	土手内第 20 号墳	存在	91	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
48	土手内第 21 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
49	土手内第 22 号墳	存在	84	-	-	横穴式石室（内法長３～４ m、幅１ m）	南南東				12
50	土手内第 23 号墳	存在	88	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
51	土手内第 24 号墳	存在	94	-	-	墳丘北の地盤ゆみ	-	-			12
52	土手内第 26 号墳	存在	92	-	(10)	長好に残存	南南東	-	須恵器片		12
53	土手内第 27 号墳	存在	101	-	-	側壁２段残存（全長 4.7 m、幅 1.0 m）	南東	-	須恵器片（甕・坏蓋）・土師器片（てづくね坏）		12
54	中原第５号墳	消滅	81	円墳	9	横穴式石室（残存長 2.0 m、幅 1.3 m）	南南東	-	刀子・石玉１・須恵器片（ハソウク・坏蓋・甕）・土師器片（坏）		
55	中原第６号墳	消滅	83	円墳	10	無袖形横穴式石室、段構造（全長５ m、幅 1.2 m）	南南東	-	大刀身片・大刀装具・刀子・鉄鏃・鉸具・須恵器片（坏身・坏蓋・甕・ハソウ・壺）	周溝（幅２m、南側除く）	
56	石塚C-第 12 号墳	消滅	102	円墳	-	（横穴式石室、組合式箱形石棺）	-	-	（伝）大刀身残片・須恵器片		2 12
57	石塚C-第 13 号墳	消滅	92	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	（伝）須恵器片		2.12
58	石塚C-第 14 号墳	消滅	78	円墳	-	（横穴式石室）	-	-	（伝）須恵器片		2.12
59	石塚C-第 15 号墳	消滅	84	円墳	10	-	-	-			2.12
60	石塚C-第 11 号墳	消滅	110	円墳	8	（横穴式石室）	-	-	-		2.12
61	石塚C-第 25 号墳 二タ子塚第１号墳	存在	110	円墳	(13)	無袖形横穴式石室（全長 7.1m、幅 1.4m）	南南東	(7c 中葉)			12
62	石塚C-第 26 号墳 二タ子塚第２号墳	存在	108	円墳	(14)	無袖形横穴式石室（全長 9.0m、幅 1.4m）	南南東	(7c 前半)	須恵器片（坏・大甕）	周溝（幅６m、北側で確認）	
63	八ケ窪第１号墳	存在	129	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
64	八ケ窪第２号墳	存在	131	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
65	八ケ窪第３号墳	存在	130	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
66	八ケ窪第４号墳	存在	124	-	-	溶岩の自然石露出	-	-	-		12
67	片倉第１号墳	存在	170	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（残存長 4.5m、幅 1.3m、高さ 1.7m）	南南東	7c 後葉	土師器（てづくね坏数点）		10 11 12
68	片倉第２号墳	存在	170	-	-	-	-	-			12
69	片倉第３号墳	存在	170	-	-	-	-	-	須恵器片（ハソウ）		12
70	片倉第４号墳	存在	195	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
71	片倉第５号墳	存在	190	-	-	溶岩の自然石露出	-	-			12
72	今泉６丁目第１号墳	消滅	609	-	-	無袖形横穴式石室、段構造（推定全長 4.4 m以上、幅 1.4 m）	南南東	7c ?	耳環・須恵器		16

第９表の参考文献

1　後藤守一ほか　1958「第四　伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』 吉原市教育委員会

2　中野国雄　1958「第五　吉原市域の古墳」『吉原市の古墳』 吉原市教育委員会

3　中野国雄　1972「第一章第四節（4）伝法・石坂古墳群」『吉原市史　上巻』 富士市

4　及川　司　1981「古墳時代の調査　第２章　中原１号墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原１号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』 富士市教育委員会

5　及川　司　1981「Ⅵ-2　中原第２号墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　上手内古墳・中原第２号墳・中原遺跡』富士市教育委員会

6　志村　博　1981「古墳時代の調査　第１章　横沢古墳」『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原１号墳　伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）　天間地区』 富士市教育委員会

7　志村　博　1981「Ⅵ-1　上手内古墳」『左富士臨港線埋蔵文化財発掘調査報告　上手内古墳・中原第２号墳・中原遺跡』富士市教育委員会

8　志村　博　1983「西平第１号墳緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会

9　志村　博　1983「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会

10　志村　博　1983「大淵片倉第１号墳石室実測調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』 富士市教育委員会

11　渡井義彦　1984『第 10 回企画展　富士の古墳文化』 富士市立博物館

12　渡井義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』 富士市教育委員会

13　久松義昭　1990「東平第１号墳発掘調査概報」 富士市教育委員会

14　久松義昭　1991「荒久古墳発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書 － 第２集 － 』 富士市教育委員会

15　富士市教育委員会　1994『中原第３号墳・第４号墳　発掘調査概要報告書』

16　富士市教育委員会　1996『舟久保遺跡　第 20・21・33・34 地区発掘調査報告書』

17　富士市教育委員会　2001 『富士市の文化財』

18　志村　博　2003「第Ⅱ章第１節　第４地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会

19　志村　博　2003「第Ⅱ章第３節　第 24 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会

20　前田勝己　2003「第Ⅱ章第２節　第 23 地区の調査」『東平遺跡発掘調査報告書』 富士市教育委員会

21　前田勝己　2008「駿河東部の事例報告　富士市中原４号墳」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室 － 駿河東部の無袖式石室を中心に － 』 静岡県考古学会

22　藤村　翔　2010「第Ⅲ章第１節－１　中村上１号墳」『東平遺跡　第 15 地区』 富士市教育委員会

第３節　国久保古墳の調査成果

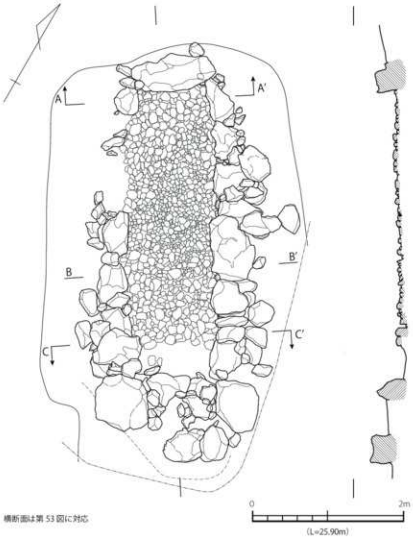
１．古墳の現況

国久保古墳は既に宅地化が進行していた市街地内に位置する埋没古墳である。アスファルトで舗装されていた駐車場内の地表下 1.2m 程から横穴式石室が発見されており、周囲には石室石材の露頭等、古墳の存在を匂わせる要素もみられなかった。

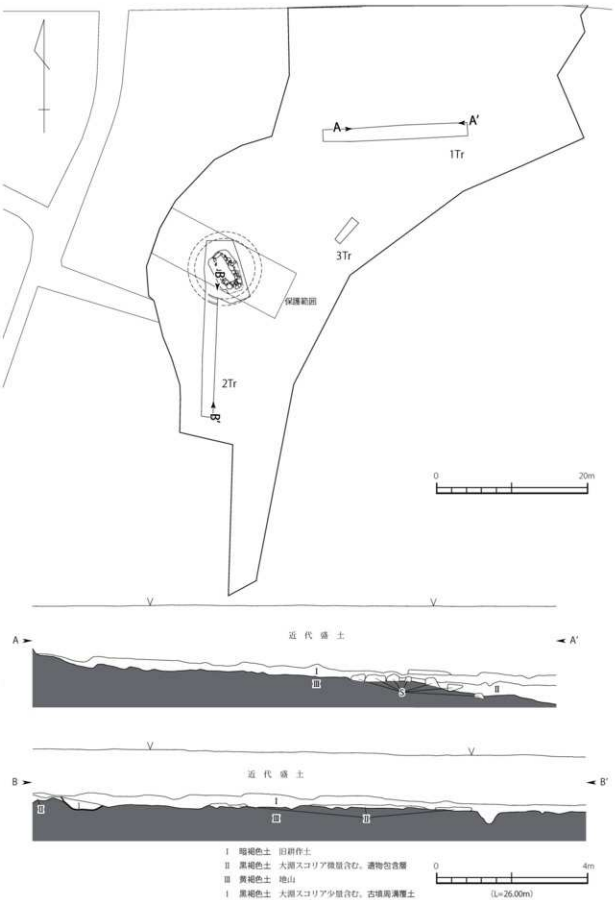
２．墳丘の構造

古墳の石室は厚さ 1.2m の近代盛土下で確認された旧耕作土に埋もれていたが、そのさらに下では大淵スコリアを含んだ古墳時代から律令期の遺物包含層が薄く部分的に残存しており、これが古墳築造時の生活面と考えられる。遺物包含層の下は富士山南麓で通有にみとめられる大淵扇状地堆積物層であるが、トレンチ調査の状況からは北西から南東方向に降る緩やかな斜面を形成していることが確認できた。古墳築造に伴う掘削はこの基盤層まで及んでいる（第 52 図）。

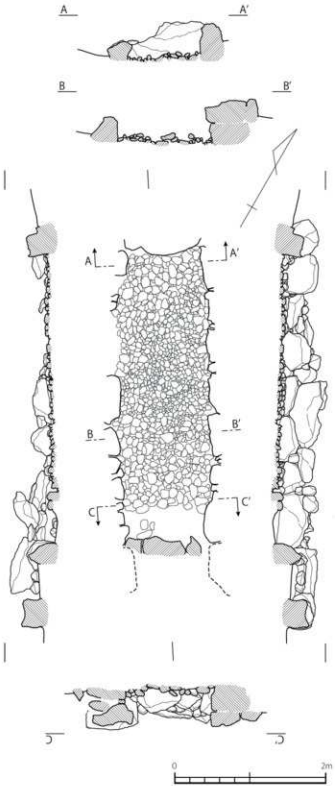
墳丘　墳丘盛土は、耕作によって大部分が失われているようであり、トレンチ内では全く確認することができなかった。



第 51 図　国久保古墳検出状況図（1/50）



第52図　確認調査トレンチ配置図（1/500）・土層断面図（1/100）



第53図　横穴式石室展開図（1/50）

周溝　周溝は平面的には確認できなかったものの、第2トレンチ東壁の土層観察から確認することができた。それによると、上端幅が現状で1.2m、下端幅が0.6m、現状深さ0.3mを測り、断面は角丸逆台形状を呈する。

周溝の検出位置と石室中心点から墳丘を復元すれば、径8m程度の円墳であった可能性が想定される。

3．石室と墓坑の構造

形状・規模　（第51・53図）国久保古墳の主体部は、主軸が磁北に対して西に60度振れ、南東方向に開口する無袖形の横穴式石室である。石室石材はすべて、富士山南麓地域で多く産出する溶岩礫である。未完掘のため開口部や墓坑底面の詳細な形状が不明であるが、開口部の石積みは閉塞石ではなく、当地域に特徴的にみられる段構造と考えられる。後世の耕作により2段目以上の石材はほとんど残っていないものの、基底石や床面石敷、墓坑といった石室下部構造については良好に遺存していた。

石室長は、左側壁で4.7m、右側壁で4.6mを測る。幅は奥壁で0.95m、奥壁から2.3m付近で1.2m、奥壁から3.7mの段下で1.0m、開口部段上で0.95mを測り、平面プランは石室中央部でやや幅の広がる長方形を呈している。

墓坑は未完掘なことと南西部分がトレンチ外に及ぶために全体の形状は不明であるが、長軸の長さ5.9m以上、幅は現状で3.4mを測る。検出面の観察上は開口部の側壁石材付近で墓坑上端が鉤状に屈折しており、この部分が石室を収める墓坑としての掘り込みと、墓道や前庭部にかかわる掘り込みとの境となっていると推定される。開口部付近では破線で示したように掘り込みの下端がうっすらと見え始めていることから、石室部分の掘り込みと比べて格段に浅いのであろう。以上のことから、石室を収める墓坑は長さ4.7m、幅約3.5mの隅丸長方形状であり、開口部でひと回り幅の狭い墓道または前庭部の掘り込みが接

続しているものと考えられる。なお墓坑の深さについては判断する材料に乏しいが、第２トレンチ土層断面において確認されている古墳築造当時の基盤層レベル（Ⅱ層上面）である標高 25.7m を仮に墓坑上端のレベルとすれば、開口部の２石を除いた基底石がおおよそ納まる程度の深さはあったものと理解されよう。

壁面構成　奥壁は１段分残存する。基底石には、幅 1.1 m、高さ 0.5m 以上、厚さ 0.5m を測る石材を１段１石で用いている。これは現状の他の構成石材と比べると大型のものであり、鏡石とは言えないまでも、大型石材を奥壁に用いようとした意図は感じられる。

側壁は１～２段分残存する。石積みは石材の長手面を石室内側に向ける平積みを基本としているが、一部の小型石材については小口面を内側に向ける小口積みが用いられている。基底石の石材の大きさは全体としての統一感には欠けるものの、一部でみられる比較的大型の石材については、上面が標高 25.8 m付近で揃えられていることがわかる。特に奥壁基底石、左側壁最奥部基底石、両側壁開口部基底石といった、石室平面プランを決定するために重要な石材が上面を揃えているのであり、この高さを壁面構築の際の最初の指標線としていた蓋然性は高い。

段構造　段構造は現状で奥壁中央より 3.7m から 4.9m の範囲に設置されている。上述した基盤層レベルである標高 25.7 m と開口部側の石材の上面がおおよそ揃ってくるため、開口部が墳丘端に接続していたと仮定すれば、これ以上の段差は必要なく、現状どおりのおおよそ１段積みであったと推定される。その場合、検出床面との段差は 0.45m を測る。なお奥側中央の石材は幅 0.6m と段構造の石材の中では大型であり、平滑な面を石室内側に向けて用いられている。このことから奥壁や側壁の石材同様、視覚的に面を意識していたことが推測される。

床面　床面には奥壁から 3.4m までの範囲に石敷が施されている。検出面における石材は溶岩礫が主であるが、一部で河原石もみとめられるようである。石材の法量には長軸長で５～ 20cm と大小の幅があるが、奥壁中央から 1.1m 付近までは大型の石材が目立っているものの、そこから 2.1m 付近までは小型の石材が目立ち、またそこから端までは大型の石材が目立つという、大きく３つの様相が見受けられる。層位的な検討はできなかったが、石材の敷き分けがおこなわれていたか、時期の異なる床面が含まれている可能性がある。

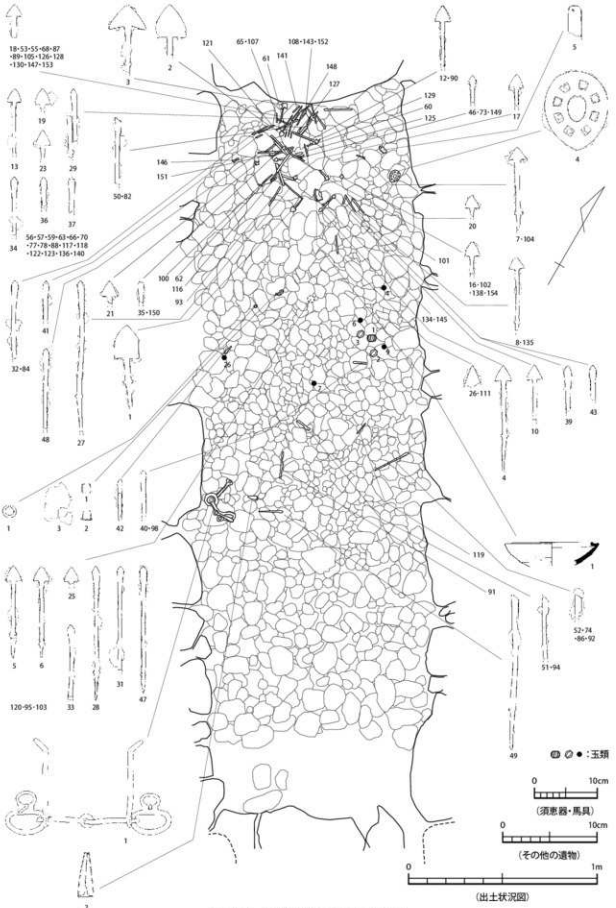
４．遺物出土状況

出土状況を検討すると、刀身がなく刀装具のみの出土などといった若干の不可解な点は残るものの、全体としては豊富な遺物が良好に遺存しており、石室内に大きな撹乱や盗掘があった様子は見出しがたい。繰り返しとなるが、今回の調査による掘削はあくまで床面最上面までであり、調査者所見によれば下層にさらなる床面が存在する蓋然性は高いようである。現地保存された石室内に遺物が未だ残っている可能性があることを断った上で、以下では検出された遺物を出土位置や検出レベルによって大きく３群に分けて記述を進めていく（第 54・55 図）。

第１群　奥壁から 0.8m までの範囲でまとまって検出された、鉄鏃や刀装具、須恵器で構成される遺物群を第１群とする。検出レベルは 25.361m から 25.433m までであるが、おおよそ 25.4m 前後に集中する。３つの群のなかでは比較的高い位置から出土した一群である。

奥壁付近は石室内でも最も集中して鉄鏃が出土した箇所であり、平根系鉄鏃とともに尖根三角形式、尖根鑿箭式、尖根片刃箭式がみられる。一部は鉄鏃束として一括されていた可能性もあるが、鏃身部の向きは全体として揃っておらず、追葬時の片付け等によって動かされた状況である蓋然性は高い。

また左側壁沿いからは鉄刀に付随するとみられる鉄製八窓鍔や刀身茎部片が出土した。その間 10cm と互いに近接することから原位置に近いものとみられるが、肝心の刀身は未検出である。石敷の下に刀



第 54 図　床面遺物出土状況図（1/20）

身があるとすれば、この比較的大型の石材による石敷は追葬面であった可能性も浮上してくる。

土器は石室内全体でみても、坏身が破片として１点出土したのみである。

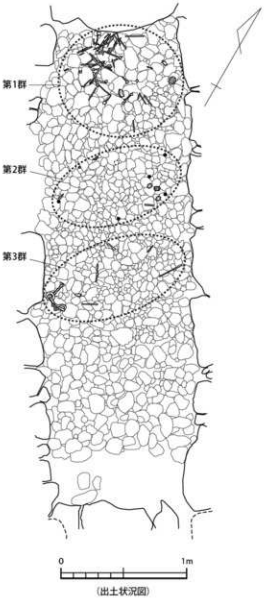
第２群　奥壁から 1m のところから 1.5m までの範囲で検出された、鉄鏃や刀装具、耳環、玉類で構成される遺物群を第２群とする。検出レベルは 25.274m から 25.351m まであるが、第３群と同じくおおよそ 25.3 m前後に集中する。

鉄鏃は中央部でまとまって出土しているが、第１群とは変わって、尖根三角形式と尖根鑿箭式の２種類で構成されている。

中央からやや右寄りでは銀装大刀柄頭片と鵐目金具が出土し、またその付近から耳環も出土した。鵐目金具を伴う銀装大刀という点で、柄頭の形状の候補は円頭か圭頭が有力とみられることから、第１群の大刀とは別にもう一振り存在したものとみられる。こちらも刀身は未検出である。

左側壁付近では、ガラス製雁木玉や水晶製切子玉、珪化木製丸玉、ガラス製丸玉などの玉類が比較的まとまって出土している。耳環とはやや距離をおくため、埋葬位置の特定には消極的にならざるを得ないが、雁木玉や切子玉を中心とした玉類については一連の装身具であった蓋然性が高い。

第３群　奥壁から 1.6m のところから 2.2m までの範囲で検出された、鉄鏃や馬具、鉄鐸で構成される遺物群を第３群とする。検出レベルは 25.255m から 25.393m まであるが、第２群と同じくおおよそ 25.3 m前後に集中する。



第 55 図　床面遺物群分類図（1/30）

鉄鏃は第１・２群と比べて小数が散在的に出土しているが、確認された形式は片刃箭式のみである。

右側壁沿いからは鉄製轡と鉄鐸が近接して出土している。

5．出土遺物

石室床面石敷上面から、土器、刀装具、鉄鏃、馬具、装身具を主体とする副葬遺物が出土した。以下、出土した遺物の種類をまとめ、総数を示す。

土　器	須恵器坏身	1点	
武　器	大刀（刀装具のみ）	2点以上	（銀装大刀柄頭、鉄製八窓透鍔）
	鉄鏃	53点以上	（鏃身53点、茎関53点）
馬　具	轡	1点	（鉸具造立聞式環状鏡板付轡）
装身具	鉄鐸	1点	
	耳環	1点	
（玉類）	ガラス製雁木玉	1点	
	水晶製切子玉	2点	
	珪化木製丸玉	2点	
	ガラス丸玉	1点	
	ガラス小玉	25点	

以下、これらの区分をもとに、各遺物の概要や観察結果、編年的位置付けなどについて報告を行う。編年的位置付けについては遠江須恵器編年（鈴木 2004）を基本に記述するが、TK209 型式期前半までは陶邑編年（田辺 1966、1981）、TK209 型式期後半以降については飛鳥編年（西 1986）を併記した。各編年の併行関係については基本的に鈴木敏則氏の見解に則るが、Ⅲ期後葉から末葉の取り扱いについては長泉町・原分古墳報告書の見解を参考として（井鍋編 2008）、TK209 型式期前半を遠江Ⅲ期後葉に、飛鳥Ⅰ（TK209 型式期後半）を遠江Ⅲ期末葉にそれぞれ当てはめることとした。

第 56 図　床面出土土器実測図（1/4）

（1）土器

須恵器坏身の破片が1点出土した（第 56 図）。1は口縁部残存率 1/4 で底部を欠いている。たちあがりは低く、受部よりやや高い程度であるが復元口径は 9.4cm、器径は 11.2cm を測っており、遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ）に位置づけられる。

（2）武器

刀装具（第 58 図）　1～3は銀装大刀に伴う刀装具である。1・2は大刀柄頭の懸通孔に装着されていたであろう銅地銀張りの鵐目金具である。2点とも同大で、縁部外径 1.2cm、同内径 0.8cm、筒部最大径 1.0cm、全長 0.9cm を測る。2点とも銅板を筒状に折り曲げた後に蠟付け等の処理を施していると思われるが、筒部は内外面ともに平滑に仕上げられており、肉眼観察と1カット分のX線写真からは継ぎ目を確認することができなかった。柄頭の外側に出る縁部については、銅板を折り曲げた後に縁部を包みこむように薄い銀板が被せられており、裏側に隠れる部分については銀板の皺が目立っている。

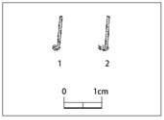
3は銀装大刀柄頭の銀板片である。懸通孔中心からの長さは図面上側が最大3cm、左側で最大2cm残っており、厚さは 0.5mm に満たない。発見時には銀板が複雑に折り曲がり潰れた状態でみつかったが、保存処理の過程で丁寧に開いていったところ、円形に穿たれた懸通孔が現れたため、柄頭の一部と認定した。なお懸通孔部分以外に活きた端部はなく、本来の銀板の形状を推定することは難しい。現在とも

に懸通孔にかかる 3a と 3b の２つの破片に分かれているが、両者は端部の欠けによるため、もしくは別面の破片であるためか、接合しない。懸通孔の径は復元値で 9mm を測り、これは１・２の鵐目金具の筒部最大径に合致する。なお銀板の懸通孔周辺には両面に緑錆が付着しているにもかかわらず、それ以外の部分では全く緑錆がみとめられなかった。この点から、この大刀の柄頭については鵐目金具のように銅地に銀板が被せられていたのではなく、木芯部に直接銀板が被せられ、鵐目金具で両面から固定されていた形態が想定される（滝瀬 1984）。

柄頭の形態については、大きく円頭、圭頭、頭椎の三形式がまず想起されるが、銀装で畦目等の特別な装飾もない点から、まず頭椎の可能性はかなり低いと思われる。また仮に銅製の覆輪が付随した場合、懸通孔中央から図面左側に 2cm 残存していれば、この端部に緑錆が付着した可能性は高いため、これも外れる。残るは円頭か覆輪のない圭頭であるが、近年円頭大刀の変遷をまとめた鈴木一有氏によれば、銀装円頭大刀の下限は松江市・岡田山１号墳例や掛川市・宇洞ヶ谷横穴例の示す TK43 型式期とのことである（鈴木 2009）。したがって本例を円頭柄頭とするには他の遺物との時期の開きが大きく、ここでは覆輪を用いない木芯鵐目留式の銀装圭頭大刀であった可能性を想定しておきたい[1]。銀装大刀の帰属時期については推定に留めざるを得ないが、圭頭大刀であれば TK43 ～ TK209 型式期の時期が与えられよう（滝瀬 1986）。

４は鉄製倒卵形八窓鍔である。長軸 8.35cm、短軸 6.7cm、内孔の長軸 2.8cm、短軸 1.95cm を測る。長軸透窓はほぼ均等に配置され、内孔は倒卵形である。断面は縁部が T 字形であるが、やや厚手に仕上げられている。

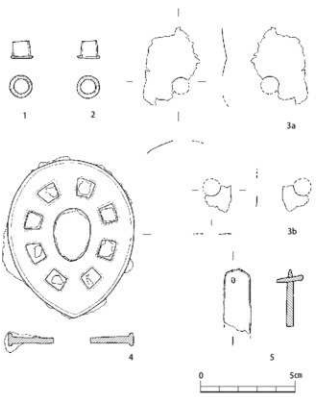
５は鉄製大刀身の茎部片である。残存長 3.45cm、幅 1.45cm、目釘長 1.45cm を測る。茎尻の形状は曲線形で、茎尻から 0.35mm のところに目釘孔が穿たれ、鉄製目釘が残存している。



第 57 図　鵐目金具断面模式図（1/1）

刀装具４・５については出土位置が 10cm と離れておらず、同一の大刀に伴う可能性が高いと考えられる。なお４のような八窓鍔が銀装の円頭大刀や圭頭大刀に伴う可能性は考えにくく、国久保古墳には２本以上の大刀が副葬されていたと考えられよう。

県内の鍔を集成した西澤正晴氏の分類では、４は倒卵形で長軸と短軸の差が 1.5cm 以内という有窓鍔 C 類に近いとみられ、存続時期は遠江Ⅲ期後葉からⅣ期末葉（TK209 型式～飛鳥Ⅳ）までかかるようである（西澤 2002）。ただ、本資料の透の形状や配置は全体的に整っており、金銅装や象嵌付の八窓鍔の影響を少なからず受けているものと判断されることから、その下限は象嵌鍔と同じく遠江Ⅳ期前葉～後葉（飛鳥Ⅱ～Ⅲ）までに収まるものと考えたい。



第 58 図　床面出土刀装具実測図（1/2）

鉄鏃　石室内で出土した鉄鏃のうち、鏃身部の形状が確認できるものは53点ある。このうち、3点が平根系で50点は尖根系である。鏃身部の形状は、平根系では五角形式1点、三角形式2点、尖根系では三角形式が23点、鑿箭式が23点、片刃箭式が4点みられ、少種多量の鉄鏃構成といえる[2]。このほか、頸部や茎部のみの遺存に留まった資料もあり、茎関が遺存する資料は総数で55点ある。これらはあくまで最上面の床面から検出された鉄鏃数量であり、国久保古墳に副葬された鉄鏃総数はさらに多くなる可能性もある。

a）平根五角形式鉄鏃（第59図）　石室内より1点が出土した。1は現存長8.7cm、鏃身部長3.55cm、鏃身部幅2.6cm、頸部長2.75cmを測る。刃部は曲線的で、腸抉もやや直角的である。典型的な五角形式鉄鏃とは異なり、三角形式との中間的な形態ともいえる。茎関は棘関である。周辺地域における鏃身部形態が同形・同大品の類例としては静岡市由比町・室ヶ谷3号墳（中西・大川ほか編1985）、富士市・谷津原12号墳（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）、比奈G40号墳（赫夜姫古墳）（中野1968）、須津J-第159号墳（大谷・田村編2010）、沼津市・石川119号墳（小野・秋本1976）などで確認できる。これらの古墳は遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209型式～飛鳥Ⅱ）に位置づけられることから、本資料の帰属時期もそのあたりに当てはめることができよう。

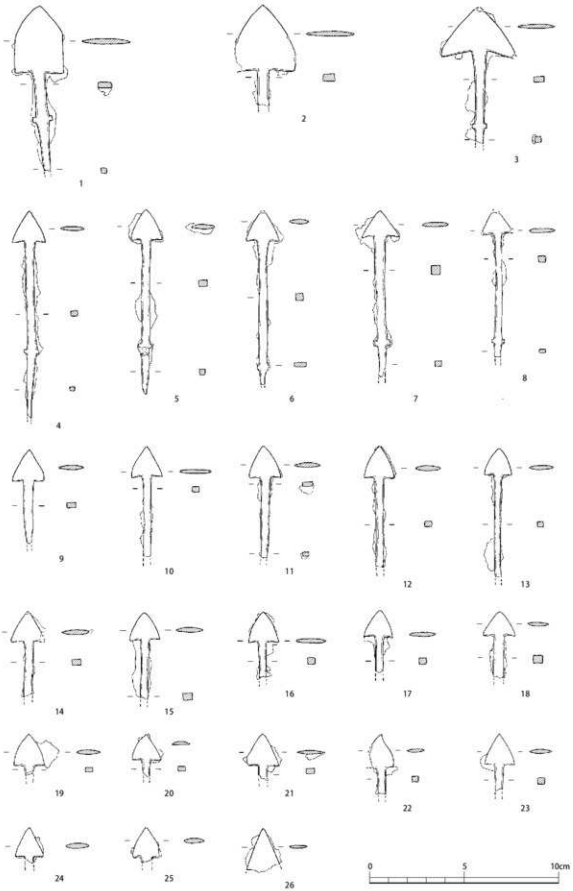
b）平根三角形式鉄鏃（第59図）　石室内より2点が出土した。2は現存長5.5cm、鏃身部長3.7cmを測る。刃部はふくらが張り、幅広の鏃身部を有する。腸抉はやや直角的である。同形・同大品の類例としては静岡市由比町・室ヶ谷3号墳（中西・大川ほか編1985）、富士市・谷津原16・17号墳（石川2008）、東平1号墳（久松1990）などで確認できる。これらの古墳は遠江Ⅲ期中葉～Ⅳ期前葉（TK43型式～飛鳥Ⅱ）の間に位置づけられることから、本資料の帰属時期もその年代幅で捉えることができる。

3は現存長7.1cm、鏃身部長2.6cm（推定）、鏃身部幅4.1cm（推定）、頸部長4.15cmを測る。刃部はやや曲線的で、鏃身部幅も広く、明瞭な腸抉を有する。茎関は棘関である。便宜上、三角形式としたが、飛燕式と類似した形態をとっている。鏃身部形態が同形・同大の類例としては、富士市・谷津原12号墳（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）、赫夜姫2号墳（志村2004）、沼津市・石川22号墳（荒井・鶴田2006）、伊豆の国市・平石4号墳（小野ほか1973）などで確認される。これらの古墳は遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ期）に位置づけられることから、本資料の帰属時期もそのあたりに当てはめられよう。

c）尖根三角形式鉄鏃（第59図）　4～26が尖根三角形式鉄鏃である。石室内より23点が出土しており、尖根鑿箭式とともに国久保古墳副葬鉄鏃の主体を成す。一般的な尖根三角形式と比べて鏃身部が小型で、各頂点を結ぶと正三角形に近い形状となるのが特色である。鏃身部の形態は大きさもあわせて非常に均一的であるが、その形態から2つの類型に細分することが可能である。鏃身部の断面形はほとんどが平造だが、一部の資料で片丸造もみられた（20）。頸部の幅は0.35～0.5cm、厚さは0.2～0.5cmの範囲に収まるが、断面が長方形のものから方形に近いものまである。茎関の形状がうかがえるものについてはすべて棘関であった。

尖根三角形式鉄鏃1類　鏃身部が長・幅ともに1.6cm±0.2cm程度で、若干の腸抉を有した正三角形状を呈する一群である。4～6、8～17、19～25が相当する。尖根三角形式鉄鏃の大半がこの類型に含まれる。頸部長は2類もあわせて6cm前後のもので占められるようであるが、茎部長については長短の幅があり、4が3.3cm以上になるのに対して、5は2.3cmである。一方で6については頸部から茎部にかけての構造がほかのものと異なり、偏平で逆三角形状の茎端部を有している。この部分が茎関となるのか、それとも関が欠損しているのかどうかは判別できなかった。後述する尖根鑿箭式鉄鏃の47や茎部破片の154も同じタイプの茎部である。

尖根三角形式鉄鏃2類　鏃身部長は1類と変わらないが、幅が1.75～2.0cmと幅広な三角形状を呈する個体を2類とした。7と18が相当する。



第59図　床面出土鉄鏃実測図（1）（1/2）

同タイプとみられる小型の尖根三角形式鉄鏃の類例は、富士市・窯野坂B4号墳（稲垣1994、小金澤1998）や谷津原12号墳（静岡県埋蔵文化財調査研究所2001）、東平1号墳（久松1990）といった富士川西岸から潤井川東岸にかけての狭い範囲で限定的に分布しており、共伴する須恵器の資料が少ないものの、帰属時期は遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）と考えられる。この鉄鏃が提示する問題については第4節で後述したい。

d）尖根鏃箭式鉄鏃（第60図） 27～48が尖根鏃箭式鉄鏃である。42を2点と数えれば石室内より23点が出土しており、尖根三角形式鉄鏃とともに、副葬された鉄鏃の主体を成している。鏃身部の断面形は片鎬造と片丸造の2種類が存在しており、この点を重視して類型化・細分することも可能であるが、全体の形状が判明するものが少ないことと、風化や磨耗によって片丸造に見えるものも含んでいる可能性があることから、今回はまとめて報告したい。

全長は14cm前後のものから16cmを超えるものまで確認できる。鏃身部は小型で幅0.55～0.8cm、刃部の研ぎ出し範囲はいずれも鏃身部先端から0.4～0.7cmあたりまでであり、鎬のつくりだしの有無に違いはあるものの、総じて規格的な形態である。鏃身部形態はそのほとんどが大谷宏治氏の指摘するふくらを有する形態に位置づけられるものの、38のように鏃身部長が0.4cmで端刃造に近いものもある（大谷2010）。頸部長は限られた資料からではあるものの、10～12cmの範囲におさまる。頸部断面は長方形から正方形に近いものまで存在するが、鏃身部に近付くにつれて徐々に長方形となっていくものが多い。茎関の形状がうかがえるものについてはすべて棘関であったが、茎部長については2.9cmの小型のものから3.5cm以上となる大型のものまで存在するようである。また47については茎部先端の平面が逆三角形状となるタイプであり、上下と両側面の四面を切断して茎端部を偏平につくりだしている。なおこの資料には棘関が付く。

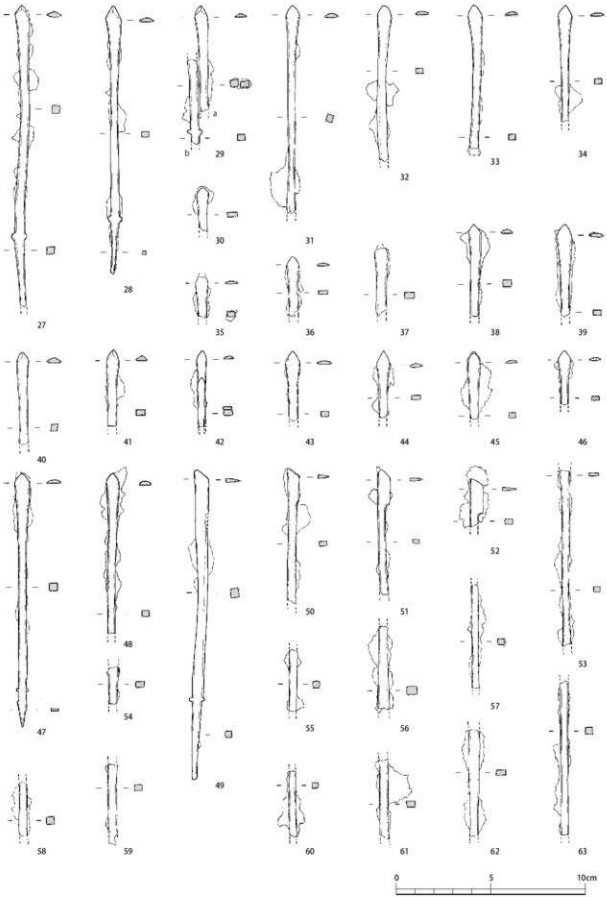
また53や91についても鏃身部は残っていないものの、頸部の広がり具合から鏃箭式となる可能性がある。

尖根鏃箭式鉄鏃の帰属時期については、駿河東部地域では遠江Ⅲ期後葉（TK209型式）以降から確認されており、Ⅴ期前葉（平城Ⅰ）も存続するとみられている（井鍋2003）。鏃身部の形態がふくらを有するものが大半を占めること（大谷2010）、また27、28の棘関の形状は7世紀後葉以降にみられるような簡略化された棘関とはいえない点から、遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉（TK209型式～飛鳥Ⅱ）におさまる時期のものと考えられよう。

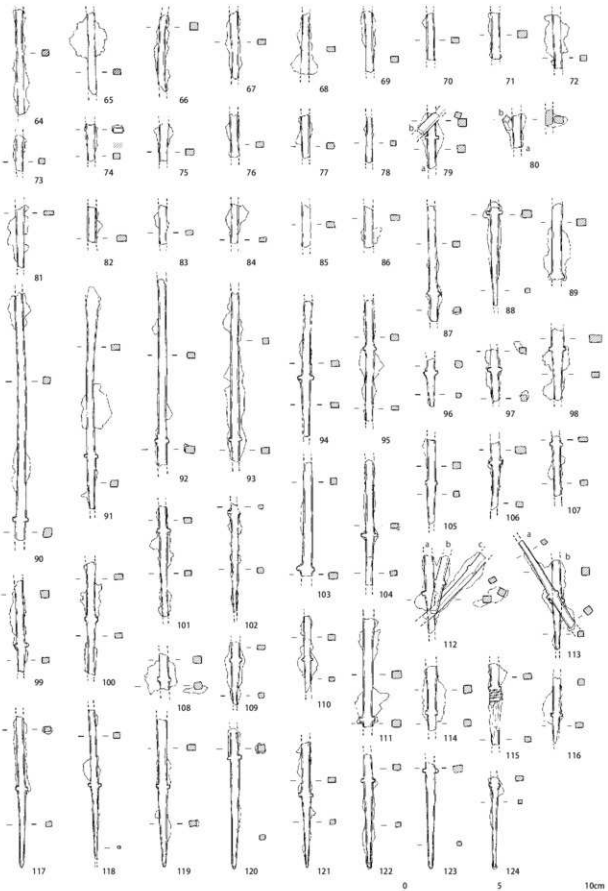
e）尖根片刃箭式鉄鏃（第60図） 49～52が尖根片刃箭式鉄鏃である。石室内から4点しか出土しておらず、ほかの尖根系鉄鏃と比べて格段に少ない量である。鏃身部以外の形状が判明するものが少ないが、49は全長16.4cmを測る。鏃身関の形状は多様で、明瞭な関をもたないいわゆる端刃のものが1点（49）、ナデ関に近い形状のものが1点（50）、直角関に近い形状のものが2点（51、52）みられる。鏃身関を有するものの鏃身部長は1.8cm前後の短いもので統一されている。確認できる茎関の形状は棘関で、茎部長は4.2cmである。

片刃箭式鉄鏃の帰属時期については、端刃のものは遠江Ⅲ期後葉（TK209型式）以降みられるようである（大谷2003）。棘関の形状も簡略化がみとめられないことから、その下限は遠江Ⅳ期後葉（飛鳥Ⅲ）と考えられる。鏃身部長が2.0cmに満たない有関の片刃箭式鉄鏃については、近隣での類例はかなり限られ、静岡市・泉ヶ谷稲荷神社1号墳（杉山・長谷川1984）や富士市・谷津原7号墳（静岡県埋蔵文化財調査研究所編2001）、東平1号墳（久松1990）で確認できる。両古墳とも時期比定が難しいが、遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期後葉（TK209型式～飛鳥Ⅲ）の範囲におさまると考えられる。

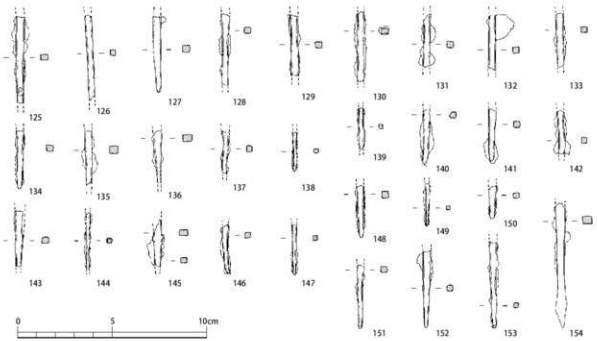
f）その他の鉄鏃（第60～62図） 鏃身部形態が判明した資料のほかに、頸部や茎部のみの出土にとどまった資料も数多いが、本報告では茎関が遺存する破片と、茎関がなくても残存長が1.5cm以上の



第60図　床面出土鉄鏃実測図（2）（1/2）



第 61 図　床面出土鉄鏃実測図（3）（1/2）



第 62 図　床面出土鉄鏃実測図（4）（1/2）

ものについてはすべて図化・掲載した。

頸部片については断面長方形のものから方形のものまで存在する。

茎関が遺存するのは 79、87 ～ 124、145 である。いずれも棘関であり、大半は頸部と茎部の境で直角的に突出する明瞭なタイプのものであるが、100、108、124、145 などは境が鈍角的となる簡略化した形態にもみえる。これらについては磨耗により丸みを帯びた茎関となってしまった可能性もあるため、簡略化したものと断定することは控えたい。また茎部が完存するものについて長さをみると、4.0cm 前後のものが一定量みられるほか、5.0cm 前後のもの（123）や 6.0cm 近いもの（120）も確認できる。

また 154 の茎部片は、端部を平面逆三角形で偏平につくりだしているタイプのものである。端部の縁辺については欠損のため正確な形状が不明であるが、端部で再び幅を広げる形状とその厚さから、このタイプと判断した。現存長 6.5cm にもかかわらず茎関がないところから、尖根三角形式の 6 と併せて考慮して、このタイプには明瞭な茎関が付かないものの存在を念頭におく必要があるかもしれない。

付着した有機質については残っているものが少ないものの、115 は茎関直下で木部の上から極細い樹皮または糸で巻きつけている様子が観察できる。

（3）馬具

轡（第 63 図）　轡（1）は鉄製の鉸具造立聞式環状鏡板付轡である。図面上での高さは 15.4cm、幅は 26.3cm を測る。遺存状態は良好であり、保存修復によって、鏡板、銜、引手のすべてが可動する状態にまで復元された。宮代栄一氏の研究を参考に使用時の状態を想定すれば、引手壺が上方を向き、刺金を外側に向けて鉸具が頬革に接続することから（宮代 1997）、鏡板や引手を個別に回転させることで左右の別なく使用できることがわかる。したがって以下の記述における左右は便宜的に、図示した平面に向かっての左右とした。

鏡板は鉸具が偏円形の環に鍛接されるものであり、右鉸具の刺金以外は良好な状態で遺存していた。円環本体の断面形は、基本的には偏平な楕円形であるが、上下面がやや平らな面をつくりだしているの

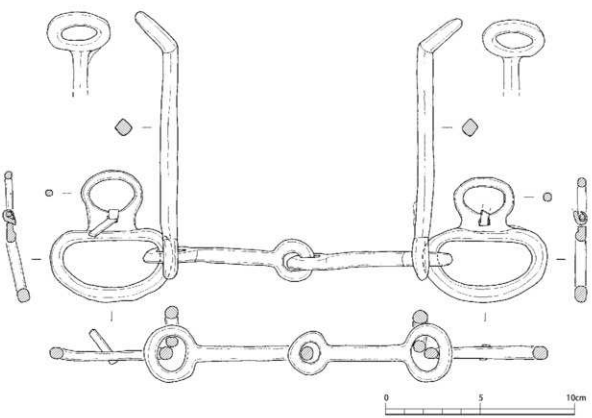
に対し、側面は曲線的で丸みを帯びている。左鏡板は幅 6.5cm、高さが 7.0cm を測り、幅 2.5cm の板状の頸部を介して、幅 3.3cm の鉸具が鍛接される。右鏡板は幅 6.6cm、高さ 6.65cm を測り、幅 2.4cm の板状の頸部を介して、幅 3.2cm の鉸具が鍛接される。左右ともに鉸具部分は円環部分よりも細く、断面円形を呈する。刺金は左鉸具で長さ 3.7cm、幅 0.4cm、厚さ 0.2cm の細く偏平な鉄板を用い、頸部に穿たれた幅 0.5cm、高さ 0.3cm の長方形の小孔に根元を蕨手状に巻きつけることによって可動するようにしている。

銜は、円環よりもやや太く、幅 0.7 ～ 0.8cm で断面方形の鉄棒を用いている。左銜の長さ 8.95cm、右銜の長さ 8.7cm、左右の銜を連結して伸ばした状態の長さは 16.3cm を測る。銜先環は直径 0.7cm の断面円形の鉄棒を、左銜先環は 3.0cm × 2.8cm の円形に、右銜先環は 3.1cm × 2.6cm の楕円形に成形して銜端に鍛接されており、ここに鏡板と引手が連結される。岡安光彦氏の「引手・銜共連法」に相当しよう（岡安 1984）。唇金は左右ともに銜先環よりも小さく、2.2cm ほどの円形に成形されている。

引手は、幅 0.7 ～ 0.8cm で断面方形の鉄棒を用いている。左引手の長さは 14.2cm、右引手の長さは 13.9cm を測る。引手は銜との連結部分近くがやや細く、引手本体に移行するに従って太さを増している。銜先環と連結する円環の寸法は左右ともに直径 2.2cm を測る。引手壺は、左が 3.3cm × 2.8cm、右が 3.3cm × 2.5cm の楕円形の環であり、引手本体と鈍角に鍛接されている。

なお、鏡板や銜、引手の各円環には途切れた部分が観察できず、成形技法をうかがうことはできなかった。

本例の帰属時期は鏡板の大きさから、飛鳥Ⅰ～飛鳥Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）に進む鏡板の規格化の段階（岡安 1985、鈴木 2008）にあたると考えられるが、これについては第 4 節で詳述する。

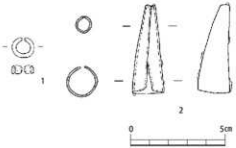


第 63 図　床面出土馬具実測図（1/2）

（４）装身具

耳環（第 64 図）　1 は銅地金張の耳環である。石室内より 1 点のみ出土した。平面形はやや楕円形気味の円形であり、幅 1.5cm、高さ 1.3cm を測る。断面形は縦長の楕円形で、高さ 0.5cm、幅 0.3cm である。C 字形の小口部分には金箔の皺や折込みが確認できることから、金箔巻き付けにより製作されたものであると考えられる（村上 1996）。

帰属時期については幅広く、6 ～ 7 世紀を通じてみとめられる。



第 64 図　床面出土装身具実測図（1/2）

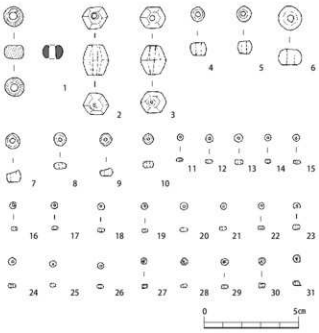
鉄鐸（第 64 図）　2 は鉄鐸である。身部長 4.7cm、頂部径 0.55cm、開口部径 1.7cm を測る。頂部には懸通孔が貫通しており、その幅は 0.3cm である。厚さ 0.1cm ほどの扇形の鉄板を丸めるように閉じ合わせて鐸身とするが、合わせ目は斜めに交差する形をとっている。舌については検出されておらず、鉄鐸本体にその痕跡も残されていなかった。

古墳出土の鉄鐸については、県内では沼津市・的場 3 号墳で 2 点出土しているのみである（富樫 2010）。愛知県内では複数例確認されており、比較的近いところでは田原市・藤原 1 号墳（愛知県史編さん委員会 2005）や豊田市・三味線塚古墳（三田ほか 2001）などで報告されている（早野 2008）。鉄鐸自体の存続時期は 5 世紀代（TK216 型式期前後）から 7 世紀代まで及んでおり、また東北地方の祭祀遺跡では奈良～平安時代にも多数みられるようである（早野 2010）。藤原 1 号墳が TK43 型式期、的場 3 号墳が遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）頃と考えられることから、本例については遠江Ⅲ期中葉～Ⅲ期末葉（TK43 型式～飛鳥Ⅰ）までの時期幅を想定しておく。

玉類（第 65 図）　玉類は合計 31 点出土した。出土位置が特定できるものの中でも、1 ～ 4、6、9 は互いに近接して出土しており、一連の装身具であった可能性も想定される。

ガラス製雁木玉　1 がこれに相当する。径（最大幅）1.05cm、高さ 0.7cm を測り、表面には縞状に白、緑、黄、赤の 4 色のガラスを配置するが、中心部（基部）には異なる色調のガラスを用いていることが特徴的である（巻頭図版 2）。色調については外面のガラスが鮮やかな発色であるのに対して、基部のガラスは一見すると土器に使用される粘土のような浅黄色である。

外面の配色には、緑・白・緑・黄・赤・黄という順で構成される配色パターンを一単位として、これを四度繰り返すことで一周する形となっている。しかし整然と四分



第 65 図　床面出土玉類実測図（1/2）

割された構成上、単純にこの単位毎に配色していったとは到底考えられず、効率的な配色方法が存在したものと推定される。科学分析の結果や製作技法、それらの評価については第 4 節で詳述したい。

水晶製切子玉　2、3 がこれに相当する。径（最大幅）1.3cm、高さ 1.5 ～ 1.6cm を測る。ともに片面穿孔であり、上下 6 面ずつの計 12 面を有する。不透明の色調ながら、全体的に丁寧に研磨されている。

珪化木製丸玉　4、5 がこれに相当する[33]。径（最大幅）0.8 ～ 0.85cm、高さ 0.65 ～ 0.7cm を測る。5 は表面の風化が激しいものの、互いに近似した大きさに揃えられているようである。表面は丁寧に研磨されており、上下面は特に平坦に仕上げられている。

ガラス製丸玉　6 がこれに相当する。径（最大幅）1.2cm、高さ 0.8cm を測り、不透明な紺色を呈する。他のガラス小玉と比べると丸みを帯びた形状であるが、上下面にはやや平坦な面も作り出されている。製作方法についてはガラス小玉も含めて、顕微鏡観察や科学分析による検討が必要である。

ガラス製小玉　7 ～ 31 がこれに相当する。大きさから細分が可能である。

1 類　際立った大きさである 7 を 1 類とした。径（最大幅）0.8cm、高さ 0.6cm を測り、濃青色である。その大きさと色調から、丸玉の 6 と対になる玉の可能性もある。上下面に平坦な面を有しており、管引き（引き伸ばし）技法によって作られた可能性が高いとみられる。

2 類　中型である 8、9、10 を 2 類とした。径（最大幅）0.55 ～ 0.65cm、高さ 0.3 ～ 0.4cm を測り、色調には淡青色、濃青色がみられる。上下面に平坦な面を有する。管引き技法によって作られた可能性が高いとみられる。

3 類　小型である 11 ～ 31 を 3 類とした。径（最大幅）0.3 ～ 0.45cm、高さ 0.2 ～ 0.3cm を測り、色調には淡青色、濃青色、紺色がみられる。12、13、15 ～ 18、24、26、28、30 は上下面に平坦な面を有する。管引き技法もしくは鋳型によって作られたとみられる。

注

1）鈴木一有氏のご教示に寄れば、本例の鞦目金具は 6 世紀末以降の形態を示しているとのことである。

2）鉄鏃の形式分類については、大谷宏治氏より多大なるご教示を受けた。

3）材質の特定にあたっては、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所保存処理室の大森信宏氏よりご教示を受けた。

第 10 表　土器観察表

挿図	図版	番号	器種	口径 (cm)	器理 (cm)	器高 (cm)	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調　上段：外面 下段：内面	備考
56	27	1	須恵器坏身	9.4	11.4	(2.7)	ロクロ成形後、内外面ともにヨコナデ。	精選	硬質	7.5Y6/2(灰黄色) 7.5Y7/1(灰白色)	20%残

凡例　（ ）表記：破損している場合の残存長（幅）。

第 11 表　鉄鏃観察表（1）

挿図	図版	番号	鉄鏃部位	鏃身形状	鏃身部断面形状	現存長 (cm)	鏃身部				頸部				茎部				重量 (g)	備考
							長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)		長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)		長さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)			
59	"20.21"	1	鏃身部～茎部片	平根五角形式	平造	(8.70)	3.55	2.60	0.30		2.75	0.70	0.30		(2.40)	0.30	0.30		18.31	
59	"20.21"	2	鏃身部～頸部片	平根三角形式	平造	(5.50)	3.70	(3.20)	0.30		(1.90)	0.60	0.40		-	-	-		9.17	
59	"20.21"	3	鏃身部～茎部片	平根三角形式	平造	(7.10)	(2.50)	(4.00)	0.25		4.15	0.55	0.35		(0.75)	0.40	0.30		11.64	鳥喙式短頸
59	"20.21"	4	鏃身部～茎部片	尖根三角形式	平造	10.80	1.60	1.70	0.20		5.90	0.40	0.30		(3.30)	0.25	0.25		8.84	
59	"20.21"	5	完形	尖根三角形式	平造	9.70	1.60	1.60	0.30		5.70	0.50	0.30		2.30	0.30	0.30		7.34	茎部木質残存
59	"20.21"	6	鏃身部～茎部片	尖根三角形式	平造	(9.10)	(1.60)	1.70	0.30		7.00	0.40	0.40		(0.70)	0.30	0.20		7.62	茎端部偏平
59	"20.21"	7	鏃身部～茎部片	尖根三角形式	平造	(8.80)	1.45	2.00	0.30		6.00	0.50	0.50		(1.50)	0.40	0.40		8.90 1.90	後定鏃頭部編
59	"20.21"	8	鏃身部～茎部片	尖根三角形式	平造	(7.80)	(1.20)	1.40	0.20		5.70	0.40	0.35		(0.70)	0.30	0.20		4.54	
59	"20.21"	9	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(4.90)	1.70	1.70	0.30		(3.30)	0.50	0.30		-	-	-		3.33	
59	"20.21"	10	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(5.80)	1.70	1.65	0.20		(4.15)	0.45	0.30		-	-	-		4.48	
59	"20.21"	11	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(5.90)	1.70	1.70	0.30		(4.30)	0.50	0.20		-	-	-		4.07	
59	"20.21"	12	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(6.40)	1.60	1.50	0.25		(4.80)	0.40	0.30		-	-	-		4.83	
59	"20.21"	13	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(6.80)	1.50	1.40	0.25		(5.30)	0.35	0.30		-	-	-		5.35	
59	"20.21"	14	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(4.40)	(1.60)	(1.60)	0.30		(3.00)	0.50	0.30		-	-	-		3.23	
59	"20.21"	15	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(4.70)	1.50	1.60	0.30		(3.20)	0.50	0.40		-	-	-		3.38	
59	"20.21"	16	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(3.50)	1.70	1.60	0.20		(1.75)	0.40	0.35		-	-	-		3.58	
59	"20.21"	17	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(3.30)	1.50	1.40	0.20		(1.80)	0.40	0.35		-	-	-		2.37	
59	"20.21"	18	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(4.50)	1.30	1.75	0.20		(2.20)	0.50	0.40		-	-	-		2.55	
59	"20.21"	19	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(2.20)	1.65	1.60	0.25		(5.50)	0.40	0.25		-	-	-		2.49	
59	"20.21"	20	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	片丸造	(2.20)	1.35	1.50	0.20		(0.85)	0.40	0.25		-	-	-		1.62	
59	"20.21"	21	鏃身部片	尖根三角形式	平造	(2.50)	1.75	1.75	0.20		0.75	0.45	0.30		-	-	-		2.35	
59	"20.21"	22	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(2.80)	1.40	1.35	0.15		(1.40)	0.35	0.35		-	-	-		2.42	
59	"20.21"	23	鏃身部～頸部片	尖根三角形式	平造	(3.00)	1.60	1.55	0.25		(1.40)	0.40	0.35		-	-	-		2.70	
59	"20.21"	24	鏃身部片	尖根三角形式	平造	(1.90)	1.60	1.50	0.30		(0.30)	0.40	0.30		-	-	-		1.39	
59	"20.21"	25	鏃身部片	尖根三角形式	平造	(1.90)	1.60	(1.40)	0.30		-	-	-		-	-	-		1.20	
59	"20.21"	26	鏃身部片	尖根三角形式?	平造	(2.20)	(2.20)	(1.60)	0.15		-	-	-		-	-	-		2.18	
60	"22.23"	27	鏃身部～茎部片	尖根鞘状式	片鎬造	(16.00)	0.50	0.70	0.30		12.00	0.40	0.40		(3.50)	0.40	0.40		14.44 0.80	鏃身部復元幅
60	"22.23"	28	完形	尖根鞘状式	片鎬造	14.20	0.70	0.80	0.30		10.60	0.40	0.30		2.90	0.20	0.20		10.46	
60	"22.23"	29a	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片鎬造	(5.60)	0.60	0.60	0.20		(5.00)	0.40	0.35		-	-	-		9.31	
60	"22.23"	29b	頸部～茎部片			(4.45)	-	-	-		(3.90)	0.45	0.35		(0.55)	0.40	0.35		9.31	
60	"22.23"	30	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	?	(2.30)	?	-	?		?	0.50	0.25		-	-	-		1.54	
60	"22.23"	31	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(10.90)	(0.50)	(0.80)	0.30		(10.60)	0.40	0.40		-	-	-		9.46	
60	"22.23"	32	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(8.25)	0.45	0.70	0.20		(7.80)	0.40	0.30		-	-	-		7.74	
60	"22.23"	33	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(7.60)	0.70	0.80	0.30		(6.90)	0.40	0.40		-	-	-		5.11	
60	"22.23"	34	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(6.20)	0.55	0.70	0.20		(5.65)	0.40	0.30		-	-	-		4.76	
60	"22.23"	35	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(2.10)	(0.35)	0.60	0.15		(1.75)	0.40	0.25		-	-	-		1.57	
60	"22.23"	36	鏃身～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(3.30)	0.45	0.65	0.15		(2.85)	0.50	0.25		-	-	-		1.39	
60	"22.23"	37	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	?	(3.60)	?	0.70	?		3.30	0.50	0.30		-	-	-		2.58	
60	"22.23"	38	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造？	(4.80)	0.40	0.55	0.20		(4.40)	0.40	0.35		-	-	-		4.56	
60	"22.23"	39	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(4.90)	0.60	0.75	0.25		(4.30)	0.45	0.30		-	-	-		3.84	
60	"22.23"	40	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片鎬造	(4.80)	0.50	0.70	0.30		(4.30)	0.40	0.40		-	-	-		3.89	
60	"22.23"	41	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片鎬造	(4.10)	0.45	0.65	0.30		(3.65)	0.50	0.30		-	-	-		3.34	
60	"22.23"	42	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(3.90)	0.40	0.60	0.25		(3.50)	0.50	0.30		-	-	-		2.37	別個体の鞘状式鏃が頸部に付着
60	"22.23"	43	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(3.70)	0.60	0.75	0.20		(3.10)	0.40	0.30		-	-	-		2.57	
60	"22.23"	44	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(3.50)	0.70	0.70	0.20		(2.80)	0.45	0.25		-	-	-		2.44	
60	"22.23"	45	鏃身部片	尖根鞘状式	片丸造	(3.60)	0.60	0.60	0.30		(0.30)	0.40	0.30		-	-	-		2.94	
60	"22.23"	46	鏃身～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(2.85)	0.50	0.65	0.15		(2.35)	0.40	0.20		-	-	-		1.21	
60	"22.23"	47	鏃身部～茎部片	尖根鞘状式	片丸造	13.4	0.50	0.80	0.20		11.10	0.50	0.40		2.00	0.40	0.20		9.51	復元鏃身部長0.50、茎部上下左右四面切断（茎端部編平）
60	"22.23"	48	鏃身部～頸部片	尖根鞘状式	片丸造	(8.50)	0.50	0.65	0.20		8.00	0.40	0.30		-	-	-		6.60	
60	"22.23"	49	完形	尖根片刃鏃式	平造	16.40	0.50	0.80	0.20		11.70	0.40	0.50		4.20	0.40	0.40		13.23	端刃
60	"22.23"	50	鏃身部～頸部片	尖根片刃鏃式	平造	(7.00)	1.70	0.65	0.20		(2.75)	0.45	0.30		-	-	-		5.93	鏃身部ナデ間
60	"22.23"	51	鏃身部～頸部片	尖根片刃鏃式	平造	(6.60)	(1.80)	0.60	0.15		(4.80)	0.40	0.25		-	-	-		4.75	鏃身部直角間
60	"22.23"	52	鏃身部～頸部片	尖根片刃鏃式	平造	(2.70)	1.80	0.70	0.20		(0.70)	0.40	0.30		-	-	-		2.89	鏃身部直角間
60	"22.23"	53	頸部片			(9.30)	-	-	-		(9.30)	0.40	0.30		-	-	-		7.75	
60	"22.23"	54	頸部片			(1.90)	-	-	-		(1.90)	0.50	0.30		-	-	-		1.12	
60	"22.23"	55	頸部片			(3.30)	-	-	-		(3.30)	0.40	0.35		-	-	-		2.80	

第 11 表　鉄鏃観察表（2）

棒図	図版	番号	鉄鏃部位	鏃身形状	鏃身部断面形状	現存長(cm)	鏃身部			頸部			茎部			重量(g)	備考
							長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)		
60	"22.23"	56	頭部片			(4.30)	-	-	-	(4.30)	0.55	0.45	-	-	-	6.80	
60	"24.25"	57	頭部片			(5.50)	-	-	-	(5.50)	0.35	0.35	-	-	-	5.95	
60	"22.23"	58	頭部片			(2.80)	-	-	-	(2.80)	0.40	0.40	-	-	-	2.45	
60	"22.23"	59	頭部片			(3.40)	-	-	-	(3.40)	0.40	0.35	-	-	-	1.99	
60	"22.23"	60	頭部片			(3.40)	-	-	-	(3.40)	0.35	0.30	-	-	-	3.08	
60	"22.23"	61	頭部片			(4.10)	-	-	-	(4.10)	0.45	0.35	-	-	-	5.13	
60	"22.23"	62	頭部片			(5.60)	-	-	-	(5.60)	0.50	0.30	-	-	-	6.70	
60	"22.23"	63	頭部片			(8.10)	-	-	-	(8.10)	0.40	0.40	-	-	-	5.00	
61	"24.25"	64	頭部片			(5.50)	-	-	-	(5.50)	0.40	0.35	-	-	-	4.03	
61	"24.25"	65	頭部片			(4.30)	-	-	-	(4.30)	0.40	0.30	-	-	-	4.25	
61	"24.25"	66	頭部片			(4.10)	-	-	-	(4.10)	0.45	0.40	-	-	-	4.96	
61	"24.25"	67	頭部片			(3.50)	-	-	-	(3.50)	0.40	0.35	-	-	-	4.13	
61	"24.25"	68	頭部片			(3.20)	-	-	-	(3.20)	0.45	0.30	-	-	-	2.59	
61	"24.25"	69	頭部片			(3.20)	-	-	-	(3.20)	0.40	0.35	-	-	-	2.46	
61	"24.25"	70	頭部片			(2.50)	-	-	-	(2.50)	0.40	0.35	-	-	-	1.54	
61	"24.25"	71	頭部片			(2.40)	-	-	-	(2.40)	0.50	0.40	-	-	-	1.73	
61	"24.25"	72	頭部片			(2.90)	-	-	-	(2.90)	0.35	0.30	-	-	-	3.09	
61	"24.25"	73	頭部片			(1.90)	-	-	-	(1.90)	0.35	0.30	-	-	-	1.13	
61	"24.25"	74	頭部片			(2.00)	-	-	-	(2.00)	0.40	0.30	-	-	-	1.46	
61	"24.25"	75	頭部片			(1.90)	-	-	-	(1.90)	0.45	0.35	-	-	-	1.38	
61	"24.25"	76	頭部片			(2.20)	-	-	-	(2.20)	0.40	0.30	-	-	-	1.11	
61	"24.25"	77	頭部片			(2.20)	-	-	-	(2.20)	0.40	0.35	-	-	-	1.82	
61	"24.25"	78	頭部片			(2.40)	-	-	-	(2.40)	0.30	0.30	-	-	-	0.93	
61	"24.25"	79a	頭部片			(2.90)	-	-	-	(2.90)	0.45	0.40	-	-	-	4.67	
61	"24.25"	79b	茎部片			(1.20)	-	-	-	-	-	-	(1.20)	0.30	0.30	4.67	
61	"24.25"	80a	頭部片			(1.70)	-	-	-	(1.70)	0.50	0.40	-	-	-	2.29	
61	"24.25"	80b	茎部片			(0.80)	-	-	-	-	-	-	(0.80)	0.30	0.30	〃	
61	"24.25"	81	頭部片			(3.30)	-	-	-	3.30	0.50	0.20	-	-	-	2.40	
61	"24.25"	82	頭部片			(1.90)	-	-	-	(1.90)	0.50	0.35	-	-	-	1.38	
61	"24.25"	83	頭部片			(2.10)	-	-	-	(2.10)	0.40	0.25	-	-	-	1.14	
61	"24.25"	84	頭部片			(2.10)	-	-	-	(2.10)	0.40	0.20	-	-	-	1.79	
61	"24.25"	85	頭部片			(2.20)	-	-	-	(2.20)	0.45	0.30	-	-	-	1.09	
61	"24.25"	86	頭部片			(2.20)	-	-	-	(2.20)	0.50	0.30	-	-	-	2.12	
61	"24.25"	87	頭部～茎部片			(6.10)	-	-	-	(4.70)	0.40	0.35	(1.40)	0.40	0.35	3.80	
61	"24.25"	88	頭部～茎部片			(5.10)	-	-	-	(0.40)	0.45	0.40	4.70	0.25	0.25	3.70	
61	"24.25"	89	頭部片			(4.00)	-	-	-	(4.00)	0.50	0.40	-	-	-	5.24	
61	"24.25"	90	頭部～茎部片			(13.10)	-	-	-	(12.10)	0.40	0.35	1.00	0.40	0.50	12.18	
61	"24.25"	91	頭部～茎部片			(11.80)	-	-	-	(9.10)	0.40	0.30	(2.70)	0.40	0.40	9.07	一部鏃身部を含む可能性あり
61	"24.25"	92	頭部～茎部片			(9.90)	-	-	-	(8.70)	0.40	0.30	(1.20)	0.50	0.40	7.08	
61	"24.25"	93	頭部～茎部片			(8.80)	-	-	-	(1.30)	0.45	0.35	(7.50)	0.35	0.35	9.45	
61	"24.25"	94	頭部～茎部片			(7.20)	-	-	-	(4.20)	0.40	0.35	(3.00)	0.40	0.30	5.55	
61	"24.25"	95	頭部～茎部片			(6.30)	-	-	-	(2.60)	0.45	0.35	(3.70)	0.40	0.25	5.07	
61	"24.25"	96	頭部～茎部片			(2.70)	-	-	-	(1.00)	0.40	0.35	(1.85)	0.30	0.25	1.06	
61	"24.25"	97	頭部～茎部片			(2.75)	-	-	-	(1.25)	0.40	0.40	(1.55)	0.35	0.30	2.26	
61	"24.25"	98	頭部～茎部片			(3.75)	-	-	-	(1.20)	0.60	0.40	(2.55)	0.40	0.30	3.82	
61	"24.25"	99	頭部～茎部片			(4.80)	-	-	-	(3.50)	0.50	0.40	(1.30)	0.35	0.30	3.47	
61	"24.25"	100	頭部～茎部片			(5.90)	-	-	-	(3.10)	0.45	0.35	(2.80)	0.40	0.30	4.56	
61	"24.25"	101	頭部～茎部片			(5.80)	-	-	-	(1.40)	0.40	0.30	(4.40)	0.40	0.30	2.68	
61	"24.25"	102	頭部～茎部片			(5.80)	-	-	-	(0.70)	0.30	0.20	(5.10)	0.35	0.30	2.73	
61	"24.25"	103	頭部～茎部片			(6.00)	-	-	-	(5.80)	0.40	0.40	(0.20)	0.50	0.40	4.14	
61	"24.25"	104	頭部～茎部片			(6.70)	-	-	-	(4.10)	0.40	0.30	(2.60)	0.30	0.40	3.93	木質残存
61	"24.25"	105	頭部～茎部片			(4.50)	-	-	-	(2.40)	0.40	0.35	(2.10)	0.30	0.30	2.82	
61	"24.25"	106	頭部～茎部片			(3.60)	-	-	-	(1.20)	5.50	4.50	(2.40)	3.50	3.00	2.02	
61	"24.25"	107	頭部～茎部片			(3.10)	-	-	-	(0.50)	0.50	0.25	(2.60)	0.35	0.30	2.03	
61	"24.25"	108	頭部～茎部片			(1.90)	-	-	-	(1.50)	0.45	0.40	(0.40)	0.40	(0.40)	2.69	
61	"26.27"	109	頭部～茎部片			(3.40)	-	-	-	(1.00)	0.45	0.25	(2.40)	0.30	0.30	3.38	
61	"22.23"	110	頭部～茎部片			(4.10)	-	-	-	2.40	0.40	0.30	1.70	0.30	0.25	2.67	
61	"22.23"	111	頭部～茎部片			(5.80)	-	-	-	5.50	0.50	0.40	0.30	0.50	0.40	7.07	
61	"26.27"	112a	頭部～茎部片			(4.20)	-	-	-	(2.20)	0.45	0.40	(0.45)	0.40	2.00	13.11	
61	"26.27"	112b	頭部～茎部片			(3.00)	-	-	-	(1.70)	0.40	0.30	(1.30)	0.40	0.35	13.11	
61	"26.27"	112c	頭部～茎部片			(4.50)	-	-	-	(1.10)	0.50	0.50	(3.40)	0.40	0.40	13.11	
61	"26.27"	113a	頭部～茎部片			(5.30)	-	-	-	(2.10)	0.40	0.40	3.20	0.30	0.30	8.99	
61	"26.27"	113b	頭部～茎部片			(4.70)	-	-	-	(2.40)	0.30	0.30	(2.30)	0.45	0.45	8.99	
61	"24.25"	114	頭部～茎部片			(3.30)	-	-	-	(2.50)	0.45	0.40	0.80	0.40	0.35	2.33	
61	"24.25"	115	頭部～茎部片			(4.20)	-	-	-	(1.30)	0.45	0.30	(2.90)	0.35	0.30	2.90	口巻き・木質残存
61	"26.27"	116	頭部～茎部片			(3.50)	-	-	-	(2.10)	0.35	0.35	(1.40)	0.40	0.30	2.90	
61	"24.25"	117	頭部～茎部片			(8.05)	-	-	-	(3.90)	0.35	0.25	4.05	0.30	0.25	4.43	
61	"24.25"	118	頭部～茎部片			(8.00)	-	-	-	(4.05)	0.40	0.40	3.90	0.15	0.15	3.86	
61	"24.25"	119	頭部～茎部片			(7.80)	-	-	-	(3.60)	0.45	0.35	4.20	0.40	0.30	6.00	
61	"24.25"	120	頭部～茎部片			(7.25)	-	-	-	(1.50)	0.40	0.40	5.75	0.30	0.30	4.17	
61	"24.25"	121	頭部～茎部片			(6.65)	-	-	-	(2.90)	0.40	0.30	3.75	0.30	0.25	4.20	
61	"24.25"	122	頭部～茎部片			(6.00)	-	-	-	(1.40)	0.40	0.30	4.60	0.35	0.25	3.99	

第 11 表　鉄鏃観察表（3）

挿図	図版	番号	鉄鏃部位	鏃身形状	鏃身部断面形状	現存長(cm)	鏃身部 長さ(cm)	鏃身部 幅(cm)	鏃身部 厚(cm)	頸部 長さ(cm)	頸部 幅(cm)	頸部 厚(cm)	茎部 長さ(cm)	茎部 幅(cm)	茎部 厚(cm)	重量(g)	備考
61	"24.25"	123	鏃部～茎部片			(5.50)	-	-	-	(0.50)	(0.50)	不明	(5.00)	0.25	0.20	2.17	
61	"26.27"	124	鏃部～茎部片			(4.80)	-	-	-	(0.50)	0.40	0.30	4.30	0.25	0.25	1.75	
62	"26.27"	125	茎部片			(4.50)	-	-	-	-	-	-	(4.50)	0.40	0.35	3.11	木質残存
62	"26.27"	126	茎部片			(4.50)	-	-	-	-	-	-	(4.50)	0.30	0.30	1.65	
62	"26.27"	127	茎部片			(4.10)	-	-	-	-	-	-	(4.10)	0.45	0.40	1.22	
62	"26.27"	128	茎部片			(3.80)	-	-	-	-	-	-	(3.80)	0.35	0.35	2.08	
62	"26.27"	129	茎部片			(3.20)	-	-	-	-	-	-	(3.20)	0.35	0.30	1.66	
62	"26.27"	130	茎部片			(3.70)	-	-	-	-	-	-	(3.70)	0.35	0.30	2.45	
62	"26.27"	131	茎部片			(2.70)	-	-	-	-	-	-	(2.70)	0.35	0.35	2.70	
62	"26.27"	132	茎部片			(2.90)	-	-	-	-	-	-	(2.90)	0.35	0.35	2.46	
62	"26.27"	133	茎部片			(2.80)	-	-	-	-	-	-	(2.80)	0.35	0.30	1.32	
62	"26.27"	134	茎部片			(3.10)	-	-	-	-	-	-	(3.10)	0.40	0.35	1.20	
62	"26.27"	135	茎部片			(2.90)	-	-	-	-	-	-	(2.90)	0.45	0.40	2.89	
62	"26.27"	136	茎部片			(2.80)	-	-	-	-	-	-	(2.80)	0.50	0.35	1.13	
62	"26.27"	137	茎部片			(2.20)	-	-	-	-	-	-	(2.20)	0.30	0.30	0.93	
62	"26.27"	138	茎部片			(2.10)	-	-	-	-	-	-	(2.10)	0.25	0.20	0.30	
62	"26.27"	139	茎部片			(2.20)	-	-	-	-	-	-	(2.20)	0.20	0.20	0.67	
62	"26.27"	140	茎部片			(2.90)	-	-	-	-	-	-	(2.60)	0.35	0.30	1.45	
62	"26.27"	141	茎部片			(2.90)	-	-	-	-	-	-	(2.90)	0.35	0.35	1.24	
62	"26.27"	142	茎部片			(2.20)	-	-	-	-	-	-	(2.20)	0.30	0.30	1.26	
62	"26.27"	143	茎部片			(2.90)	-	-	-	-	-	-	(2.90)	0.40	0.35	1.15	
62	"26.27"	144	茎部片			(2.80)	-	-	-	-	-	-	(2.80)	0.20	0.20	0.64	
62	"26.27"	145	鏃部～茎部片			(2.65)	-	-	-	(1.15)	0.45	0.30	(1.50)	0.35	0.30	1.66	
62	"26.27"	146	茎部片			(2.60)	-	-	-	-	-	-	(2.60)	0.30	0.30	0.88	
62	"26.27"	147	茎部片			(2.60)	-	-	-	-	-	-	(2.60)	0.20	0.20	0.50	
62	"26.27"	148	茎部片			(2.70)	-	-	-	-	-	-	(2.70)	0.35	0.35	1.21	
62	"26.27"	149	茎部片			(2.10)	-	-	-	-	-	-	(2.10)	0.20	0.20	0.47	
62	"26.27"	150	茎部片			(1.70)	-	-	-	-	-	-	(1.70)	0.35	0.25	0.54	
62	"26.27"	151	茎部片			(3.30)	-	-	-	-	-	-	(3.30)	0.35	0.35	0.96	
62	"26.27"	152	茎部片			(4.10)	-	-	-	-	-	-	(4.10)	0.30	0.30	2.37	
62	"26.27"	153	茎部片			(4.60)	-	-	-	-	-	-	(4.60)	0.25	0.25	2.05	
62	"24.25"	154	茎部片			(6.50)	-	-	-	-	-	-	(6.50)	0.35	0.30	3.72	茎端部偏平

凡例　（　）表記：破損している場合の残存長（幅）。

第 12 表　玉類観察表

挿図	図版	報告書番号	名称	材質	色調	径(cm)	高(cm)	孔径(cm)	重量(g)	残存状況	備考
65	巻頭２	1	棗木玉	ガラス	内面（基部）：2.5Y7/3　浅黄色　不透明 外面：白色、緑色、黄色、赤色　すべて不透明	1.05	0.70	0.40	1.39	完形	（緑・白・緑・黄・赤・黄）×４ 芯棒作り
65	巻頭２	2	切子玉	水晶	無色　透明	1.30	1.60	0.10～0.30	3.46	完形	片面穿孔
65	巻頭２	3	切子玉	水晶	無色　透明	1.30	1.50	0.10～0.30	3.23	完形	片面穿孔
65	巻頭２	4	丸玉	珪化木	7.5YR4/3　褐色　不透明	0.80	0.65	0.35	0.46	完形	
65	巻頭２	5	丸玉	珪化木	7.5YR5/3　にぶい褐色　不透明	0.85	0.70	0.30	0.37	完形	
65	巻頭２	6	丸玉	ガラス	緑色　不透明	1.20	0.80	0.35	1.75	完形	
65	巻頭２	7	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.80	0.60	0.25	0.44	完形	平面面あり
65	巻頭２	8	小玉	ガラス	淡青色　半透明	0.65	0.30	0.20	0.24	完形	平面面あり
65	巻頭２	9	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.65	0.40	0.20	0.21	完形	平面面あり
65	巻頭２	10	小玉	ガラス	淡青色　半透明	0.55	0.30	0.15	0.16	完形	平面面あり
65	巻頭２	11	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.30	0.20	0.10	0.03	完形	
65	巻頭２	12	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.40	0.20	0.10	0.04	完形	平面面あり
65	巻頭２	13	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.45	0.25	0.10～0.15	0.06	完形	平面面あり
65	巻頭２	14	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.04	完形	
65	巻頭２	15	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	平面面あり
65	巻頭２	16	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.15	0.03	完形	平面面あり
65	巻頭２	17	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.40	0.20	0.10～0.15	0.04	完形	平面面あり
65	巻頭２	18	小玉	ガラス	緑色　不透明	0.40	0.20	0.10	0.04	完形	平面面あり
65	巻頭２	19	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	
65	巻頭２	20	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.40	0.20	0.10	0.05	完形	
65	巻頭２	21	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	
65	巻頭２	22	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	
65	巻頭２	23	小玉	ガラス	淡青色　不透明	0.35	0.25	0.10	0.05	3/4	
65	巻頭２	24	小玉	ガラス	淡青色　半透明	0.40	0.20	0.10	0.05	完形	平面面あり
65	巻頭２	25	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	
65	巻頭２	26	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.04	完形	平面面あり
65	巻頭２	27	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.35	0.20	0.15	0.04	完形	
65	巻頭２	28	小玉	ガラス	淡青色　半透明	0.35	0.20	0.10	0.03	完形	平面面あり
65	巻頭２	29	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.40	0.25	0.10	0.04	完形	
65	巻頭２	30	小玉	ガラス	濃青色　半透明	0.35	0.30	0.10	0.05	完形	平面面あり
65	巻頭２	31	小玉	ガラス	緑色　半透明	0.40	0.28	0.15	0.05	完形	

第４節　後論

1．国久保古墳出土埴木玉の化学組成
2．国久保古墳出土遺物の検討
（1）　国久保型埴木玉の製作方法と副葬古墳の特質
（2）　国久保古墳出土の轡について
（3）　国久保古墳出土遺物の編年的位置
3．国久保古墳の評価と被葬者像
4．伝法古墳群の構造と展開

1．国久保古墳出土埴木玉の化学組成

はじめに

考古学研究では、遺物が遺跡へと至るまでの来歴を辿ることによって、個々の時代における人々の行動様式や流通関係に迫ることが可能となる。蛍光Ｘ線分析装置を用いた分析は、装置の操作や測定の前処理が容易である点や、特に比較的短い時間で資料を非破壊で測定できるなどといったメリットにより、考古資料の扱いに適している。埴木玉は、岐阜県本巣市船来山 O-19 号墳など西日本を中心に数例出土しており、吉田（1999）が指摘するように類似性が強く、中国からの搬入が想定されている。また、蛍光Ｘ線分析装置による分析事例もあることから比較検討の材料とすべく、静岡県富士市国久保古墳から出土した埴木玉を測定した。

埴木玉の分析事例としては藤根・宮野（1999）による船来山 O-19 号墳 No.4036 が挙げられる。

（1）測定方法

蛍光Ｘ線の測定にはエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置 JSX-3100s（日本電子株式会社）を用いた。Ｘ線管球は、ターゲットが Rh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は 30kV、電流は係数率が最適になるように自動設定とした。Ｘ線検出器は Si（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とした。測定時間は全て 60sec である。

今回測定対象となる埴木玉は、一部に欠損が認められ下地部分が露出しており、縞模様部分との比較のため下地部分も測定した。コリメーターは、色部分の測定及び材質部分は開口径 1mm、全体の測定は 7mm を使用した。1mm コリメーター使用の測定に際して、Ｘ線分析用マイラーフィルムは軽元素の減衰が認められるため用いず、4mm のスリット（ポリプロピレン製）を自作した。全体の測定にはマイラーフィルム（Chemplex CAT.No:100）を使用した。測定元素は、含有元素が不明なため自動設定を用いた。Ｘ線データ解析ソフトには、明治大学文化財研究施設製；JsxExt を使用した。

測定対象資料の埴木玉は、静岡県埋蔵文化財調査研究所保存処理室によって、クリーニングとしてエタノールを浸した綿棒で汚れを拭う、強化処理としてアクリル樹脂（パラロイド B-72 という樹脂の 10% 溶液）を減圧含浸し、同樹脂の 15% 溶液を局所的に浸透させたという保存処理が行なわれている。よって、不用意な損傷を防ぐため一切の洗浄を行なわずに測定した。

色部分の測定は、1mm コリメーターの照射範囲に単色が収まる箇所を選択し、赤色部を 4 箇所、白色部を 4 箇所、黄色部を 8 箇所、緑色部を 5 箇所、部材の測定は側面が欠けている部分（欠損部）を 2 箇所、欠損部と反対側で色模様が無い部分（底部）を 2 箇所の計 25 回測定した。

（2）測定結果

第 13 表　国久保古墳出土雁木玉の化学組成（wt%）

試料名称	SiO_2	TiO_2	SnO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	CuO	PbO	CaO	K2O
kuni-gan-red1	**59.3**	**1.0**	**n.d.**	**14.3**	**3.6**	**0.1**	**1.9**	**12.7**	**4.5**	**2.6**
kuni-gan-red2	**62.2**	**1.1**	**n.d.**	**12.9**	**3.3**	**0.1**	**1.8**	**11.6**	**4.5**	**2.5**
kuni-gan-red3	**62.2**	**1.1**	**n.d.**	**12.4**	**3.2**	**0.2**	**1.9**	**11.9**	**4.5**	**2.6**
kuni-gan-red4	**62.0**	**0.9**	**n.d.**	**12.4**	**3.5**	**0.1**	**1.9**	**12.1**	**4.7**	**2.3**
kuni-gan-whi1	67.7	0.4	n.d.	6.7	1.8	0.5	2.5	7.7	10.9	1.7
kuni-gan-whi2	72.3	0.3	n.d.	6.4	1.9	0.7	1.1	3.7	11.4	2.2
kuni-gan-whi3	66.3	0.4	n.d.	5.5	2.2	0.5	2.6	8.7	11.8	2.0
kuni-gan-whi4	69.1	0.4	n.d.	5.9	1.8	0.5	2.1	6.7	11.2	2.1
kuni-gan-yel2	**45.4**	**0.4**	**9.0**	**7.8**	**1.6**	**n.d.**	**0.3**	**35.5**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel3	**45.5**	**0.4**	**8.5**	**10.2**	**1.6**	**n.d.**	**0.3**	**33.4**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel4	**45.0**	**0.4**	**8.7**	**8.9**	**1.7**	**n.d.**	**0.2**	**35.1**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel5	**45.2**	**0.5**	**9.5**	**6.1**	**1.5**	**n.d.**	**0.3**	**37.0**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel6	**45.8**	**0.4**	**8.1**	**7.7**	**1.4**	**n.d.**	**0.2**	**36.3**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel7	**46.7**	**0.5**	**8.0**	**6.0**	**1.3**	**n.d.**	**0.3**	**37.2**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-yel8	**47.2**	**0.6**	**7.3**	**6.1**	**1.3**	**n.d.**	**0.3**	**37.2**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-gre2	58.0	0.6	n.d.	5.3	2.0	0.1	5.5	16.8	10.2	1.5
kuni-gan-gre3	56.7	0.4	n.d.	7.5	2.1	0.1	5.2	16.5	9.6	1.8
kuni-gan-gre4	61.2	0.4	n.d.	4.6	1.9	0.1	4.9	15.1	9.9	1.7
kuni-gan-gre5	57.1	0.5	n.d.	7.5	2.1	0.2	4.8	16.6	9.8	1.4
kuni-gan-kibu1	**36.6**	**n.d.**	**12.5**	**6.4**	**3.4**	**n.d.**	**n.d.**	**41.1**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-kibu2	**26.1**	**n.d.**	**19.1**	**5.3**	**2.4**	**n.d.**	**n.d.**	**47.1**	**n.d.**	**n.d.**
kuni-gan-soko1	36.3	n.d.	11.1	5.8	2.7	n.d.	n.d.	44.1	n.d.	n.d.
kuni-gan-soko2	33.6	n.d.	13.4	6.0	2.5	n.d.	n.d.	44.5	n.d.	n.d.

1mm コリメーターを使用。

試料名称	SiO_2	TiO_2	SnO_2	Al_2O_3	FeO	MnO	CuO	PbO	CaO	K_2O	P_2O_5
kuni-gan-total1	43.4	0.8	5.0	5.9	3.0	0.3	3.4	25.0	9.2	2.7	1.3
kuni-gan-total2	45.5	0.2	n.d.	6.5	2.9	3.1	29.9	1.5	0.9	9.4	n.d.

7mm コリメーターを使用。

今回対象とした雁木玉は、国内でも十数例しか出土しておらず非常に希少価値が高い。したがって非破壊で測定せざるを得ないが、その場合は蛍光 X 線分析においても充分な再現性と確度を持って定量分析することは非常に困難である。さらに含浸処理に使用した薬剤に含まれる元素も同時に測定されている可能性もある。また、表層の色部分の厚さが薄い場合は下位の部材などからの蛍光 X 線も発生・検出される可能性がある。よって、今回示す分析値の再現性及び確度についての信頼性は低いことを初めに断っておく。

雁木玉を構成する部材や色部分の元素や化学形態は不明な点が多い。そこで初めに定性分析で検出可能な元素を同定し、それらが酸化物を構成していると仮定して FP 法で定量した。このため機器の制約上測定対象ではないナトリウムより軽い元素が存在する場合も、それらを除いた残りの元素の合計 100% に規格化される。また鉄のように複数種の酸化物をとりうる場合も代表的なもので固定させている。

同色部分の分析結果を比較した場合において、ばらつきが大きくしばしば未検出となる元素（ナトリウム、マグネシウム、リンなど）については各色単位で定量値の平均と標準偏差を算出し、標準偏差が平均の 50% 以上になる元素は除いて再計算させた。定量値を第 13 表に示す。試料番号の yel1 と gre1 は測定結果が他の色と混合したような値になっており、X 線照射時に隣接する色部分からの蛍光 X 線も検出器に入射している可能性が高いと判断し除外した。

赤色部で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、K_2O（酸化カリウム）、CaO（酸化カルシウム）、TiO_2（酸化チタン）、MnO（酸化マンガン）、FeO（酸化鉄）、PbO（酸化鉛）、である。

白色部で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、K_2O（酸化カリウム）、CaO（酸化カルシウム）、TiO_2（酸化チタン）、MnO（酸化マンガン）、FeO（酸化鉄）、CuO（酸化銅）、PbO（酸化鉛）である。

黄色部で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、TiO_2（酸化チタン）、FeO（酸

化鉄)、CuO（酸化銅）、SnO_2（酸化スズ）、PbO（酸化鉛）である。

緑色部で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、K_2O（酸化カリウム）、CaO（酸化カルシウム）、TiO_2（酸化チタン）、MnO（酸化マンガン）、FeO（酸化鉄）、CuO（酸化銅）、PbO（酸化鉛）である。

材質部で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、FeO（酸化鉄）、PbO（酸化鉛）、SnO_2（酸化スズ）である。

全体の測定で検出された元素は、Al_2O_3（酸化アルミニウム）、SiO_2（酸化ケイ素）、K_2O（酸化カリウム）、CaO（酸化カルシウム）、TiO_2（酸化チタン）、MnO（酸化マンガン）、FeO（酸化鉄）、CuO（酸化銅）、SnO_2（酸化スズ）、PbO（酸化鉛）、P_2O_5（酸化リン）が検出された。

（3）実体顕微鏡観察結果

実体顕微鏡下の観察（15倍）では、黄色が他の色全てに覆い被さるように固体化したことが認められた。緑色と白色は切り合いが不明瞭な場合が多いが、白色の方が少し落ち込んでいた。

配色を示す。

黄－緑－白－緑－黄－赤－黄－緑－白－緑－黄－赤－黄－緑－白－緑－黄－赤－黄－緑－白－緑－黄－赤－黄

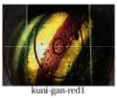
配色パターンは赤・黄・緑・白・緑・黄×4であり、愛知県岡崎市・岩津2号墳の一部とパターンが類似する（吉田 1999）。なお、吉田（1999）では茶と記載されているが、今回の報告では色彩が明瞭であることから「赤」として記載している。

（4）考察

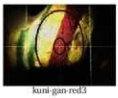
今回の分析結果では、部材と色部分で化学組成が異なる。部材部分は Al_2O_3、SiO_2、FeO、SnO_2、PbO が検出された。色部分は部材部分で検出された元素に加えて K_2O、CaO、TiO_2、MnO、CuO が検出され、SnO_2 は赤色部、白色部、緑色部では検出されなかった。また、色部分では SiO_2 が多く、PbO が少ないという違いが認められた。また、色によって化学組成に違いも認められるようであるが、発色に関わっている元素であるかどうかについては言及することは今回の分析では出来ない。ただし発色に関係しているかどうかとは別に、各色を特徴付ける化学組成が得られた可能性はある。7mm のコリメーターによる分析では、分析ごとに試料の姿勢を動かし測定範囲を変えたところ、得られる化学組成が異なっていた。この場合測定範囲に含まれる色の組み合わせや面積比が変わるために結果が異なったことが想定されるが、元素によっては1mm のコリメーター使用時の各色の濃度範囲を超えた結果となっており、単純な混合では説明がつかない。測定条件の違いが影響している可能性もあり、今後の検討を要する。

これまでの元素とガラスの発色の関係については、馬淵・江本（1980）による ICP 発光分光分析による結果では、黄色は Mn か Pb、緑色は青色発生元素（Co、Cu）と黄色発生元素（Mn、Pb）の共存によるとあり、また肥塚（2007）ではガラスの着色法として①金属イオンによる方法、②非金属元素による方法、③金属元素による方法、④結晶による方法などが挙げられている。このように色素には無機物・有機物含めて様々なものが知られており、完全な同定には含まれる軽元素の化学組成、化学結合状態の決定、物質の結晶構造の決定等が必要となると思われるが、完全に非破壊で行える分析手法は現状では限られている。

今後は色単位の分析事例を増やすことによって、雁木玉など古代ガラスの色と元素の関係を明らかにする必要があろう。色素が無機物質からなるならば、今回のような組成分析結果をもとに復原できる可


kuni-gan-red1

kuni-gan-red2


kuni-gan-red3

kuni-gan-red4

kuni-gan-whi1

kuni-gan-whi2

kuni-gan-whi3

kuni-gan-whi4

kuni-gan-yel2

kuni-gan-yel3

kuni-gan-yel4

kuni-gan-yel5

kuni-gan-yel6

kuni-gan-yel7

kuni-gan-yel8

kuni-gan-gre2

kuni-gan-gre3

kuni-gan-gre4

kuni-gan-gre5

kuni-gan-kibu1

kuni-gan-kibu2

kuni-gan-soko1

kuni-gan-soko2

kuni-gan-total1

kuni-gan-total2

測定箇所

実体顕微鏡写真（15 倍）

能性もあり、必要に応じて合成実験をおこない、その結果を分析手法・分析条件の選択等にフィードバックすることが望まれる。

おわりに

今回は、日本でも十数例しか報告されていない、貴重な雁木玉を分析し、結果を提示することができた。ただ、これまで提示されてきた分析結果は、測定箇所の具体的な提示が少ない。今回分析した雁木玉の部材や色調が単色なガラス玉では化学組成が比較的均一と考えられるので良いかもしれないが、色調が違う部分は化学成分により発色している可能性が高いため、より詳細な報告が必要である。最近の分析機器の進歩により、今回分析に使用した機器よりも微小領域に優れている機器もあり、今後は色単位など、より詳細な分析結果の比較・検討が可能であろう。

謝辞

今回の報告にあたり、防災科学技術研究所の長井雅史氏に推敲していただいた。文末であるが、ここで厚く御礼申し上げる。

（金成太郎・杉原重夫）

2. 国久保古墳出土遺物の検討

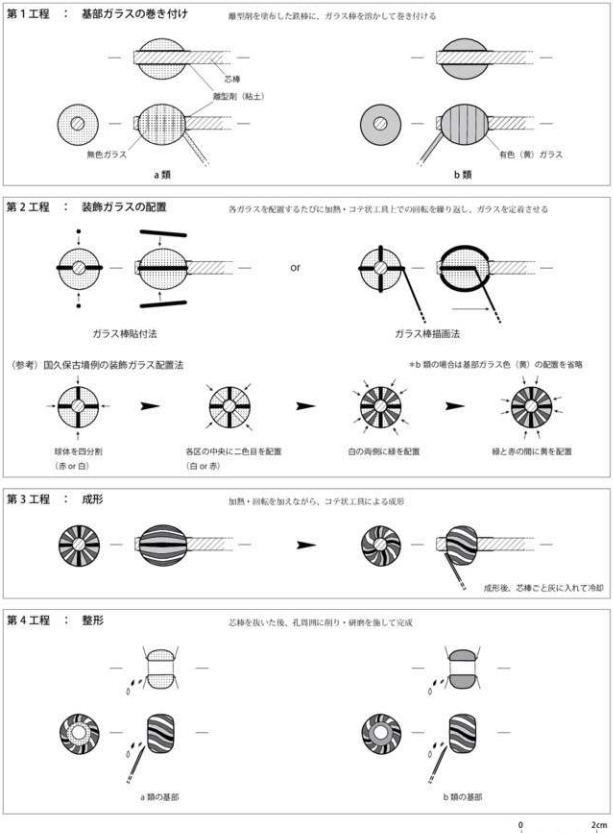
(1) 国久保型雁木玉の製作方法と副葬古墳の特質

古墳出土の雁木玉については類例が少ないものの、各出土古墳の報告書を中心に研究されてきている。古代以前のトンボ玉全般については海外の研究も含めて安永周平氏が簡潔にまとめておられるので、そちらを参照されたい（安永 2008）。ここでは縞模様のあるトンボ玉を指す雁木玉（安永分類の「縞模様ガラス玉」）についての研究を紹介する。なお雁木玉の集成については安永氏のものを参考として、本例と姫路市・山崎山 1 号墳例を追加したものを新たに作成した（第 14 表）。

まず苅谷道郎氏と小田富士雄氏は、一つの埋葬施設から 2 点出土した北九州市・こうしんのう 2 号墳の報告のなかで、その製作方法に言及している（苅谷・小田 1990）。吉田英敏氏は、こちらも一度に 2 点の出土をみた本巣市・船来山古墳群（O-19 号墳）の報告のなかで、氏自らおこなった製作実験に基づく製作工程の復元のほか、宮崎県から愛知県までの五つの古墳で出土した赤、黄、緑、白色の斜めの縞模様を有するタイプの雁木玉についてその共通性を指摘し、同一工人の手によるものと推測、製作地もいわゆる戦国トンボ玉と同じ鉛ガラスであることを評価して中国大陸に求めている（吉田 1999）。またそのタイプの雁木玉を出土した古墳については、いずれも径 20 ～ 14m の小規模な墳丘であり、6 世紀中葉から後葉の短期間におさまる時期のものとしている。安永周平氏は一連の論考のなかで、奈良時代まで存在した特殊なガラス玉を総称した「装飾付ガラス玉」という名称を提唱し（安永 2006 など）、そのなかでいわゆる雁木玉を「縞模様ガラス玉」と呼称して、それらが九州に分布が偏ることを指摘された。また斑点文ガラス玉などと比べて模倣が困難であることから、いずれも舶載品であると想定している（安永 2008）。

製作地については海外に求めることで一致しているが、慶州・皇南大塚例とその他の副葬品の状況までも類似する橿原市・新沢千塚 126 号墳例等はともかくとして、その他の雁木玉についてもすべて舶載品であるとするには、さらに充分な検証が必要であろう。安永氏は詳細な分類の内容は未だ示されていないものの、雁木玉については氏の集成された全 17 例の中で五つの型式に分類できると指摘されており（安永 2008）、その製作についても多様な状況が想定され得ると考える。

したがって本節では、まずは個々の資料の内容を的確に把握することを第一義におき、国久保古墳例の製作方法を復元する。その後に他の古墳の内容や分布についても検証し、雁木玉が当古墳で出土した



第 66 図　脛木玉製作工程の復元（1/1）

意義について考えてみたい。

a）雁木玉製作工程の復元（第 66 図）

今回分析対象とする雁木玉は、吉田氏が同タイプとした赤、黄、緑、白の 4 色で構成される斜縞模様の雁木玉である（第 67 図）。国久保古墳例もこれに含まれ、計 8 例となった。製作工程については、苅谷氏や吉田氏の研究を参考としつつ、ガラス造形作家の石井秀史氏（沼津市・ハーベストムーン）に実演・ご教示いただいて、国久保古墳例の製作工程を復元した。本来的には実際の資料と性質の近いガラスや道具を使用するべきではあるが、そちらについては他の事例の科学分析も含めて今後の課題としたい。そのため材料となるガラスの調合方法やガラス棒の製作についても、今回は省略した。

第 1 工程：基部ガラスの巻き付け　離型剤となる耐火粘土等を塗布した鉄製の芯棒に、基部（核）となるガラス棒を溶かして巻き付ける。これには苅谷氏が想定されるように装飾用の着色が施されていないガラスを用いる場合と、吉田氏が想定されるように装飾用に着色されたガラスを用いる場合とがある。前者はこうしんのう 2 号墳例（2 点）や国久保古墳例でみられ（a 類）、後者は岡崎市・岩津 2 号墳例で確認できる（b 類）。

第 2 工程：装飾ガラスの配置　続いて装飾用の着色ガラスを配置する。吉田氏が想定されているように、引き伸ばして用意した極細のガラス棒を 1.0cm 強の長さに切断したものを色別に用意して貼り付けていく方法（ガラス棒貼付法）のほか、極細のガラス棒によって基部に直接描いていく方法（ガラス棒描画法）が想定される。製作を試みていただいた石井氏によれば、ガラス棒貼付法は仕上がりが比較的綺麗にはなるものの、実際に太さ 0.1 ～ 0.2cm、長さ 1.0cm 程度のガラス棒を用意して、当時の小型の鉄鉗で挟んで貼り付けていく工程は想像以上に難易度が高く、手間のかかる作業であるとのことである。一定の経験を有する工人であればガラス棒描画法でも精美に仕上がることが予想され、こちらの技法の存在も想定しておく必要があるだろう。

ガラス棒貼付法

ガラス棒描画法

コテによる成形

孔周囲の未研磨品（左）と研磨品（右）

また精美な縞模様を球体に描くために、効率的な色ガラスの割付配置法が存在したことが推察される。実際の資料には配色にいくつかの単位（パターン）があり、多くの雁木玉はその単位を3回繰り返して1周する三分割法を採用している（こうしんのう2号墳例、銭亀塚古墳例、岩田14号墳例、船来山19号墳例）。国久保古墳例では顕微鏡観察によって得られた各色ガラスの切り合い関係（前項参照）から、図示したように四分割の割付配置法を復元することができた。四分割法は国久保古墳例が初例である。こうした規格的な作業方法によってはじめて、各色ガラスを球体上に精美に配置させることが可能になったと考えられる。

第3工程：成形　前工程で配置した装飾ガラスが加熱・回転によって基部にある程度定着したら、回転させながらコテ状工具によって玉の両端部に圧力をかけることで、偏平な俵形に成形する（吉田1999）。その際にこのタイプの雁木玉に特有である、色ガラスのしなやかな曲線が表出されるのである。一通り成形されたものは芯棒ごと灰などに突き刺し、冷却させる。

第4工程：整形　灰に入れたガラス玉は10～20分程度で冷えて固まるので、その後芯棒を抜く。そのままであると、よほどの熟練工人でない限りは、両端部で色ガラスが喰出たり、離型剤の粘土が付着することもあるため（吉田1999）、孔周囲に削りや研磨を施すことで端部を整形する。国久保古墳例の断面を観察すると、上下面は平坦でも丸くもなく、孔の周囲で内側に向って若干落ち込むような形状を呈している。これは手で握るサイズの砥石などで面的に研磨したものではなく[1]、先端の細い研磨具によって孔周囲のみを磨いた結果であろう。端部の余分な色ガラスを削ることで孔周囲には基部ガラスが明瞭に現れるため、ここから基部類型を判別することが可能である。この際、基部に装飾用のガラスを用いていなければ端部に装飾性の無い地の面が見えてしまうこととなり、仕上がりの品質は低下する。

b）雁木玉副葬古墳の分布と様相

国久保型雁木玉　国久保古墳出土雁木玉の製作工程の復元からは、高度に熟練した技術を必要としつつも、装飾ガラスの割付配置法や研磨による整形等、一定品質の製品を確保するための様々な工夫が施されていることが判明する。加えて、同タイプの8点の雁木玉はそれぞれの形状も非常に似通っており、径1.05～1.25cm、高さ0.70～1.00cm、孔径0.40～0.45cmまでの範囲におさまっている。

装飾ガラスの配置単位や分割法には個体差もみられるが、差異のなかにも共通する表現は看取される。ここで配色単位について少し詳しくみてみたい。赤-黄-緑-白-緑-黄-緑-黄の単位を3回繰り返して一周するという配置のものは、こうしんのう2号墳例の2点と岩田14号墳例の計3点存在する。現状ではほかの配置法も含めて同一配置資料が存在するのはこのパターンだけであり、特筆されよう。

他の資料はこの配置の一部分を採用したものとなる。まず黄-赤-黄と並ぶ配置は7点の資料でみられる。続いて黄-緑-白-緑-黄という並びを含む配置は6点の資料でみられている。色ガラスの線数が計24本になるのも5点の資料で確認できる。これは割付時の分割数や一単位の構成線数を総合して決定される数であるが、四分割法の国久保古墳例でも24本なのは大変興味深い。また赤ガラス部分を

第67図　国久保型雁木玉の諸例（1/1）

第 14 表　古墳出土雁木玉集成

番号	市町村	遺跡名	墳形 (m)	主体部（全長 m）	資料番号	径 (cm)	高 (cm)	孔径 (cm)	基部	配色	棟数	分類	その他の副葬品	築造時期
1	上益町	コフン塚遺跡 B 地点第 2 号墳構		箱式石棺 (1.6)		1.30	?	0.40	?	緑・白？		?	ガラス小玉、陶質土器、須恵器	TK43-TK209
2	北九州市	こうしんのう 2 号墳	?	横穴式石室	A	1.20	1.00	0.45	灰	(赤・黄・緑・白・緑・黄・緑・黄)×3	24	国久保型	素環頭鉄刀、勾玉、ガラス丸玉、ガラス小玉、須恵器	6c 後半
					B	1.25	0.95	0.50	灰	(赤・黄・緑・白・緑・黄・緑・黄)×3	24	国久保型		
3	小郡市	ハサコの宮 2 号墳	円 (13.5)	横穴式石室 (4 ～ 5)		1.88	1.70	0.70	茶褐	5 連文：(淡褐)・茶褐地・淡白青・青・赤茶・淡緑・淡白青・青・淡白青・赤茶・淡緑・淡白・茶褐地・淡白・茶褐地・(淡褐) 8 連文：淡褐・茶褐地・青・淡白・青・茶褐地・(淡褐)・茶褐地・(淡褐)・茶褐地・青・淡白・青・茶褐地・(淡褐) ※ (淡褐) 波状文が 5 連・8 連波状文を区分？		横波状	ガラス小玉、陶質土器、須恵器、土師器	TK43
4	八女市	乗場古墳	前方後円 (70)	複室両袖横穴式石室 (10)		1.15	7.70	0.35	?	緑・黄…			金銅馬具、鉄製刀装具、鳴鏑丸玉、ガラス丸玉、耳環、須恵器	MT15-TK10
5	瀬高町	瀬高町内古墳												
6	帯隈市	鶴亀塚古墳		地下式板石組石室 (3)		1.20	0.90	0.40	?	(赤・黄・緑・黄・白・濃緑・白・黄)×3	24	国久保型	銅鏡片、銀環、ガラス小玉、鉄鏃、鉄釘、須恵器片	6c
7	山江市	大浦 8 号墳	円 (10.8)	複室両袖横穴式石室 (5.7)		1.20	0.94	0.35	青	青地・青緑（帯状）・青地		横帯状	金銅馬具、鉄刀、鉄鏃、耳環、ガラス丸玉、ガラス小玉、水晶切子玉、須恵器、土師器	TK209
8	多度津町	盛土山古墳	円 (42)	箱式石棺 (2)		?	?	?	?	?			四神四獣鏡、銅鈴、鉄刀、モザイク玻璃付玉、硬玉勾玉、鳴鏑勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉、	5c 後半
9	赤羽市	岩田 14 号墳	円 (20)	片袖横穴式石室 (11.8)		1.10	0.81	0.43	?	(赤・黄・緑・白・緑・黄・緑・黄)×3	24	国久保型	金銅馬具、単龍環頭大刀 2、鉄鏃、鉄鎌、鉄釘、鎧、麻子刀子、刀子、ガラス丸玉、ガラス小玉、滑石勾玉、石英管玉、埋れ木製玉、土製丸玉	TK43
10	郷路市	山崎山 1 号墳	不明	片袖横穴式石室 (6.5)	36	0.80	0.80	?	?			斜縞状	金銅馬具、銀張銅鏡、鉄刀、鉄鏃、耳環、鳴鏑勾玉、鳴鏑丸玉、切子玉、算盤玉、ガラス連玉、ガラス小玉、須恵器、土師器	TK209
					37	0.90	0.80	?	?			斜波状		
11	城陽市	宮山 2 号墳	前方後円? (25)	片袖横穴式石室 (6.5)		?	?	?	緑	黄・赤・緑地・黄…		斜縞状	金銅馬具、銀鏡、須恵器（装飾付器台）、土師器	MT15-TK10
12	櫻部市	新沢千塚 126 号墳	長方形 (22)	単室両袖横穴式石室 (6.1)	1 号	0.80	0.75	0.20	黄	黄・緑…		横波状	銅鏡、青銅製熨斗、鉄刀、鉄具金具、漆盾、金製方形版、金製亀甲付耳飾、金製螺旋状垂飾、金製空玉、金製指輪、銀製空玉、銀製指輪、金製歩揺、ガラス瓶、ガラス椀、金箔ガラス丸玉、ガラス丸玉、ガラス小玉、ヒスイ勾玉、滑石子玉	5c 後半
					2 号	0.82	0.75	0.20	黄	黄・緑…		縦縞状		
13	下市町	岡塚古墳	円 (15)	単室両袖横穴式石室 (6.1)		1.02	0.85	0.40	?	白・緑・?		斜波状	単龍環頭柄頭、金銅素環大刀、鉄刀、鉄鏃、鉄鎌、刀子、鉄斧、鉄釘、鉄鋲、金銅飾金具、耳環、ガラス丸玉	TK43
14	本巣市	船来山 O-19 号墳	円 (13)	無袖横穴式石室 (6.3)(赤彩)	4036	1.15	0.85	0.40	浅黄	(赤・黄・緑・黄・緑・白)×3	18	国久保型	馬具飾金具、鉄刀、銀張責金具、鉄鏃、鉄斧、耳環、銀製空玉、硫石、須恵器	TK43-TK209
					4037	1.10	0.85	0.40	浅黄	(赤・黄・緑・黄・緑・白・緑・黄)×3	24	国久保型		
15	岡崎市	岩津 2 号墳	円 (7 以上)	側面複室両袖横穴式石室 (7.35)		1.20	0.70	0.40	黄	(赤・黄・緑・白・緑・黄・)×3・緑・黄	18+2	国久保型	鉄製馬具、鉄製刀装具、鉄鏃、鉄釘、耳環、鳴鏑勾玉、ガラス丸玉、ガラス小玉、須恵器	TK209-飛鳥 1
16	富士市	国久保古墳	円? (8)	無袖横穴式石室 (4.7)		1.05	0.70	0.40	浅黄	(赤・黄・緑・白・緑・黄)×4	24	国久保型	鉄製馬具、銀装柄頭、鉄鏃、鉄釘、耳環、水晶切子玉、琥珀木丸玉、ガラス丸玉、ガラス小玉、須恵器	飛鳥 1-2

太く仕上げるのも少なからず共通する要素であり、こうしんのう２号墳例（２点）、船来山 O-19 号墳例（２点）、国久保古墳例[2]の計５点で確認できる。このような色の種類や３分割を基本とする背景について吉田氏は中国大陸起源の奇数崇拝の思想や巴文様の呪術性を想定されているが（吉田 1999）、その当否は別としても、これら８点に共通して、色の種類や並び順を決める際に何らかの技術的または宗教的思想が影響したことは間違いない。

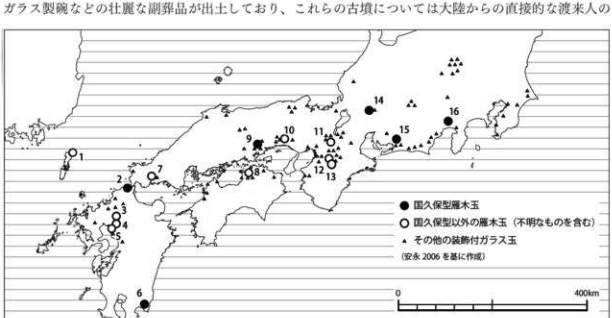
以上の諸特徴から、第 67 図で示した８点の雁木玉については、技術的な諸特徴をみる限り、同一の生産地で一定の思想のもと製作された可能性が非常に高いと考えられる。色ガラスの微小な差異や分割法の違いからすべてが同時的に生産されたとは言いにくいが、限られた時期幅の中で極少量ずつ継続して製作されていたのではないだろうか。端部に一部未整形部分や色ガラスの配置数に端数がある（吉田 1999）岩津２号墳例や、配置数が少なく縞模様の曲線が強い船来山 O-19 号墳例（4036）は整形処理や割付配置法が確立する以前の試作品とみられる。その意味では基部構造の差異についても、基部まで色ガラスを用いるもの（b 類）から外面の最小限の範囲にのみ色ガラスを用いるもの（a 類）へと省略化が進んだものと考えられよう。

したがって本稿では、互いに類似した形態を呈する赤・黄・緑・白の四色を用いた雁木玉について、特に国久保型雁木玉と呼称する。古墳出土の雁木玉のうち、これほどまでに規格的な形態や配色を有し、一定の個体数が生産されたものはこの雁木玉のみであり、その他の雁木玉とは様々な面で性質が異なる可能性が高いとみられる。

分布の特徴と副葬品の内容　雁木玉出土古墳とその他の装飾付ガラス玉を出土した古墳の分布を示したのが、第 68 図である。古墳の時期は概ね５世紀後半から７世紀前半までである。

まず国久保型以外の雁木玉の分布が対馬・北部九州から瀬戸内海沿岸、畿内までの限られた範囲におさまるのに対し、国久保型雁木玉については南は九州南部の志布志湾沿岸まで、東は駿河の富士山南麓まで分布範囲が拡大していることが特筆される。細かく見ると国久保型以外の雁木玉は畿内と北部九州に集中する傾向がみられるが、国久保型は畿内を除く東海以西の地域に散在的に分布している。

国久保型以外の雁木玉が出土した古墳の内容に目を向ければ、対馬市・コフノ**隈**遺跡 B-2 遺構や小郡市・ハサコの宮２号墳では陶質土器が、橿原市・新沢千塚 126 号墳では青銅製熨斗や金製垂飾付耳飾、ガラス製碗などの壮麗な副葬品が出土しており、これらの古墳については大陸からの直接的な渡来人の



第 68 図　雁木玉出土地分布図（1/8,000,000）

ものである可能性が高い。またほかにも後期の大型前方後円墳である八女市・乗場古墳や、金銅装馬具や装飾付器台、6 世紀前半の畿内型石室を有する城陽市・冑山 2 号墳、単鳳環頭大刀柄頭や金銅装素環大刀を有する下市町・岡峯古墳といった地域の首長墳やそれに準ずる階層の古墳からの出土が目立っている。これらのことから国久保型以外の雁木玉については、直接的な対外交渉や人の移動によってもたらされたか、あるいはヤマト王権などを介して瀬戸内海航路上の有力層に配布されたものであると考えられる。

国久保型雁木玉の前に、その他の装飾付ガラス玉を出土した古墳についてみてみよう。安永氏の集成を参考に東海周辺の出土古墳を挙げれば、各務ヶ原市・大牧 1 号墳、豊橋市・馬越長火塚古墳、磯辺大塚古墳、飯田市・金山二子塚古墳、袋井市・団子塚 9 号墳、大門大塚古墳、掛川市・宇洞ヶ谷横穴墓など、階層的に上位に位置づけられる副葬品や墳丘、石室などを有した古墳に主体的に副葬されていることが指摘される。分布については北部九州から瀬戸内海沿岸、畿内、太平洋沿岸の東海から房総、そして北関東にかけてみられ、その伝播に海路が大きく関わっていたことが指摘されている（安永 2008）。また装飾付ガラス玉の中で最も多く出土する斑点文ガラス玉については、6 世紀後半以降の流行期に日本列島内で模倣生産されたことが推察されているのであり（安永 2008）、6 世紀後半から 7 世紀には分布の最も集中する畿内を基点として、主要交通路路上に位置する各地の首長層やそれに準ずる層に装飾付ガラス玉が配布されていた可能性も十分に考えられよう。

以上の状況を念頭に、今一度国久保型が出土した古墳の内容や分布についてみてみたい。赤磐市・岩田 14 号墳のように全長 11.8 m の大型横穴式石室に金銅装馬具や 2 本の単龍環頭大刀、鉄鉾といった副葬品が入るものや、富士市・国久保古墳のように銀装大刀柄頭が入るものもあるが、国久保型以外の雁木玉やその他の装飾付ガラス玉を出土した古墳の内容と比べると、階層的に低い副葬品内容の古墳が目立つ。ただ本巣市・船来山 O-19 号墳は揖斐川流域の導入期横穴式石室とも共通する床面の段構造や壁面の赤彩が採用された無袖形石室であり、2 点の国久保型雁木玉のほかに銀製空玉や銀張貴金具が出土している。船来山古墳群は西濃を代表する大型群集墳であり、このほかにも同じく赤彩された段構造の石室を有し、23 点にも及ぶ斑点文ガラス玉が出土した O-272 号墳や、鏃子が出土した G-29・K-103・L-215 号墳、百済系三足壺（近藤 2003）が出土した L-121 号墳など、渡来系要素の濃厚な古墳が集中して築かれている。このような後期の大規模群集墳の成立する背景には、その地域に帰結する要因のみでは説明し難く、王権の関与（和田 1992）やその間を仲介する地域首長層の存在（横幕 2001）を想定する必要がある。また岡崎市・岩津 2 号墳についても、2 号墳自体は雁木玉のほかに目立った副葬品はみられないものの、隣接する岩津 1 号墳は全長約 10.0m の大型石室に船載品とみられる（近藤 1998）金銀張三葉環頭大刀柄頭や飛禽鏡、装飾付須恵器が出土している。このことから岩津 2 号墳の被葬者も、やや時期が下るものの、対外交流にも秀でた 1 号墳の被葬者の性格を受け継いでいたことが充分に想定されよう。

また分布については串間市・銭亀塚古墳がやや外れるものの、瀬戸内海沿岸と東山道、東海道ルート沿いに散在的に分布しており、畿内を除くその他の装飾付ガラス玉が出土した古墳の分布ともよく合致していることは重要であろう。時期的にも国久保型雁木玉の出土古墳は 6 世紀後半から 7 世紀前半頃におさまっており、装飾付ガラス玉全般の流行期とも合致している。

これらのことから、国久保型雁木玉を副葬する古墳被葬者の全体的な傾向としては、海外との繋がりを有しつつも、畿内中枢から地方への主要交通路上に配置された、地域首長層やそれに順ずる層を補佐するような階層の人格であることが指摘される。国久保古墳からは後述するように鉄器製作集団との関わりが指摘される鉄鐸（早野 2008、2010）や石室の規模に見合わない大量の鉄鏃が、また船来山 O-19 号墳からは袋部を有する鉄製鑿が出土しており、具体的には特殊な職掌や工人集団を統率・管掌するよ

うな立場の人物も含まれると考えられる。

製作地については海外の事例や個々の資料の製作方法について検討できていないため、断然たる意見を持ちあわせていないが、国久保型雁木玉の盛行時期や基部着色の省略化にみられる粗雑な印象からは、充分な検証を経ずに海外のみに求めるのも早計であろう。ただ製作を試みていただいた石井氏の言によれば、24 本もの色ガラスを 1cm 程度の丸玉に配置していくという技術は、斑点文ガラス玉とはまた全く異なる質のものであり、片手間で製作できるような代物ではなく、一定の専従経験によって獲得できる技術と考えられる。国内で確認されたのは 10 点にも満たない数であり、もっと多くの個体が流通していた可能性はある。今後は科学分析の成果とも併せて、国内外出土の雁木玉や模倣品とみられる斑点文ガラス玉等を比較し、製作地論議を進めていく必要があるだろう。

(2) 国久保古墳出土の轡について

本例は、鈹具造立聞式環状鏡板付轡の中でも、飛鳥Ⅰ～Ⅱ（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉）に盛行するといわれる鏡板の規格である、幅約 6.0cm、高さ 7.2cm 程度という値（岡安 1985、鈴木 2008）に比較的近く、この大きさの類例は沼津市・石川 T5 号墳や富士市・中里大久保古墳（ともに川江 1992）、藤枝市・女池ヶ谷 9 号墳（藤枝市郷土博物館編 1990）などでみられる。

ただ本例がこれらの類例と異なるのは、円環の上部を直線的に仕上げる特徴のため、規格よりもやや幅が広くなっている点にある。このようなタイプの鈹具造立聞式環状鏡板付轡は豊橋市・上向嶋 2 号墳（愛知県史編さん委員会 2005）などでみられるが、やや類例が少ないようである。国久保古墳例や上向嶋 2 号墳例の鏡板の円環部分は、幅が約 6.5cm、高さが約 4.0cm を測っているが、このような形状と大きさの類例は、大型矩形立聞式では比較的多く確認することができる。近隣では長泉町・下土狩西 1 号墳（川江 1992）や富士市・東平 1 号墳（川江 1992）、やや幅が狭いが須津 J-6 号墳（大谷・田村 2010）でも確認される。大型矩形立聞式と鈹具造立聞式については 7 世紀代の大量生産に際して規格（特に高さ）が共有されていたことが岡安光彦氏により指摘されており（岡安 1985）、このような円環の形態的特徴についても、両者が同様の性格の工房で一括して生産されていたことを示す証左となるだろう。

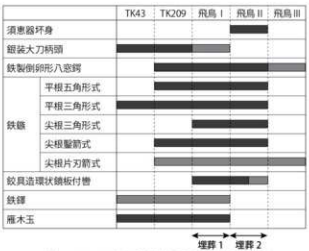
これらの類例はいずれも遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）におさまる。なお遠江Ⅳ期前葉以降には、長泉町・原分古墳 2 号轡（井鍋編 2008）や三島市・夏梅木 6 号墳（鈴木編 2000）例のように、鏡板の規格がさらに小型化したものも現れている（鈴木 2008）。

また刺金の形状については、鈴木一有氏によって鈹具造立聞式の出現段階から採用される T 字形刺金から、TK209 型式期に蕨手形刺金に転換することが指摘されている（鈴木 2008）。蕨手形刺金の形状については言及されていないものの、鏡板が大きいものほど刺金は幅広な板状を呈するが、鏡板の小さいものは細い鉄棒を用いることが指摘される。遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ）に位置づけられる夏梅木 6 号墳は幅 0.5cm の幅広な刺金であるが、それよりも時期の降る原分古墳 2 号轡では幅が 0.2 ～ 0.3cm と極細となる。国久保古墳例では板状の鉄棒であることが明瞭であるが、このような形状は前段階の T 字形刺金に通じる素材や部品をもとに成形していることが推定される。したがって、蕨手形刺金のなかでも比較的古い形態の特徴として捉えることが可能であろう。

以上のことから、国久保古墳出土の轡については、遠江Ⅲ期末葉からⅣ期前葉（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）でも古い時期に比定することができると考えられる。

(3) 国久保古墳出土遺物の編年的位置

これまでの分析の成果から、国久保古墳から出土した副葬品について、それぞれの時期幅を整理したものが第 69 図である。床面上層の遺物のみという限られたデータからではあるが、この図から判断す



第69図　国久保古墳出土遺物の編年的位置

（色の薄い部分は推定）

るに、おおよそ遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）と、遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ）の少なくとも二度にわたって埋葬行為がおこなわれたと考えられる。銀装大刀についてはTK43～TK209型式期に配布されたものが、飛鳥Ⅰの時期に副葬されたと考えたい。それに伴って鉄製倒卵形八窓鍔や鉸具造環状鏡板付轡、鉄鐸、雁木玉などの玉類が副葬され、鉄鏃も第1～2群のものを中心として副葬されたと考えられる（埋葬1）。続いて須恵器坏身や第3群の片刃箭式鉄鏃を副葬品とする埋葬が行われたとみられる（埋葬2）。

東駿河においては横穴式石室の導入期に当たる遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期）頃には石室内への須恵器の副葬がよくみられるものの、続く遠江Ⅲ期後葉～末葉の時期においては石室内に須恵器（特に坏類）の副葬をおこなわない事例がまま存在する[3]。この現象については須恵器の流通形態や埋葬儀礼とも関わる大きな問題であるので、今後の課題として継続して考えていく必要がある。したがって当該期の埋葬行為については、須恵器が伴わないことも念頭において、装飾大刀や鉄鏃、馬具の編年などを積極的に評価して考えていく必要があるだろう。

3. 国久保古墳の評価と被葬者像

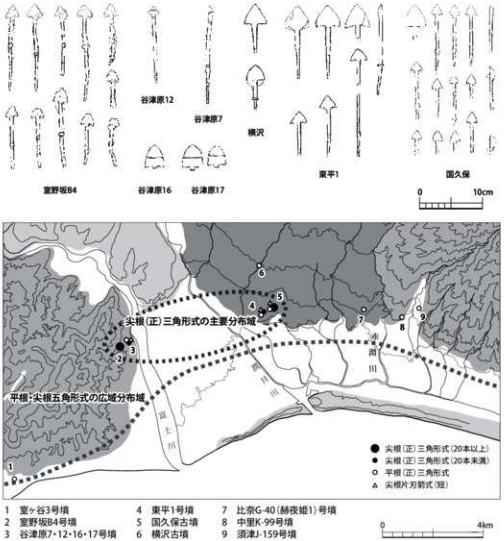
国久保古墳から出土した豊富な副葬品構成は、伝法古墳群はもとより、愛鷹山麓の古墳群と比較しても特徴的な遺物群であるといえる。装飾大刀についてはヤマト王権による地方支配の象徴としての機能が付与されていたと考えられているが（滝瀬 1986 など）、定型化した鉸具造環状鏡板付轡についても王権直轄の工房で大量生産され、直属の東国開発集団を中心に支給されたものと考えられており（岡安 1985）、ともに王権との関わりを示す遺物と考えられる。また雁木玉についても前項での検討によって、畿内から東国へと至る主要交通路上に分布する点から、渡来系要素という一面を有しつつも、王権や地域首長と緊密に結びついた保有者の性格をうかがうことができる。

そうした遺物がある一方で、鉄鏃の保有形態にも大きな特色がみられる。まず53点以上という鉄鏃の保有数については、富士市・中原4号墳や東平1号墳など大量副葬が指摘されながらも未整理の古墳もあるため一概には言えないものの、当該期の周辺の古墳のなかでは飛び抜けて多いものである。愛鷹山南東麓に位置し、金銅装馬具のセットや圭頭大刀、銀象眼円頭大刀、凝灰岩製刳抜式家形石棺などが出土した、当該期の首長墳の一つと考えられる長泉町・原分古墳（井鍋編 2008）においても43点（茎関数）を数える程度であり、国久保古墳の鉄鏃保有形態の背景を考えるためには、階層構造論とは異なる視点での分析が必要となる。

国久保古墳の鉄鏃をみると、少種多量の構成であり、そのほとんどは尖根系鉄鏃であることに特色がある。平根系が極少量であり、それ以外は尖根系鉄鏃という構成自体は、鑿箭式と対になるもう一つの尖根系の主体が、三角形式であるか片刃箭式であるかの大きな違いはあるものの、原分古墳の鉄鏃構成ともよく共通している。菊池吉修氏によれば、原分古墳の尖根系鑿箭式と片刃箭式は非常に規格性の高い形態であり、一括生産された製品を直接入手できるような、製作や集約・分配から近い立場にいた人物が被葬者として想定されている（菊池 2008）。そこで、国久保古墳の鉄鏃保有形態を特徴づけている尖根三角形式について少し詳しく見てみよう。

尖根（正）三角形式鉄鏃の評価　第 70 図は国久保古墳で出土したような鏃身部が正三角形に近い形態を呈する尖根三角形式（長谷川 2003）について、周辺地域における分布状況を表したものである。いわば尖根正三角形式ともいえるこのタイプの鉄鏃は、富士川西岸から富士山南麓の極めて限られた地域でしか分布しておらず、時期的にも遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅰ～Ⅱ）の限られた時期におさまるものとみられる。なかでも富士川西岸の室野坂 B4 号墳（稲垣 1994、小金澤 1998）では 24 点もの多量の尖根三角形式鉄鏃が副葬されており、国久保古墳のものと比べるとやや腸扶が深い形態ではあるが、同じく多量保有の事例として注目されよう。また国久保古墳と近接する東平１号墳（久松 1990）でも、総量は不明ながらも同様の形態の鉄鏃が報告されているが、こちらは国久保古墳例よりも鏃身部がやや大きく、第３節にて尖根三角形式鉄鏃２類としたような幅広なタイプのものが目立っている。これらの鉄鏃についてはその限定的な分布や多量副葬の状況から、富士川西岸から潤井川東岸の地域のどこかで製作されていた可能性は極めて高いとみられる。

東平１号墳では国久保古墳同様、この尖根三角形式をそのまま大きくしたような平根三角形式鉄鏃の幅広なタイプも出土しているが、この平根（正）三角形式については遠江Ⅲ期後葉（TK209 型式）の横沢古墳のほか、富士川西岸から愛鷹山南麓まで広く分布しており、このような平根系鉄鏃とのセットを意識して、遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ）以降に富士川西岸から潤井川東岸において限定的に生産されたも



第 70 図　国久保古墳出土鉄鏃の分布（1/150,000）

のと考えられる。

ここで注意したいのが、この尖根（正）三角形式鉄鏃の分布から想定される地域的限定性とは、あくまで小地域レベルにおける製作・流通範囲としての限定性なのであり、その鉄鏃の形態自体は内山敏行氏によってすでに指摘されている、「東日本専有型式」である棘関長頸鍔抉三角形広身に相当し、7世紀中葉（遠江Ⅳ期前葉）に東北まで分布するものと共通する[4]（内山 2003）。問題はそれが形態に関わる情報のみを共有して東日本の各地で製作されていたのか、それとも限られた地域で作られた製品そのものが広域的に流通していたのかという点であるが、後期鉄鏃の多様な地域性や鉄器製作における技術的階層性の低さを鑑みれば（水野 1995・2008）、前者の考え方が首肯されよう。国久保古墳例の尖根三角形式や鏃箭式の茎部に少量みられた、端部を扁平な逆三角形状に仕上げるタイプなどは、まさに地域限定的な細部形態の特徴であると捉えられる。また分布を同じくする鏃身部長が2.0㎝に満たない尖根片刃箭式についても、同じように限定的な製作が行われていたと推測される[5]。

以上の検討から、国久保古墳が築かれた前後の時期においては富士川西岸から潤井川東岸という限定的な地域において、鉄鏃の地域生産がおこなわれていたことが指摘される。規格性の高い鏃群を所有する古墳が独自の鉄鏃入手経路をもっていたとする菊池氏や井鍋氏（井鍋 2003）の見解に立てば、やはり国久保古墳の被葬者についても原分古墳の被葬者と一部で共通した性格を想定することができる。さらに原分古墳と相違する点である、金銅製品を含まない副葬品構成や鉄鏃の異常なまでの多量副葬からは、畿内中枢部への出仕（鈴木 2010）の如き、ヤマト王権を構成する有力氏族層と直接的な関係を有するものではなく、鉄器製作現場において工人集団を直接的に統括・管掌するような立場の人物像を描くことができるのではないだろうか。そのように考えると、早野浩二氏によって鉄器製作に関わる渡来系の信仰との関連が指摘されている鉄鐸（早野 2008・2010）が、雁木玉とともに国久保古墳から出土したことは特筆される現象であり、氏の論を補強する好例と言えそうである。

伝法古墳群の中の国久保古墳　国久保古墳の位置する伝法古墳群ではそのほかにも、遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式）以降、銀象眼大刀や多量の鉄鏃、鉄製馬具、針状鉄器、U 字形鍬先、鑿、鉈、鉄斧、鉄鉗、須恵器把手付碗などの豊富な副葬品が出土したことで著名な中原 4 号墳（前田 2008）や、全長 8.4 m という当地域では大型の無袖形石室を有し、金銅製鈴や花形飾鋲、馬骨などを出土した横沢古墳（平林・志村 1981）が伝法沢川両岸で相次いで築かれている。これらの古墳については鈴木一有氏や大谷宏治氏によって、鍛冶生産に関与した渡来系技術者や馬匹生産集団との関わりが指摘されているのであり（鈴木 2003・2010、大谷 2010）、国久保古墳の被葬者が生まれる素地は既に前段階までに形成されていたものと考えられる。

そして国久保古墳の築造と前後する時期には、西隣の低丘陵上に東平 1 号墳が築かれる（久松 1990）。この古墳からは銅製杓子形壺鐙や金銅製飾金具、鉄製方形鏡板付轡、銀象嵌大刀、鉄製円頭柄頭といったヤマト王権との密接な関係をうかがわせる資料とともに、鍛冶生産遺跡との関連（井鍋 2003）が指摘されている丁字形利器が出土している。国久保古墳と東平 1 号墳は、浅い谷を挟んで東西に並ぶような立地を呈しており、石室規模もともに近似する。副葬品構成からは、より中央志向の東平 1 号墳と、より技術工人志向の国久保古墳というように評価することも可能であり、また東駿河において唯一「東日本専有型式」の尖根三角形式鉄鏃を主体的に受容した事実からは、関東・東北の古墳社会との紐帯も推察される。東西両域にわたって広域的なネットワークを有したとみられるこの二つの古墳の被葬者達を中心として、伝法古墳群は 7 世紀代に更なる展開期を迎えたものと考えられよう。

4. 伝法古墳群の構造と展開

伝法古墳群内では、認定根拠がやや不十分なものも含めて、現在 71 其の古墳が登録されているが、これまでの調査の蓄積によって古墳の時期や開口方向の判明しているものが多数存在する。最後にこれらの調査履歴や旧地形を参考として（pp.37-40、第 50 図、第 9 表）、それぞれの古墳へ至る墓道について復元を試み、伝法古墳群の展開状況や構造についての分析をおこなう。墓道や幹道、枝道などの概念設定については、水野正好氏の研究を参考とした（水野 1970・1974・1975）。

6 世紀～ 7 世紀初頭の古墳と立地　個々の古墳の開口方向についてみると、多くの古墳が南南東から南東方向の間に集中するのに対し、中村上 1 号墳（13）や中原 3 号墳（32）、中原 4 号墳（33）といった伝法沢川に近い古墳で南から南南西方向に集中していることが指摘される。これらの古墳の時期をみれば、中原 4 号墳は遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式）の須恵器が出土しており、古墳群内でも横穴式石室墳では最古級に位置づけられる。中原 3 号墳や中村上 1 号墳についても提瓶を含んだ須恵器組成から、遠江Ⅲ期後葉～末葉（TK209 型式～飛鳥Ⅰ）までに位置づけられそうである。

また古墳群内では唯一、伝法沢川の西岸に立地する横穴古墳（34）については、前庭部出土の須恵器を初葬に伴うものと判断すれば、遠江Ⅲ期後葉（TK209 型式）に築造時期を求めることができる。また古墳群形成の契機的な古墳とされる伊勢塚古墳（1）では川西Ⅴ期の円筒埴輪が出土しており、同様の埴輪の出土をみた沼津市・長塚古墳（山本編 1999）の須恵器を参考とすれば、現状では遠江Ⅱ期（MT15 型式）前後に比定できよう。伊勢塚古墳の周囲には、金銅装馬具の出土が伝えられる九郎林塚古墳（3）や鏡の出土が伝わる鏡塚古墳（4）、甲冑の出土が伝わる兜塚古墳（5）など、目を見張る副葬品内容の古墳が占地しており、この中には伊勢塚古墳の前後や中原 4 号墳築造までの間に築かれたものが含まれている可能性が高い。

以上のことから、伝法古墳群内でも 6 世紀代から 7 世紀初頭頃までの比較的古い時期の古墳の一群が、伝法沢川の岸辺近くに墓地を選定していた状況が推察される（第 71 図）。開口方向が他の古墳と異なる点についても、伝法沢川沿いの墓道（幹道）を想定することで、理解することができるとみられる。

伝法沢川はその南端で小潤井川・潤井川へと合流し、富士山南麓地域の海の玄関口でもある田子の浦へとつながっている。この潤井川流域では、沢東 A 遺跡（小野・秋元 1995、志村・久保田 1997）や元富士大宮司館跡（馬飼野編 2000）から 5 世紀後半から 6 世紀初頭頃のこの地域では導入期の須恵器が出土しているほか、中桁・中ノ坪遺跡（志村・吉田 2004）や高徳坊遺跡（志村 1986）でも当該期の集落が展開することが確認されている。特に沢東 A 遺跡では子持勾玉や石製模造品、須恵器を用いた水辺の祭祀遺構も検出されており（小野・秋元 1995）、古墳時代後期初頭頃に西日本から関東にかけて成立する新しい儀礼形態を採り入れている点は興味深い。沢東 A 遺跡から 2.4km ほど離れた伊勢塚古墳をはじめとする伝法古墳群の初期の古墳は、まさにこの潤井川の河口付近を中心に立地しているのであり、田子の浦から潤井川をのぼって富士山南麓地域に入ってくる人々への視覚的な効果も期待されていたものとみられる。渡来系技術者集団との関わりが指摘される中原 4 号墳は、それらの古墳へと従属的に配置されたために伝法沢川の上流に立地したものと考えられよう。

7 世紀～ 8 世紀前葉の古墳と立地　それに対して、古墳群東側の広見から石坂の丘陵部に分布する古墳については、現状では 7 世紀以降の比較的新しい時期に築かれた古墳で占められている。これらの古墳は開口方向も南南東から南東方向の間に集中しており、墓道（幹道・枝道・墓道）を推定すれば、それぞれが和田川南岸を起点として、枝道を共有する 2 ～ 4 基ずつの単位群（向坂 1964）レベルで立地していることが明瞭である。

さらに詳しく見ると、これらの古墳へと至る墓道にも大きく二本の流れを推定することが可能であり、一つめが伝法 B-7 ～ 10 号墳（15 ～ 18）や東平 1 号墳（14）から西平 1 ～ 6 号墳（7 ～ 12）へと至る墓道、

二つめが国久保古墳（19）・石坂 C-22 号墳（20）から石坂や広見、片倉へと複数ルートに枝分かれしていく墓道である。これら二本の主要な墓道の起点近くには、前項での検討でその被葬者の性格を推定した東平 1 号墳（14）と国久保古墳（19）がそれぞれ立地しているのであり、7 世紀から 8 世紀の伝法古墳群の展開には、これらの古墳が中心となって推進されていったであろうことが、その立地の面からも指摘することが可能である。やや踏み込んだ議論をすれば、西側の墓道沿いでは、東平 1 号墳や金銅製方頭柄頭や銅製鈴帯金具の出土した西平 1 号墳（7）といった中央との繋がりや官僚的性格が色濃い古墳が築かれ、東側の墓道沿いでは国久保古墳に代表される鉄器製作工人的性格を有する古墳が築かれたとみることも可能かもしれない。8 世紀前葉には西側の墓道を中心とした地区で地方官衙的性格が濃厚な計画的集落である東平遺跡が突如として成立してくるのであり、これらの古墳を築いた集団が集落形成に大きく関わったことは想像に難くない（植松 2002 など）。

以上の分析から、伝法古墳群が 7 世紀初頭頃を画期として、その造墓原理や群構成を大きく変質させていることは明らかである。6 世紀から 7 世紀初頭までの古墳群はあくまでも中心となる集落や首長墳、またそこへ通じる交通路等を大いに意識した構造であるのに対し、7 世紀から 8 世紀前葉の古墳群では視覚的にも明確な首長墳が存在しなければ帰属する集落も明瞭ではなく、言うなれば墓域という意識とその根底に設定された造墓原理のみを働かせて、古墳群を粛々と築き続けていたかのような印象を受ける。後者のような古墳群の存在形態は、まさに新式群集墳（和田 1992）のそれと類似するものであり、これ以降顕著に王権等の地域を越えた権力による直接的な古墳群被葬者集団の把握や秩序化がおこなわれたものと考えたい。

注

1）城陽市・宵山 2 号墳例は大きさや配色も異なるタイプの塰木玉であるが、両端面が平坦になるように研磨していることがうかがえる好例である。

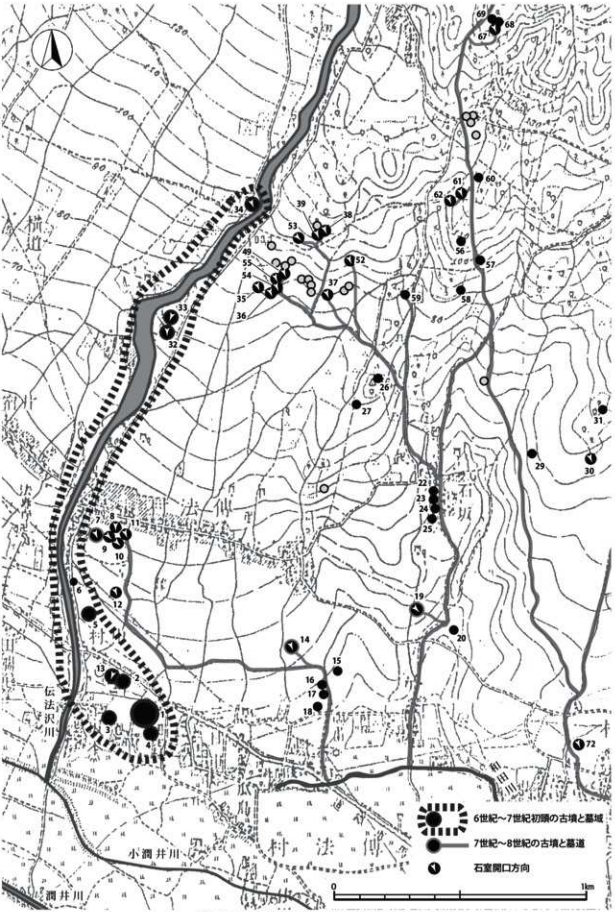
2）国久保古墳例の赤色部分は、実体顕微鏡観察の結果、2 本のガラス棒を用いて（ガラス棒貼付法）太く仕上げられていたことが推測される。

3）富士市・横沢古墳では石室内に提瓶や廏は副葬されても、坏類や高坏は前庭部や周溝から検出されている（平林・志村 1981）。また沼津市・秋葉林 1 号墳は金銅装圭頭大刀や鉄鏃などの豊富な鉄製品が出土しているが、須恵器はわずかに瓶の口縁部片が出土したのみである（大谷 2010）。

4）静岡県内では藤枝市・原古墳群谷稲葉支群高草地区 19 号墳（藤枝市教育委員会編 1981）や静岡市・牧ヶ谷 4 号墳（静岡市教育委員会編 1983）においても類似した尖根三角形式鉄鏃が確認できる。これらの古墳周辺では同様の鉄鏃は見当たらず、その伝播経路については検討の余地があろう。

5）同様の片刃箭式鉄鏃は静岡市・泉ヶ谷稲荷神社 1 号墳（杉山・長谷川 1984）でも確認できる。

（藤村　翔）



第71図　伝法古墳群の構造（1/15,000）

第５節　結語

本章で報告した国久保古墳の発掘調査は、富士市域における地域史的な古墳研究にとどまることなく、畿内や東国との関わりを示す新たな知見も多数もたらした。遺構や遺物の分析を通じて得られた成果は多岐に及ぶが、最後に事実報告の内容を要約するとともに、後論で明らかにされた内容を簡略にまとめて、結語としたい。

１．遺構の調査成果

国久保古墳は、富士山南麓から富士宮市、富士市域へと流れる潤井川の北東岸に位置し、富士山南麓に広がる大淵扇状地の低丘陵上から緩斜面上に築かれた、伝法古墳群内の一古墳である。墳丘は残されていなかったが、周溝の検出状況からは径８ｍ前後の円墳であったと推測される。埋葬施設は南東に向って開口する無袖形横穴式石室であり、開口部に段構造を有する。墓坑は長さ 4.7m、幅約 3.5m の隅丸長方形状であり、深さは推測となるが、開口部の２石を除いた基底石がおおよそ納まる程度の深さがあったとみられる。石室全長は左側壁で 4.7 ｍを測るが、奥壁から段構造までの埋葬部長は 3.7 ｍであり、奥壁幅は 0.95 ｍを測る。床面は再上面のみ確認し、それより下層は保護のため掘削しなかった。

２．遺物の調査成果

石室床面から須恵器や刀装具、鉄鏃、馬具、耳環、鉄鐸、玉類が出土した。刀装具には銀装大刀柄頭や鉄製倒卵形八窓透鍔などが含まれている。鉄鏃は平根系が計３点、尖根系が計 50 点出土しており、少種多量の鉄鏃構成であった。尖根系の大半は三角形式と鏃箭式であったが、広身の尖根三角形式については東駿河では富士川西岸から潤井川東岸に限定的に分布する形態であることが判明し、その大量保有の状況から同地における鉄鏃生産を想定した。また同鉄鏃を「東日本共有型式」（内山 2003）と捉え、関東以東の地域との関係性も指摘した。馬具は鉸具造立聞式環状鏡板付轡が出土したのみであるが、7 世紀に列島規模でみられる定型化した形状のもの（岡安 1985）と考えられる。雁木玉については研究史を参考として製作実験を試み、その製作工程を復元した。また全国の古墳から出土した事例を検討した上で、本例と同タイプのものを国久保型雁木玉として捉え、これらの出土古墳が国久保型以外の雁木玉やその他の装飾付ガラス玉と比べて階層的に低いことを確認した。また国久保型雁木玉副葬古墳の傾向として、海外との繋がりを有しつつも、畿内中枢から地方への主要交通路上に配置された、地域首長層やそれに順ずる層を補佐するような階層の古墳に副葬されることが多いことを指摘した。鉄鐸は既に鉄器製作に関わる渡来系の信仰との関連が指摘されている（早野 2008・2010）ことから、その見解が国久保古墳例にも当てはまることを追認した。

３．伝法古墳群の構造について

これまでの調査履歴を総合化して、伝法古墳群の範囲を再定義することを試みた。そのなかで伝法古墳群の展開過程が７世紀初頭頃を境として大きく変質することを指摘した。その変化の背景には、王権等の地域を越えた権力による、より直接的な伝法古墳群被葬者集団の把握や秩序化がおこなわれたことを想定した。

東駿河の後期古墳については、長泉町・原分古墳を代表として、沼津市・石川古墳群、的場古墳群、秋葉林１号墳や富士市・船津古墳群、須津古墳群、谷津原古墳群など、近年急速に良質な資料が蓄積されており、これまではその埋葬施設等からただ特殊であるとしか評価できなかった古墳の被葬者集団に

ついての議論も深化しつつある。そのような中で、これまでその存在や特殊な遺物内容については知られていても、実態が不明瞭であった伝法古墳群の一端を報告できた意義は大きいだろう。今後も伝法古墳群等の既調査古墳の整理作業を実施し、古墳時代から飛鳥・奈良時代への転換期において東駿河の果たした政治・社会的役割を明らかにしていきたい。

謝辞

資料整理や文献検索にあたり、浅井 猛宏氏、石井 秀史氏、岩原 剛氏、大森 信宏氏、大谷 宏治氏、鈴木 一有氏、滝瀬 芳之氏、南部 裕樹氏、廣瀬 覚氏、藤村 俊氏、降幡 順子氏、宮代 栄一氏の諸氏からは多大なるご教授を受けました。本論に活かせなかった点についてはすべて筆者の力量不足によるところでありますが、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

第 14 表の参考文献

1. 藤田和裕　1984『コフノ隧遺跡』上対馬町文化財調査報告書第１集　上対馬町教育委員会
2. 苅谷道郎・小田富士雄　1990「北九州市こうしんのう２号墳出土硬木玉」『考古学雑誌』76-1
3. 森田　勉・馬田弘稔　1979『ハサコの宮２号墳』『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＸＸ１下巻　福岡県教育委員会
4. 八女市教育委員会　1972「乗場古墳」『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査報告Ⅳ
5. 小田富士雄　1991「日本における武寧王陵系遺物の研究動向」『百済文化』第 21 輯
6. 日高重孝ほか　1955『福島町銭亀塚調査報告』日向遺跡調査報告書第二輯　宮崎県教育委員会
7. 豊島正行ほか　1998『浦辺古墳群　大浦古墳群　梅ヶ崎古墳群　小郡間作経塚』山口県埋蔵文化財センター調査報告第１集　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター
8. 香川県　1983『新編香川叢書考古編』香川県教育委員会
9. 神原英朗ほか　1976『岩田古墳群』山陽町埋蔵文化財調査事務所
10. 松本正信　2010「山崎山古墳群」『姫路市史　第七巻下 資料編 考古』姫路市
11. 城陽市歴史民俗資料館　1996『よみがえる宮山古墳群』歴史民俗資料館展示図録
12. 伊達宗泰ほか　1977『新沢千塚 126 号墳』橿原考古学研究所
13. 河上邦彦ほか　1977『平群・三里古墳』奈良県史跡天然記念物調査報告第 33 冊　橿原考古学研究所
14. 吉田英敏ほか　1999『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会
15. 新編岡崎市史編纂委員会 1989『新編岡崎市史』資料―考古下 16

参考文献

愛知県史編さん委員会　2005『愛知県史　資料編３　考古３　古墳』愛知県
荒井玲子・鶴田晴徳　2006『石川古墳群　第二東名 No.34 地点　第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　沼津市－１』沼津市文化財調査報告書　沼津市教育委員会
石川武男　2008『谷津原古墳群―平成 16・17 年　第４・５次調査報告書―』富士川町文化財調査報告書第 23 集　富士川町教育委員会
稲田甲子男ほか　1994『室野坂古墳群　静岡県富士川町室野坂古墳群第１次発掘調査報告書』富士川町教育委員会
井鋼晉之　2003「富士川西岸～裾根山西麓地域」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第 10 号　(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鋼晉之編　2008『原分古墳　平成 19 年度（都）沼津三島線重点街路事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 184 集　(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所
植松章八　2002「東平遺跡の成立と展開」木ノ内義昭編 2002『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
内山敏行　2003「古墳時代終末期の長頸鏃　―東日本における棘関長頸服挟鏃の評価―」七世紀研究会編『七世紀研究会シンポジウム

武器生産と流通の諸画期』
大谷宏治　2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『静岡県理蔵文化財調査研究所　研究紀要』第10号
（財）静岡県理蔵文化財調査研究所
大谷宏治　2010「出土遺物から見た秋葉林1号墳の被葬者像」『秋葉林遺跡Ⅱ　第二東名No.25地点（縄文時代早期以降編）　第二東名建設事業に伴う理蔵文化財発掘調査報告書　沼津市－4』静岡県理蔵文化財調査研究所調査報告第216集　（財）静岡県理蔵文化財調査研究所
大谷宏治・田村隆太郎編　2010『富士山・愛鷹山麓の古墳群　第二東名No.39・45・52・53地点　第二東名建設事業に伴う理蔵文化財発掘調査報告書　富士市－4』静岡県理蔵文化財調査研究所調査報告　第231集　（財）静岡県理蔵文化財調査研究所
岡安光彦　1984「いわゆる『素環の轡』について　―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX―古墳文化研究会―
岡安光彦　1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第2号　PHALANX―古墳文化研究会―
小野真一ほか　1973『大仁町の古墳文化（付）大仁町の弥生文化』大仁町誌編纂資料第四編　大仁町教育委員会
小野真一・秋本真澄　1976『駿河　石川古墳群―第三次発掘調査報告―』加藤学園考古学研究所
小野真一・秋本真澄ほか　1995『沢東A遺跡―富士不燃建材工業株式会社工場建設に伴う理蔵文化財第3次発掘調査報告書―』富士市教育委員会
苅谷道郎・小田富士雄　1990「北九州市こうしんのう2号墳出土雌木玉」『考古学雑誌』76-1
川江秀孝　1992「馬具」『静岡県史』資料編3　考古3　静岡県
菊池吉修　2008「原分古墳出土の鉄鏃について」井鍋誉之編2008『原分古墳』静岡県理蔵文化財調査研究所調査報告第184集（財）静岡県理蔵文化財調査研究所
菊池吉修　2010「駿河」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
木ノ内義昭　1998「前望状の封鉛施設を有する横穴式石室の意義」『植松章八先生還暦記念論文集　静岡の考古学』静岡の考古学編纂委員会
木ノ内義昭編　2002『東平遺跡　第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会
肥塚隆保　1995「古代手工業への挑戦　古代ガラスの材質」『古代に挑戦する自然科学』クバプロ
肥塚隆保　2007「遺物各論ガラス⑥　古代ガラスの色」小林達夫編『考古学ハンドブック』新書館
後藤守一・中野国雄ほか　1958『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
小金澤保雄ほか　1998『室野坂古墳群―静岡県富士川町室野坂古墳群第1次調査区域記録保存調査報告書―』富士川町教育委員会滝瀬1984
近藤　広　1998「近江高島郡における渡来系文化」『滋賀考古』第20号　滋賀考古学研究会
近藤　広　2003「渡来形の古墳にみる玉」『歴史フォーラム　古代の装飾品からみた大陸文化　記録集』（財）栗東市文化体育振興事業団　文化財センター
佐野五十三　2008「駿河国富士郡における8世紀代の移住と集住」『静岡県考古学研究』40
静岡県考古学会静岡県理蔵文化財調査研究所編　2001『富士川SA関連遺跡』
静岡市教育委員会編　1983『駿河牧ヶ谷古墳群』
志村　博　1986『富士市の理蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会
志村　博　1987「後期古墳に於ける特異な石室構造について―富士市域を中心として」『静岡県博物館協会研究紀要』11　静岡県博物館協会
志村　博　2004『赫夜姫第2号墳発掘調査報告書　～（株）昭和自動車学校移転に伴う理蔵文化財発掘調査報告書～』富士市教育委員会
志村　博・吉田博子　2004「中桁遺跡　王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う理蔵文化財発掘調査報告書」富士市教育委員会
杉山郁栢・山田成洋　1984「静岡市丸子　泉ヶ谷　稲荷神社所古墳群　丸子城泉ヶ谷砦跡」静岡市教育委員会
鈴木一有　2003「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
鈴木一有　2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」井鍋誉之編『原分古墳』静岡県理蔵文化財調査研究所調査報告第184集（財）静岡県理蔵文化財調査研究所
鈴木一有　2009「鳥居松遺跡出土円頭大刀の系譜」『鳥居松遺跡5次　円頭大刀編』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有　2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣

鈴木敏中　2000『夏梅木遺跡群　三島市錦ヶ丘住宅団地宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』三島市教育委員会

鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

滝沢　誠　2000「平沢古墳群出土の胡籙」『沼津市史研究』9　沼津市教育委員会

滝瀬芳之　1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX―古墳文化研究会―

滝瀬芳之　1986「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』NO.266　ニュー・サイエンス社

田辺昭三　1966『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ

田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

中西遺行・大川敬夫ほか編　1985『室ヶ谷遺跡群（室ヶ谷遺跡、・室ヶ谷３号墳発掘調査報告書）』由比町教育委員会

中野国雄　1968『富士市かぐや姫古墳（西比奈）G40 号墳発掘調査概報』静岡県教育委員会編『東名高速道路（静岡県内工事）関係　埋蔵文化財発掘調査報告書』日本道路公団・静岡県教育委員会

西澤正晴　2002「遠江・駿河における鉄製板鐙の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所　研究紀要』第９号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

西　弘海　1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

沼津市教育委員会　1990『清水柳北遺跡発掘調査報告書　その２』沼津市文化財調査報告第 48 集

長谷川　睦　2003「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通―古墳時代後期鉄鏃の地域性の表出とその背景―」『静岡県埋蔵文化財調査　研究所　研究紀要』第 10 号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

早野浩二　2008「古墳時代の鉄鐙について」『研究紀要』第９号　（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター

早野浩二　2010「渥美半島の鉄製祭祀具　―藤原１号墳の鉄鐙と栄嶽古墳群の鉄製馬形―」『渥美半島の考古学　―小野田勝一先生追悼論文集―』　田原市教育委員会

久松義昭　1990『東平第１号墳発掘調査概報』富士市教育委員会

平林将信編　1981『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　東平』富士市教育委員会

平林将信・志村　博　1981『横沢古墳』『西富士道路（富士地区）　岳南広域都市計画道路田子浦臨港線　埋蔵文化財発掘調査報告書』　富士市教育委員会

藤枝市教育委員会編　1981『原古墳群谷稲葉支群高草地区』

藤枝市郷土博物館編　1990『女池ヶ谷古墳群―藤枝市下薮田女池ヶ谷地先の宅地造成に伴う発掘調査報告書―』藤枝市教育委員会

富士市教育委員会編　2007『富士市埋蔵文化財分布地図地名表』

藤根　久・宮野義明　1999「船来山古墳群出土遺物の自然科学分析　ガラス玉等の蛍光Ｘ線分析」『船来山古墳群』　糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会

前田勝己　2008「駿河東部の事例報告　富士市中原４号墳」『静岡県考古学会 2007 年度シンポジウム　東国に伝う横穴式石室　－ 駿河東部の無袖式石室を中心に －』 静岡県考古学会

馬飼野行雄編　2000『元富士大宮司館跡―大宮城跡にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書―』富士宮市文化財調査報告書第 24 集　富士宮市教育委員会

馬淵久夫・江本義理　1980「東洋古代ガラスの化学分析」『東洋古代ガラス―東西交渉史の視点から―』東京国立博物館

水野敏典　1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探索Ⅳ　滝口宏先生追悼考古学論集』

水野敏典　2008「鉄鏃の製作技術にみる生産の実像」『古墳出土品がうつし出す工房の風景　―手工業生産の実像に迫る―』　大阪大谷大学公開講座要旨集　大阪大谷大学

水野正好　1970「群集墳と古墳の終焉」『古代の日本』５－近畿　角川書店

水野正好　1974「雲雀山東尾根中古墳群の群構造とその性格」『古代研究』4

水野正好　1975「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』6

三田敦司ほか　2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集　豊田市教育委員会

宮代栄一　1997「古墳時代の画期構造の復元　―Ｘ字鄙辻金具はどこにつけられたか―」『HOMINIDS』Vol.001　CRA

向坂鋼二　1964「古墳群の群別に関する概念規定」『考古学手帖』21

村上　隆　1996「古代黄金幽霊を支えた金工技術」『'96 特別展　黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘

安永圓平　2006「双六古墳出土の装飾付ガラス玉（通称トンボ玉）について」田中聡一編『双六古墳』壱岐市文化財調査報告書　第７集　壱岐市教育委員会

安永圓平　2008「装飾付ガラス玉研究序論」『橿原考古学研究所論集』第十五　奈良県立橿原考古学研究所

山本恵一編　1999『長塚古墳・清水遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書　第 68 集　沼津市教育委員会

横幕大祐　2001「美濃地方における後期古墳の状況」『第８回東海考古学フォーラム三河大会　東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会

吉田英敏　1999「特殊な玉類の分析」『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会

和田晴吾　1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第５巻近畿Ⅰ　角川書店

渡井義彦　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会

図　版
PLATE

1. 02 沖田遺跡 119 次　2Tr　土層（南から）

2. 02 沖田遺跡 119 次　4Tr（西から）

3. 03 船津 7 古墳群 7 地区　2Tr（東から）

4. 03 船津 7 古墳群 7 地区　掘削状況

5. 04 花守遺跡 2 地区　1Tr（西から）

6. 04 花守遺跡 2 地区　2Tr（東から）

図版 2　市内遺跡

1. 05 比奈 1 古墳群 5 地区　調査前（南東から）

2. 05 比奈 1 古墳群 5 地区　1 Tr 西壁

5. 07 舟久保遺跡 43 地区　1 Tr（東から）

3. 05 比奈 1 古墳群 5 地区　2 Tr（西から）

4. 05 比奈 1 古墳群 5 地区　集石（北西から）

6. 07 舟久保遺跡 43 地区　3 Tr（東から）

7. 08 沖田遺跡 120 次　掘削状況

1.　08 沖田遺跡 120 次　1 Tr 土層

2.　09 沖田遺跡 121 次　8 Tr 遺物出土状況（南から）

3.　09 沖田遺跡 121 次　8 Tr 木質遺物現地保存状況

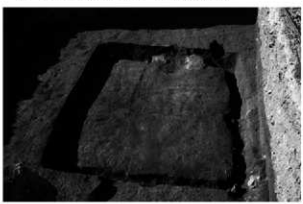
4.　10 桑崎遺跡 1 地区　調査前（北東から）

5.　10 桑崎遺跡 1 地区　9 Tr（北から）

6.　11 花守遺跡 3 地区　1 Tr（西から）

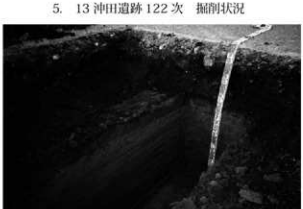
図版 4　市内遺跡

1.　11 花守遺跡 3 地区　1 Tr 北壁土層



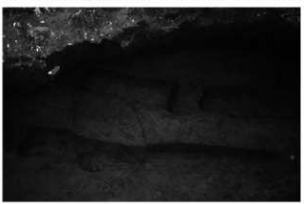
2.　12 国久保遺跡 3 地区　SB01 全景（南西から）

5.　13 沖田遺跡 122 次　掘削状況



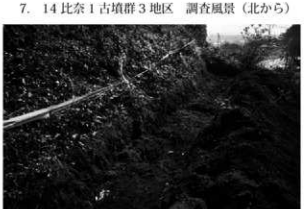
6.　13 沖田遺跡 122 次　4 Tr

3.　12 国久保遺跡 3 地区　SB01 カマド（南西から）



4.　12 国久保遺跡 3 地区　SD01・02（北から）

7.　14 比奈 1 古墳群 3 地区　調査風景（北から）



8.　14 比奈 1 古墳群 3 地区　9 Tr（北から）

1. 15 石坂 2 古墳群 3 地区　3 Tr（北から）

2. 15 石坂 2 古墳群 3 地区　3 Tr 土層西壁

5. 16 舟久保遺跡 45 地区　5 Tr

3. 16 舟久保遺跡 45 地区　掘削状況

4. 17 高山古墳群 2 地区　調査前（南から）

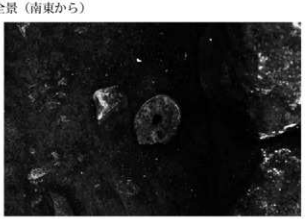
6. 17 高山古墳群 2 地区　6・5・4 Tr（南から）

7. 18 上の段遺跡 2 地区　1 Tr

図版６　国久保古墳

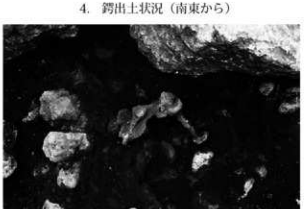
1.　横穴式石室全景（南東から）

2.　奥壁側鉄鏃集中部（南東から）



4.　鍔出土状況（南東から）

3.　須恵器出土状況（南東から）



5.　轡出土状況（北から）

1. 床面石敷検出状況（南東から）

2. 石室中央部石敷（南東から）

4. 石室開口部側石敷（南東から）

3. 石室中央部石敷（南西から）

5. 石室開口部側石敷と段構造（西から）

図版 8　国久保古墳

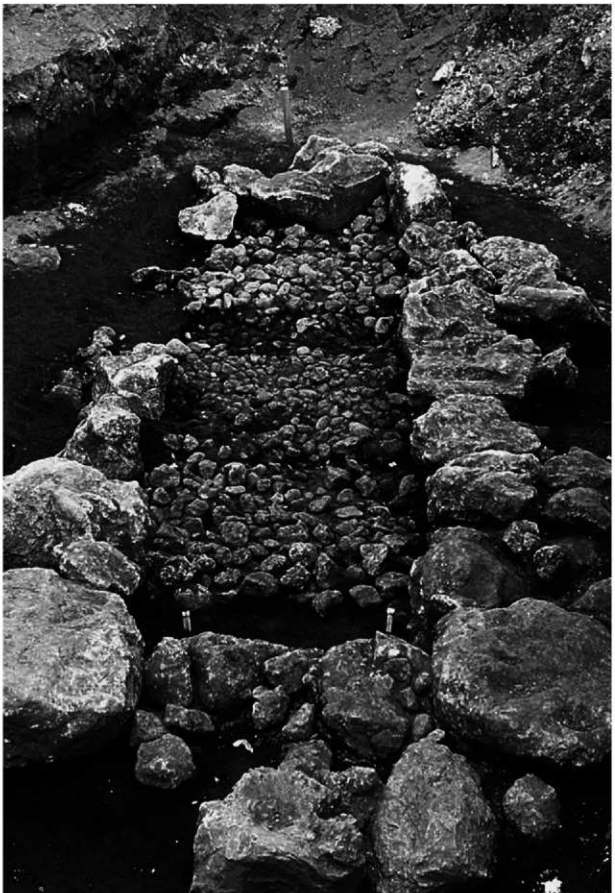
1. 奥壁（南東から）

2. 左側壁（南から）

1. 開口部段構造（北西から）

2. 右側壁（北から）

図版 10　国久保古墳



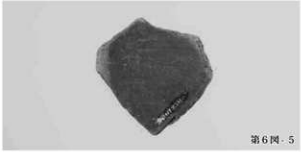
1. 横穴式石室床面検出状況（南東から）

第6図・1

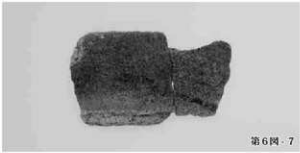
第6図・2

第6図・3

第6図・4


第6図・5

第6図・6


第6図・7

第6図・8

第23図・1

第23図・2

第23図・3

沖田遺跡 119 次・121 次　出土遺物

図版 12　市内遺跡

第 23 図 - 4

第 23 図 - 5

第 23 図 - 6

第 23 図 - 7

第 23 図 - 8

第 23 図 - 9

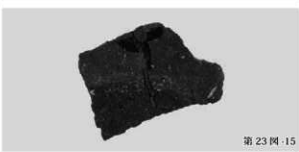
第 23 図 -10

第 23 図 -11

第 23 図 -12

第 23 図 -13

第 23 図 -14

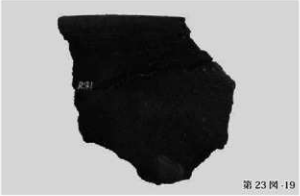

第 23 図 -15

第 23 図 -16

沖田遺跡 121 次　出土遺物

第 23 図 -17

第 23 図 -18


第 23 図 -19

第 23 図 -20

第 23 図 -21

第 23 図 -22

第 23 図 -23

第 23 図 -24

第 23 図 -25

第 23 図 -26

第 23 図 -27

第 23 図 -28

第 23 図 -29

沖田遺跡 121 次　出土遺物

図版 14　市内遺跡

第 23 図 -30

第 23 図 -31

第 23 図 -32

第 23 図 -33

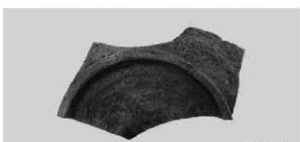
第 23 図 -34

第 23 図 -35

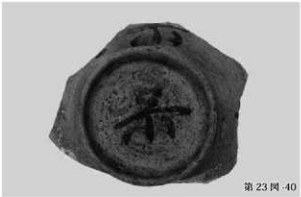
第 23 図 -36

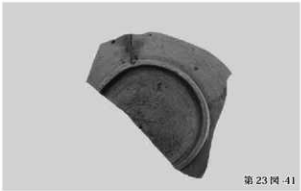
第 23 図 -37

第 23 図 -38

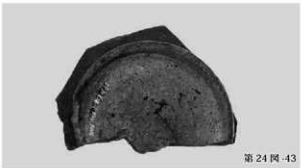

第 23 図 -39

沖田遺跡 121 次　出土遺物


第 23 図 -40


第 23 図 -41

第 24 図 -42


第 24 図 -43

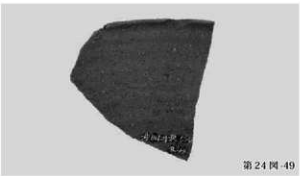
第 24 図 -44

第 24 図 -45

第 24 図 -46

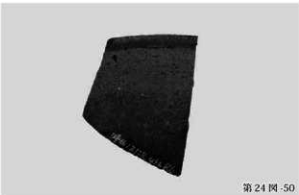
第 24 図 -47

第 24 図 -48


第 24 図 -49

沖田遺跡 121 次　出土遺物

図版 16　市内遺跡

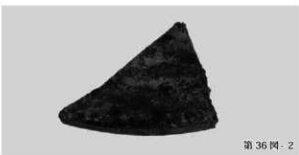

第 24 図 -50

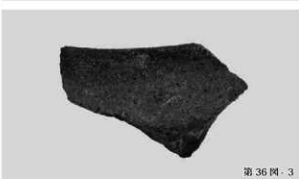
第 24 図 -51

第 24 図 -52

第 24 図 -53

第 36 図 - 1


第 36 図 - 2


第 36 図 - 3

第 36 図 - 4

第 49 図 - 1

沖田遺跡 121 次・国久保遺跡 3 地区・上の段遺跡 2 地区　出土遺物

第 49 図 : 2

第 49 図 : 3

第 49 図 : 4

第 49 図 : 5

第 49 図 : 6

第 49 図 : 7

第 49 図 : 8

第 49 図 : 9

第 49 図 :10

第 49 図 :11

第 49 図 :12

第 49 図 :13

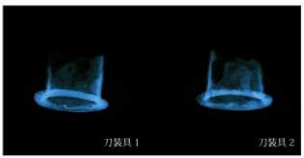
上の段遺跡 2 地区　出土遺物

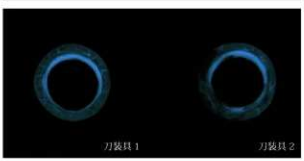
図版 18　国久保古墳

刀装具 1

刀装具 2

刀装具 3

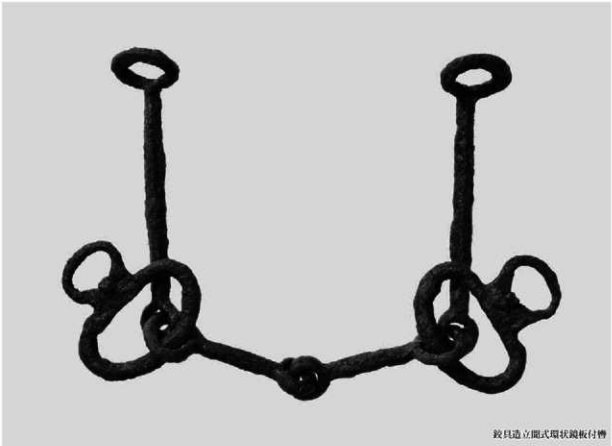

刀装具 1　刀装具 2


刀装具 1　刀装具 2

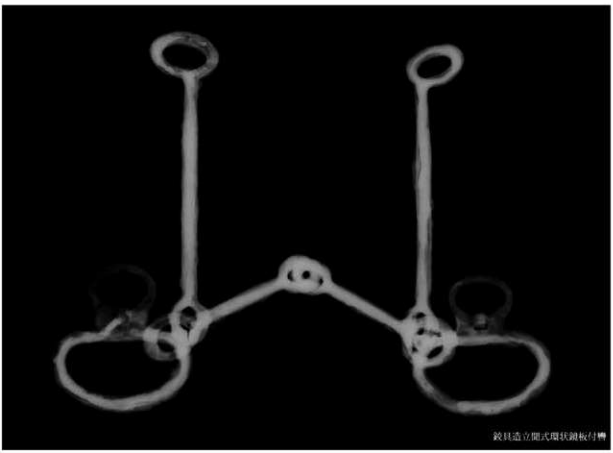
耳環

耳環

石室内出土遺物



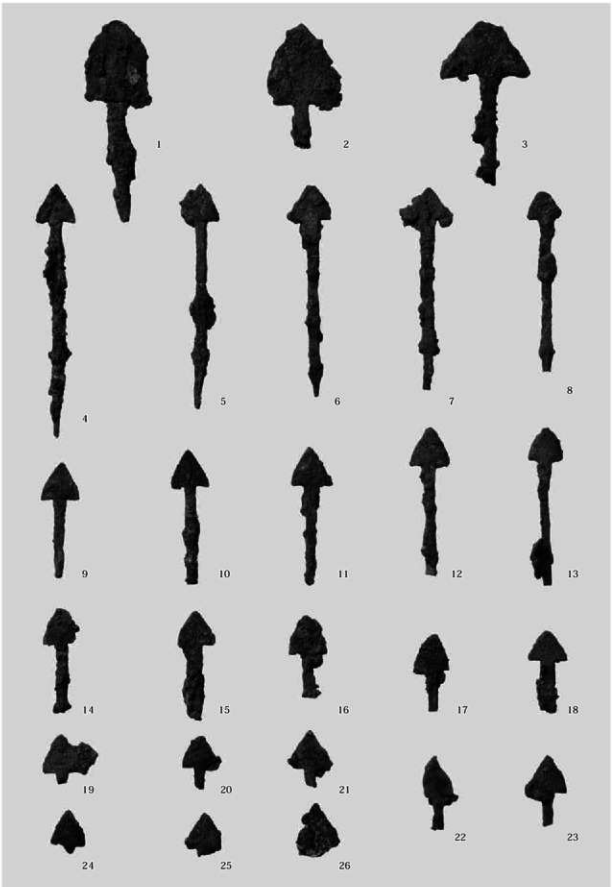
鈴具造立聞式環状鏡板付轡



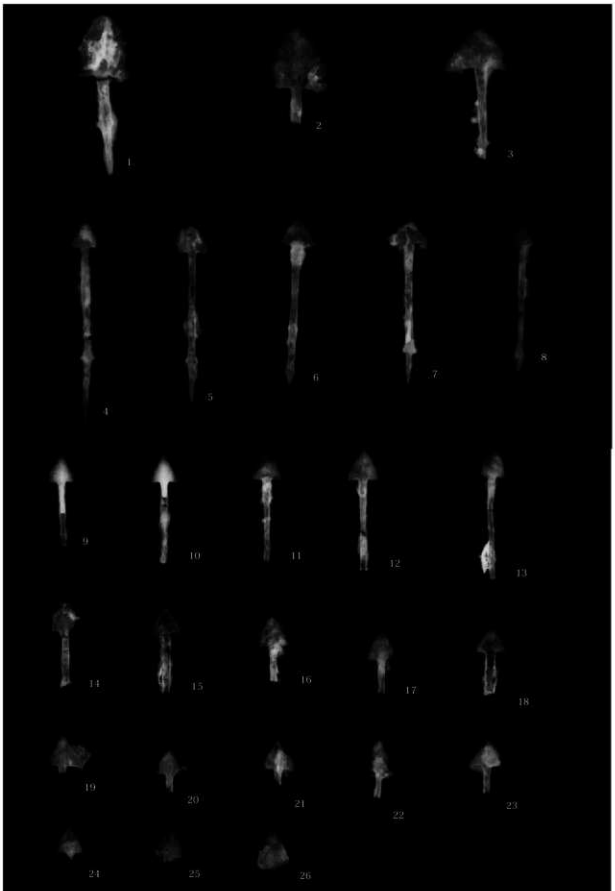
鈴具造立聞式環状鏡板付轡

石室内出土遺物

図版 20　国久保古墳

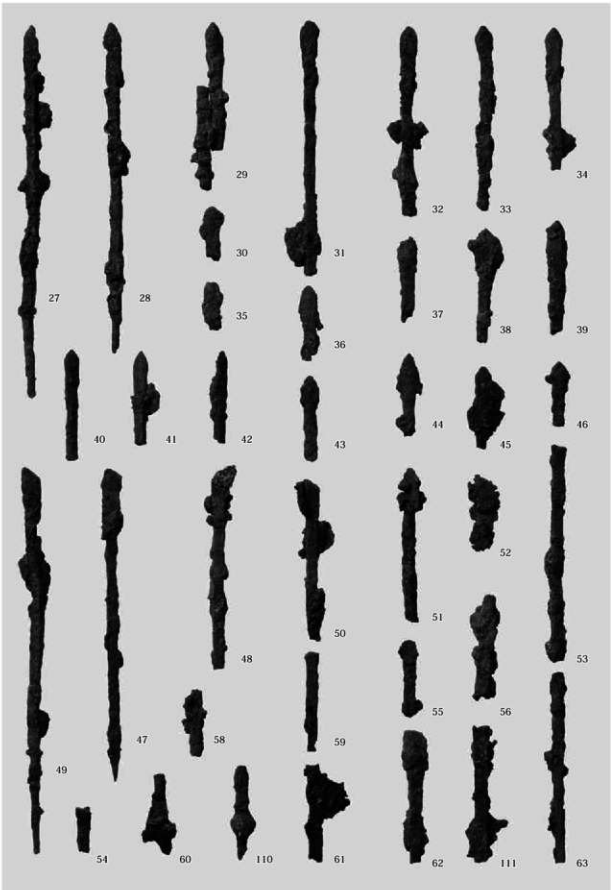


石室内出土鉄鏃

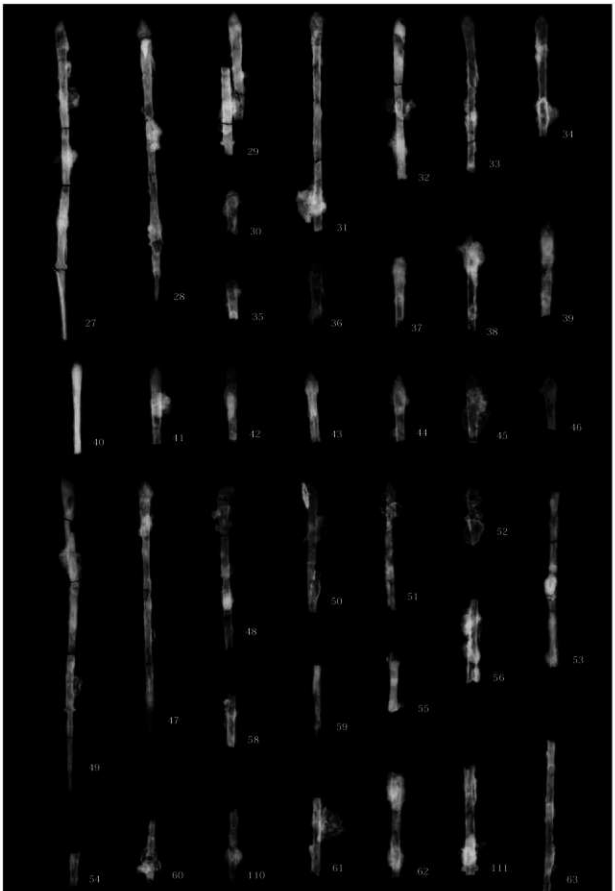


石室内出土鉄鏃

図版 22　国久保古墳

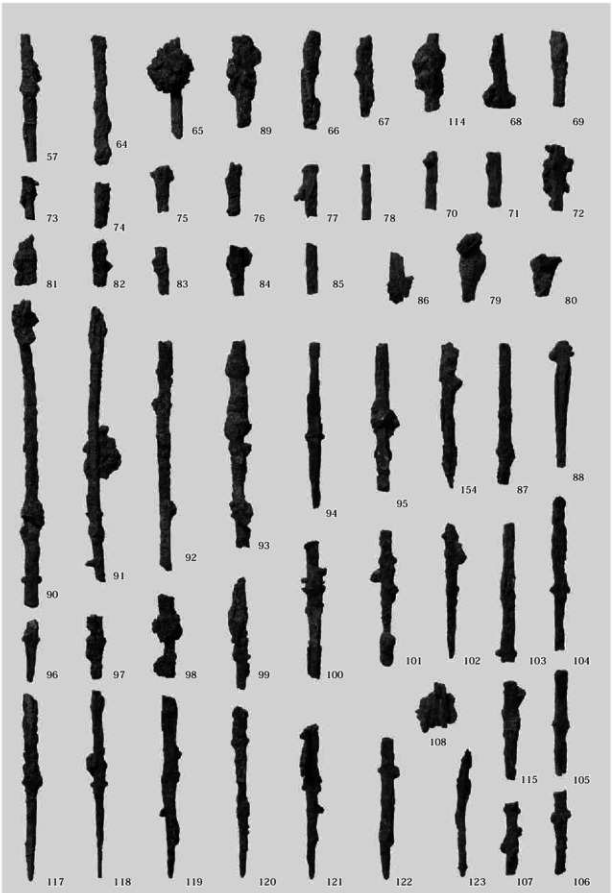


石室内出土鉄鏃

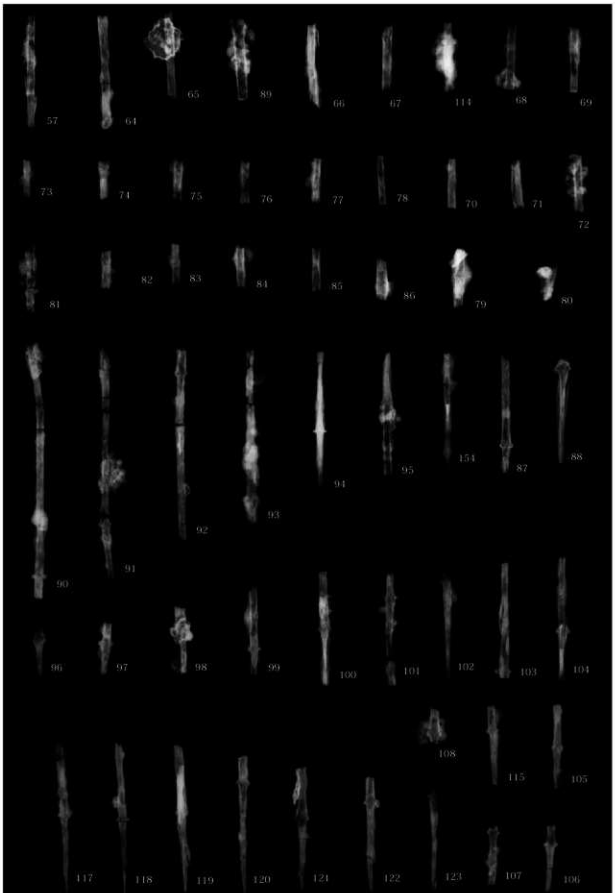

27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
50
51
52
53
54
55
56
58
59
60
61
62
63
110
111

石室内出土鉄鏃

図版 24　国久保古墳

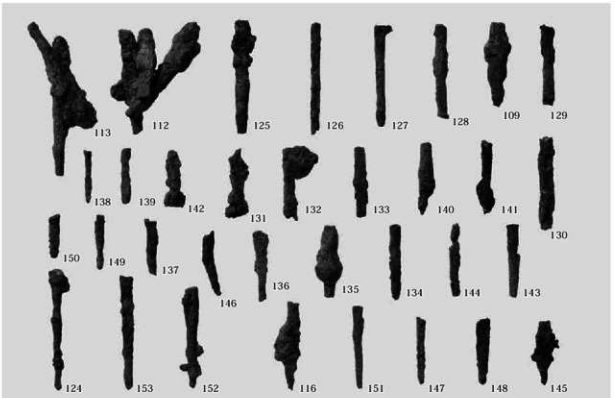


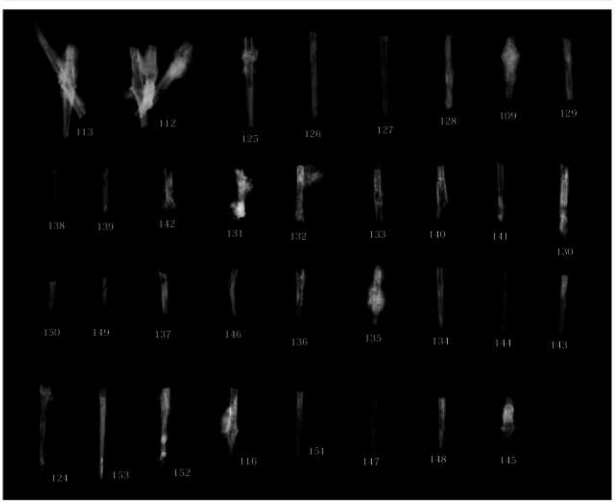
石室内出土鉄鏃


57
64
65
89
66
67
114
68
69
73
74
75
76
77
78
70
71
72
81
82
83
84
85
86
79
80
90
91
92
93
94
95
154
87
88
96
97
98
99
100
101
102
103
104
108
115
105
117
118
119
120
124
122
123
107
106

石室内出土鉄鏃

図版 26　国久保古墳





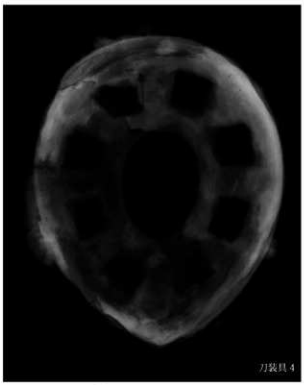
石室内出土鉄鏃

土器 1

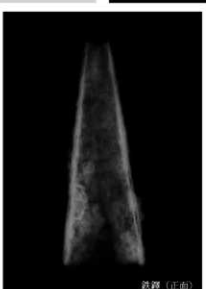
刀装具 5

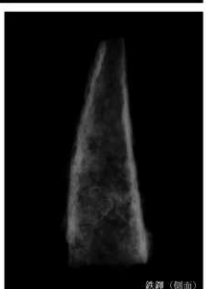
刀装具 5

刀装具 4


刀装具 4

鉄鏃（正面）


鉄鏃（正面）


鉄鏃（側面）

石室内出土遺物

報告書抄録

ふりがな	へいせいはんど ふじしないいせき・でんぽうぐにくぼこふん まいぞうぶんかざいほっくつちょうさほうこくしょ
書名	平成13年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳 埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	藤村 翔 ・ 若林美希 ・ 杉原重夫 ・ 金成友郎
編集機関	富士市教育委員会
所在地	〒417-8601 静岡県富士市永田町1丁目100番地 TEL 0545-55-2875
発行年月日	2011年3月31日

所収番号	ふりがな 所収遺跡名	地区名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	発掘面積	発掘原因	発掘期間
	種別	主な時代	主な構構		主な遺物			特記事項		
第2章 1	くにくぼこふん 国久保遺跡	第2地区	かしわのいせき 富士市国久保	22210	S-45	35° 10′ 23″	138° 40′ 57″	100㎡	試掘・確認調査	20010516 ～ 20010531
	集落跡	古墳	横穴式石室 1基		須恵器・金属製品・石製品・ガラス製品			国久保古墳新規発見		
第3章	くにくぼこふん 国久保古墳		ふじしないいせき 富士市国久保	22210	629	35° 10′ 23″	138° 40′ 56″	100㎡	試掘・確認調査	20010516 ～ 20010531
	古墳	古墳	横穴式石室		須恵器・金属製品・石製品・ガラス製品					
第2章 2	おおたいせき 押田遺跡	第119次調査地点	ふじしちょうがわのぶしちょう 富士市宇東川東町	22210	S-53	35° 10′ 03″	138° 42′ 07″	164㎡	試掘・確認調査	20010522 ～ 20010525
	水田跡・墳墓	古墳・奈良	なし		土師器・須恵器					
第2章 3	ふかうすこふんぐん 船津7古墳群	第7地区	ふじしふなつ 富士市船津	22210		35° 09′ 40″	138° 46′ 23″	220㎡	試掘・確認調査	20010703 ～ 20010704
	古墳群		なし		なし					
第2章 4	ほなもりいせき 花守遺跡	第2地区	ふじしふじおか 富士市富士岡	22210	S-66	35° 09′ 29″	138° 43′ 42″	148㎡	試掘・確認調査	20010807 ～ 20010809
	散布地		なし		なし					
第2章 5	ひがしふんどこ 比丘1古墳群	第5地区	ふじしはらだ 富士市原田	22210		35° 10′ 37″	138° 43′ 11″	227㎡	試掘・確認調査	20010820 ～ 20010824
	古墳群		なし		なし					
第2章 6	こもりいせき 児森遺跡	第2地区	ふじしなかぢま 富士市中里	22210	S-108	35° 10′ 00″	138° 44′ 03″	60㎡	試掘・確認調査	20010901
	集落跡	古墳	竪穴建物跡		土師器・須恵器			別途本報告		
第2章 7	みなくぼいせき 舟久保遺跡	第43地区	ふじしいまいずみ 富士市今泉	22210	S-46	35° 10′ 20″	138° 41′ 16″	192㎡	試掘・確認調査	20010912 ～ 20010914
	集落跡		なし		なし					
第2章 8	おおたいせき 押田遺跡	第120次調査地点	ふじしでんぼう 富士市伝法	22210	S-53	35° 09′ 29″	138° 41′ 17″	101㎡	試掘・確認調査	20010926 ～ 20010927
	水田跡・墳墓		なし		なし					
第2章 9	おおたいせき 押田遺跡	第121次調査地点	ふじしちょうがわのぶしちょう 富士市宇東川東町	22210	S-53	35° 10′ 02″	138° 42′ 08″	153㎡	試掘・確認調査	20011009 ～ 20011015
	水田跡・墳墓	古墳・平安	性格不明遺構		土師器・須恵器・灰釉陶器・木製品					
第2章 10	とさあいせき 桑崎遺跡	第1地区	ふじしかさき 富士市桑崎	22210	S-26	35° 12′ 12″	138° 44′ 13″	113㎡	試掘・確認調査	20011017 ～ 20011107
	散布地		なし		なし					
第2章 11	ほなもりいせき 花守遺跡	第3地区	ふじしふじおか 富士市富士岡	22210	S-66	35° 09′ 44″	138° 43′ 42″	81㎡	試掘・確認調査	20011112 ～ 20011113
	散布地		なし		なし					
第2章 12	くにくぼいせき 国久保遺跡	第3地区	ふじしくにくぼ 富士市国久保	22210	S-45	35° 10′ 22″	138° 40′ 49″	178㎡	試掘・確認調査	20011119 ～ 20011123
	集落跡	平安	竪穴建物跡・掘状遺構・土坑		土師器・須恵器・灰釉陶器					
第2章 13	おおたいせき 押田遺跡	第122次調査地点	ふじしいまいずみ 富士市今泉	22210	S-53	35° 09′ 26″	138° 42′ 02″	151㎡	試掘・確認調査	20020122 ～ 20020124
	水田跡・墳墓		なし		なし					
第2章 14	ひがしこふんぐん 比丘1古墳群	第3地区	ふじしひな 富士市比奈	22210		35° 10′ 32″	138° 43′ 19″	10㎡	試掘・確認調査	20020123 ～ 20020124
	古墳群		なし		なし					
第2章 15	おしがさこふんぐん 石塚2古墳群	第3地区	ふじしおおがた 富士市大淵	22210		35° 11′ 18″	138° 41′ 04″	179㎡	試掘・確認調査	20020204
	古墳群		なし		なし					
第2章 16	みなくぼいせき 舟久保遺跡	第45地区	ふじしいまいずみ 富士市今泉	22210	S-46	35° 10′ 24″	138° 41′ 48″	21㎡	試掘・確認調査	20020205
	集落跡		なし		なし					
第2章 17	たかやまこふんぐん 高山古墳群	第2地区	ふじしいまいずみ 富士市今泉	22210		35° 10′ 26″	138° 41′ 51″	318㎡	試掘・確認調査	20020304 ～ 20020308
	古墳群		なし		なし					
第2章 18	うえのだんいせき 上の段遺跡	第2地区	ふじしさかい 富士市堺	22210	S-82	35° 09′ 18″	138° 45′ 43″	8㎡	試掘・確認調査	20020318 ～ 20020320
	散布地		なし		縄文土器・土師器・須恵器					

平成13年度　富士市内遺跡・伝法 国久保古墳
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月31日　発行

編集・発行　富士市教育委員会
〒417-8601　静岡県富士市永田町一丁目100番地

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒410-0871　静岡県沼津市西間門68番地の1

（富士市行政資料登録番号　22-59）